

# 知の万華鏡

名古屋大学附属図書館 2005年秋季特別展

書物からみた18世紀の西洋と東洋

## 図録ガイド



2005年

10月21日(金) 11月11日(金)

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

## ご 挨拶

名古屋大学附属図書館及び附属図書館研究開発室では、2005年秋季特別展として、名古屋大学大学院経済学研究科、同文学研究科および日本18世紀学会との共催により、「知の万華鏡－書物からみた18世紀の西洋と東洋－」を開催いたします。

本特別展が対象とする18世紀は、ヨーロッパでは「啓蒙の時代」と呼ばれ、近代的な考え方の原型が形作られた時代でした。出版文化が開花したこの時代は、情報化や科学の普及による知識の転換期にあたり、この点で、同時代の東洋と共通するのみならず、現代とも通じる性格を持っていたことが注目されはじめています。

翻って、名古屋大学附属図書館には、ホップズ・コレクションをはじめ、西洋近代科学黎明期の貴重資料が多数所蔵されており、これまで、西洋近代思想史等の研究に貢献するとともに、その成果を、『『百科全書』とその時代展』（1999年秋）などで公開して参りました。また、東洋関係でも、神宮皇学館文庫など和漢古典籍の豊富な資料があり、その悉皆調査が進みつつあるところです。今後さらに、所蔵資料の調査研究活動や特色あるコレクション構築を進め、学内外の文献センターとしての役割を担っていきたいと考えております。

今回の特別展は、こうした経緯をふまえ、西洋のみならず、東洋も視野に入れることで、18世紀東西の知識世界の動きを総合的にとらえる契機となればと企画いたしました。今後の研究展開に期待すべき部分も多くあろうかと思いますが、新たな切り口とともに、ふだんは貴重書庫に保存されている書物を直接ご覧いただき、この時代の息吹を感じ取っていただければ幸いです。

最後になりましたが、本特別展開催にあたり、ご協力いただきました関係各位と関係各機関に対し厚くお礼申し上げます。

2005年10月 名古屋大学附属図書館長  
教授 伊 藤 義 人

# 目 次

ご挨拶

はじめに	3
I 情報化の幕開け	5
コラム①：18世紀の書棚	9
コラム②：中国出版事情	10
参考資料：『中国出版史話』	11
II 未知なるものへの欲望	13
コラム③：科学における想像力	24
参考資料：東西の宇宙人実在説	26
III 新しい科学	28
IV 人間の学と古典の成立	35
V 本の世界旅行	44
コラム④：吉雄常三の履歴・作品・関連資料	48
座談会 「書物の18世紀学」	51
〔第1部〕 出版を通じてみたヨーロッパと東アジア	51
〔第2部〕 18世紀の日本の書物	65
参考文献	78

## はじめに

「啓蒙の時代」と呼ばれる18世紀は、ヨーロッパで現代的な考え方の基礎が築かれていった時代だった。18世紀のはじめには、アイザック・ニュートンの物理学によって人類が宇宙を合理的に説明したと信じられた。この知性に対する自信に基づいて、人間や社会を同じように科学的に理解しようとする試みが繰り返されることになった。そしてその中から、現代人の考え方の基礎となった、社会や人間に関する学問が生まれてきた。またアメリカ独立宣言やフランス人権宣言にまとめられた、個人の自由を保障する人間の基本的な権利の思想が、法律になり、政治体制を形作るようになった。このような意味でこの時期は、19世紀以後から世界中にひろがっていくような、「近代的」な知性とそれに基づく文化、政治、社会、経済の仕組みが誕生した、人類の歴史の上でも重要な時代であったといえる。

書物というめがねを通じてみたとき、この時代がどのようなものだったのかを、具体的に知ることができる。「科学革命」と呼ばれた17世紀における近代科学の飛躍的な発展と比べ、18世紀は華々しい知識の開花の時代ではない。むしろ社会全体への知識の普及と、それを支える公衆の知識欲が花開いたのがこの世紀だった。そして出版の普及がそれを支えた。当時のヨーロッパは、ヨーロッパの歴史上初めて本が大量に印刷され、流通するようになった、一種の「情報革命」を迎えていた。

しかし19世紀以後の近代世界の原型を作り出したとはいえ、この時代には近代と呼ぶには異質な世界がひろがっていた。従来はこの「啓蒙の時代」の、近代の幕開けという面が強調されてきた。しかし最近の研究では、この時代の知性のあり方が、それ以後の時代とは異なる性質を持っていたことが強調されるようになってきた。

そこには、人類の知性の転換期という点において、生命科学と宇宙開発や環境問題や情報化によって世界が大きく変化している現在とも通じる面が存在していた。この時代では、まだ19世紀後半以後のように知識の専門分化が進まず、自然と人間についての知識が総合されていた。そこには「文理融合」というより、いわば「文理未分化」の総合的な知の枠組みが存在していた。「科学 science」、「科学者 scientist」という言葉は19世紀の発明であり、この時代の科学者たちは「自然哲学 natural philosophy」に従事する「自然哲学者 natural philosopher」と呼ばれていた。フランスのように言論や学問や芸術の自由を求める知識人と教会が激しく対立した国もあったが、「客観的」な「科学」と、人間がどう行動し、どう生きるべきかを説く倫理や哲学、さらには人生の目的を教える宗教は、相互に大きく干渉することなく、なだらかに結びついていた。数学を中心にして専門家としての科学者が現れつつあったとはいえ、科学や学問はアマチュアと専門家の双方によって学ばれ、支えられた。多くの場合、科学者や文人や政治家が同じ席で議論をたたかわせた。階級社会だったヨーロッパでは社会の上層とそれ以外の人々が文化的にも異なった環境にいたが、この時代になると社会の一般の人々も、啓蒙書や公開実験などを通じて、意欲的に科学の知識を学び、楽しんだ。

また多くの優れた学者、思想家を生み出したとはいえ、この時代には思索や創作は必ずしも個人的な営みではなかった。著作権の観念はまだ生まれず、自由に出版が行われた。検閲の問題もあり、多くの重要な思想書は匿名あるいは偽名で出版された。同じ書物にもいくつかの版があり、本文が異なることもしばしばだった。出版者が本文を自由に書き換えることもしばしばあった。18世紀を代表する知識の総合である「百科全書」にさえ、いくつかの版が存在し、それぞれに独自の意義を持っている。手書きのまま流通した作品には次々に手が加えられ、変貌していった。いわば「オリジナル」の著者ばかりでなく、出版者や読者までが作品の制作にかかわっていた。この時代は書物の「著者」が明確でなく、知識の生産者と受容者が明確に分かれないままで交流する世界だったのである。

目を東に向けると、意外なほどヨーロッパと共通する姿が現れる。従来停滞していたと思われて

いた同時代の日本、中国は、発展しつつある西洋の知識を旺盛に吸収していたことがわかっている。中国には明代からカトリックの宣教師が訪れ、新しい科学の知識を宮廷に伝えていた。18世紀清朝の乾隆帝は中国の書物を網羅する全集である四庫全書を企画し、伝統的知識を集大成したが、その中にはヨーロッパ科学の紹介も含まれていた。江戸時代のヨーロッパ科学の理解は、それら中国語の文献から始まった。また海禁政策を主導した江戸幕府は、渡来した文献を収集し、保蔵していた。このような中央権力ばかりでなく、情報の受容や発信のネットワークが社会の中に広がっていった。江戸や大坂や京都のような大都市には、武士と町人と学者、文人が交流し、議論をたたかわせるサークルがいくつもあった。そこでは「鎖国」下で、意外なほど開かれた情報の世界が広がっていた。

またこれら北東アジアの国々では、新しい自然と人間の像の発見とそれらについての知識の総合や、百科事典的知識の誕生につながる「網羅すること」への熱狂など、知的世界のあり方において同時代の西洋と共通する性格を持った知的世界が生まれていた。あるいはこの時代の西洋と日本では出版文化が栄え、知識のあり方を変えていったが、それはさまざまな点で現在のあり方とも異なっていた。西洋、日本の意外な親近性さえ見られる。最後に、この時代は東西ともに、一人で「黙読」する孤独な読者によって書物が使用されたのではなく、多くの場合文字は声に出され、それが公共の場で聞かれることが多かった点で、東西を問わず共通する面があった。現在ではこのような東西の知識世界の動きを総合的にとらえる視点が求められている。

西洋近代思想史研究の拠点の一つとして、名古屋大学は、17世紀から18世紀の政治・倫理・社会思想に関するホップズ・コレクション、18世紀フランス自由思想家たちの著作集、18、19世紀英語圏、フランス語圏の雑誌コレクションなど、この時代についての貴重な資料を所蔵している。アジアについては、中国の四庫全書およびその補遺の全巻ファクシミリ版、日本については神宮皇学館文庫や和漢三才図会などがある。これらは中部圏のみならず、全国的に見ても学問的価値の高い文献資料だといえる。

本展示会では、18世紀からアヘン戦争や開国によって東西の関係が決定的に変化する19世紀中葉までを一つの時代と考え、名古屋大学が所蔵するこの時代の和・漢・洋の代表的な資料を展示することで、近世の東西の知的世界の姿を、書物という「もの」のあり方を通じて示すことをねらいとしている。

# I 情報化の幕開け

ヨーロッパの18世紀は、情報時代の幕開けを迎えていた。17世紀に普及した活字が出版文化をはぐくみ、新しい作家と読者を生み出した。まだ書物は高価で、予約販売されることも多かったが、筆写によってのみ著作が流通した中世にくらべ、飛躍的に多くの読者層が生まれ、それは富裕層から中間層へと広がりを見せた。学術書、文学書ばかりでなく、娯楽、教養、実用書、あるいは政治批判と、さまざまな用途を持った書物の類型が誕生し、雑誌や新聞も広い読者を獲得していった。

しかしこの時代の出版文化は、現代とは大きく異なっていた。フランスなど多くの国では検閲制度が残存し、「言論の自由」はいまだ実現されていなかった。刺激的な新思想は、検閲がゆるやかか、存在しないイングランドやオランダで出版され、フランス国内に持ち込まれたり、地下出版として公式には認められないままで流通した。イングランドやオランダで出版されたことを装うことが、フランス国内でベスト・セラーとなる条件とさえなった。さらに著作権が存在しないため、著作は勝手に出版されたり、書き加えられたりした。著者たち自身、そのような意識が希薄だった。またこの時代の書物は、音読が一般的で、公の場でも音読されていた（中世に誕生した「黙読」が全階層に広がるのは19世紀以後のことである）。そのため文字が読めない人々も、書物や雑誌や新聞の内容に通じることができた。それは世紀の後半の百科全書の出版へと結晶する、一種の集団的な編集作業だったといえよう。

また筆写の伝統も継続し、マニュスクリプト出版ともいべき文化をつくりあげていた。大学の講義は書き写されて立派に製本され、時にはそのまま流通した。手書きのノートや書簡もひろく回覧され、出版された書物が書写されて流通することさえあった。このような出版のあり方の点では、出版文化が花開いた同時代の日本も驚くほど類似していた。

日本やヨーロッパに対して元代からの長い出版文化を誇る中国では、マニュスクリプト出版は存在しなかった。刊本がすべてであり、著者やその家族たちは私財をつぎ込んで著書を出版した。そして書物の校訂にかなり無頓着だった同時代のヨーロッパと比べ、正確なテキストをつくりあげることに学者たちの心血が注がれた。康熙帝、乾隆帝をはじめ清朝の皇帝たちも正しいテキストを確定することに熱心であり、徹底的な出版物の収集とその校訂作業を通じて、中華文明の知識の集成を図った。国家事業としての四庫全書は、その現れである。

## 手稿について

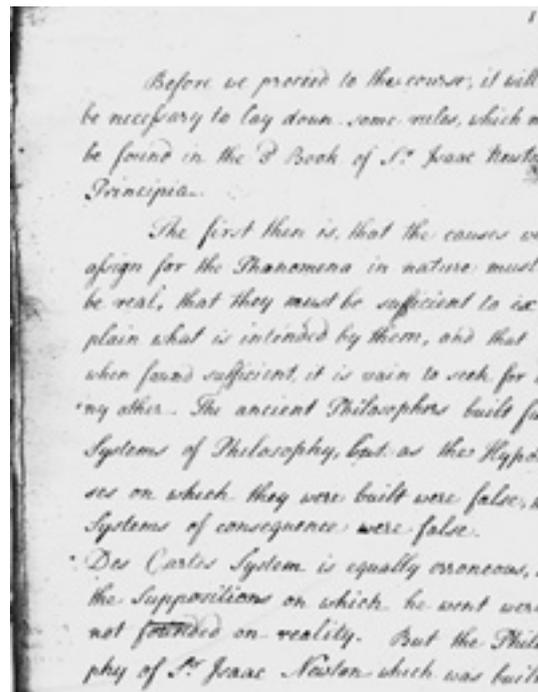
一昔前まで「活字信仰」という言葉があったように、現代では出版物と手書きの文書は厳然と区別されている。出版は一般の人間には難しく、作家、学者、出版者などの専門家がほぼ独占してきた。だがこのようなあり方は19世紀からであり、出版文化の初期にあたる18世紀には、「刊本」と「手書き」には大きな区別はなかった。書物が高価なため、あるいは検閲を逃れるため等々さまざまな理由で、手書きの文書が立派に流通した。それにはゴシップのような「ニュース」や個人攻撃のための怪文書もあれば、思想的、学問的に重要な作品もそうして回し読みされた。啓蒙思想に重要な影響を与えたイギリスの「危険思想家」トールランドが晩年に書いた汎神論に関する著作も、そのようにしてフランスにまで伝播していった。それらの中には著者を騙ったものもあり、どのような経緯で成立し、どんな役割を果たしたのか研究しなければならないものも多い。

「危険」な文書でなくても、手稿は思想、学問の発達に大きな意味を持った。科学の制度化以前のこの時代、印刷された出版物だけが学問的コミュニケーションの手段ではなかった。それに加え、むしろそれ以上に、大学での講義、研究会等での報告、専門家の間の書簡が、重要な情報流通と討

議の手段となっていた。たとえば有名な教授の「講義ノート」はしばしば出版物のように製本され、所蔵され、流通した。しかもこれらのメディアの流通範囲の違いに応じて、時としては同一の著者からまったく異なった情報が発信されることもあった。ヨーロッパばかりでなく同時代の日本にも、同じような現象が見られた。このようなあり方は、19世紀から20世紀の情報化のあり方よりも、速報性のため先端的な科学で電子メールが論文より重視されたり、出版業界や学界や政界と関係を持たない人でも自由に情報を発信し、時には社会に影響を与えるインターネットの文化が発展しつつある現代に似ているといえよう。

## 1. 「アダム・ファーガスン道徳哲学講義ノート」(1767-1776) 水田洋所蔵

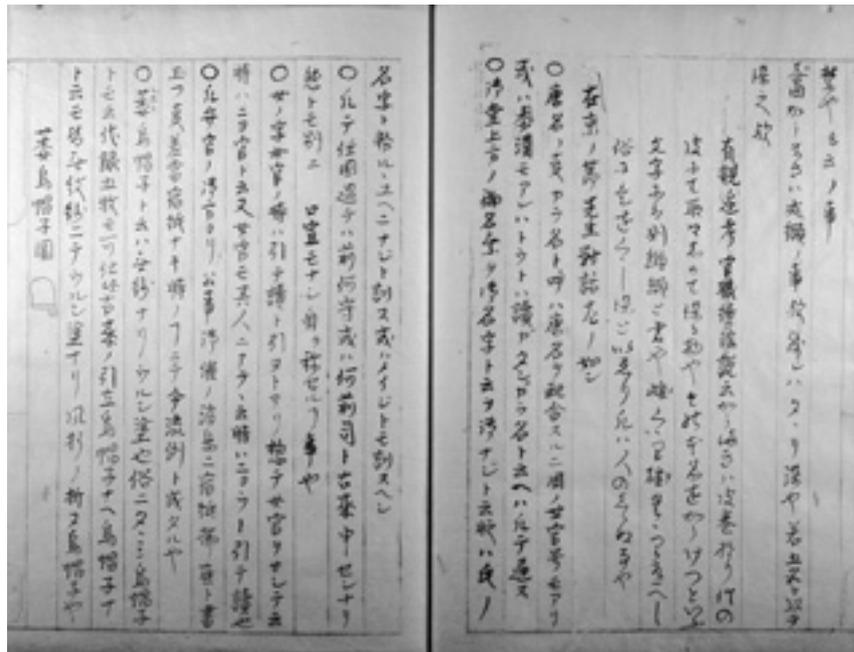
エディンバラ大学道徳哲学教授、アダム・ファーガスン Ferguson, Adam (1723-1816) の講義で学生が筆記した講義ノートであり、ミック Meek, Ronald L. (1917-1978) によると、このノートは、ジェイムズ・ステュアートの『政治経済原理 *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*』(1767) とアダム・スミスの『諸国民の富 *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*』(1776) の両書が刊行された間のものと推定されている。ファーガスンは、1764年から1785年までの約20年間、同大学で道徳哲学教授を務めており、自筆の講義草稿(1775-1785)は現在、エディンバラ大学図書館が所蔵している。



## 参考) 「有職愚問抄」(1759) 来田有親問・速水房常答

中央館・神宮皇学館文庫所蔵

有職故実に関する問答体の解説書(漢字カナ交じり)。伊勢外宮御師の来田有親(親岑とも。1706~1768)が、在京の国学者速水房常(?~1769)から教授された内容を記録し、彼自身の追考を加えた自筆稿本。「在京ノ節、先生対話左ノ如シ」とある雑談記事を含む。本文末には、元文3年正月付で来田舎人(有親)が速水に差し出した、職原抄秘決・装束抄等伝授の際の誓紙(儀定)の写しがある。日本では、学問はこのように伝授されて手稿本が作られ、転写あるいは回覧されて流通していったのである。



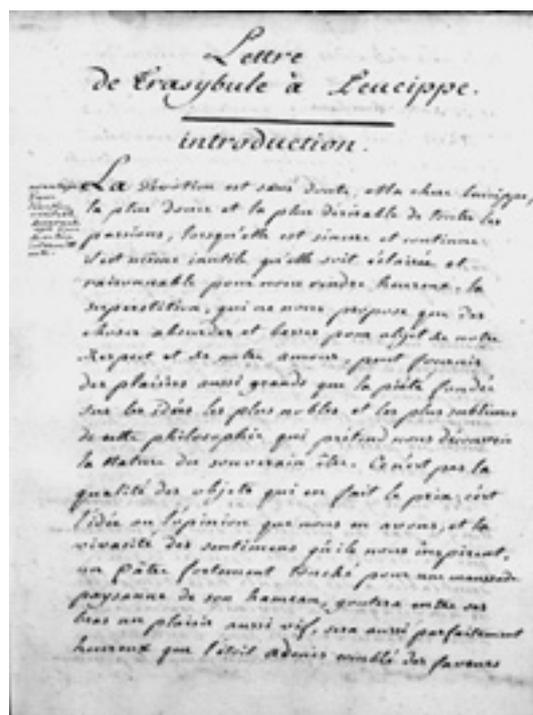
2. ニコラ・フレレ (1688-1749) 「トラシユブロスからレウキッポスへの手紙」

(写本、年未詳)

Fréret, Nicolas. *Lettre de Thrasybule à Leucippe*. Ms. (transcript, handwritten)

中央館所蔵・貴重書室「自由思想家コレクション」

同写本の冒頭には、「フランス碑文アカデミー」のニコラ・フレレの自由思想的な見解を著した原稿を本人の死後に書き写したとある。タイトル・ページの見開きには、別の筆跡で「著名なフレレは、デイドロの見解では、哲学を百科全書的博識、語源学に、あらゆる学者のうちで最もうまく適用できた学者である」とあり、デイドロと親しい人間の手になるものの可能性が考えられる。刊本と比べると若干の異同があるため、刊本の原写本とは別系統のものであると思われる。



### 3. ジョン・トーランド (1670–1722) 「汎神論」 (写本、1725)

Toland, John. *Pantheisticon*. 1725. Ms. (transcript, handwritten)

中央館所蔵・貴重書室「自由思想家コレクション」

トーランドによる汎神論宣言の書の写本。原著はラテン語で1720年に執筆され、フランス語訳は1725年に作られたとされる。フランス語訳の写本は、公共図書館ならびに個人蔵書として9つの存在が専門研究者によって確認されている。ただし、そこには名古屋大学附属図書館所蔵の同写本は数えられていない。トーランドはイギリスの思想家で、キリスト教会を批判し、啓蒙運動に重要な影響を与えた。



### 4. 『スペクテーター』 (第8版1726、創刊は1711) *The Spectator*, 8th ed. London, 1726.

### 5. 『ガーディアン』 (1745、創刊は1713) *The Guardian*. London, 1745.

ともに経済図書室所蔵・貴重図書



Addison



Steele

ジョーゼフ・アディソン Addison, Joseph (1672–1719) とリチャード・スティール Steele, Richard (1672–1729) によって創刊、寄稿された雑誌の合本。両者ははじめ『タトラー *The Tatler*』 (1709–1711、発行は週に3回)、続いて『スペクテーター *The Spectator*』 (1711–1712) を発行し、この2紙によって名声を博した。『ガーディアン』は、両紙を引き継ぐ形で1713年に創刊された。政治的志向を抑

え、むしろ人間生活そのものに焦点を当てたこれら雑誌の性格については、定期刊行物の歴史に新たな1ページを付け加えたといわれる。彼らは、社会に蔓延する気取り、自惚れ、悪徳、腐敗をユーモラスに描き、風刺すると同時に、書斎や大学から哲学を解放し、これをクラブやコーヒー・ハウスに導きいれようという意図のもと、架空クラブの討論会を設定して寄稿を続けた。ふたりは気質や性格面できわめて異なっていたが、ともにウィッグ党を支持し、台頭しつつあった中産階級のモラルに対して親近感を持ち、そのパートナーシップはイギリス文学史上でも最上と評価されている。



### 【コラム1】18世紀の書棚

オックスフォード大学・オール・ソウルズ校、コドリントン図書館備品。作成は1740年代と見られ、ジェイムズ・ギブズのデザインによる。高さ275センチ、幅170センチ、奥行き40センチで、灰色を帯びた緑色で塗られている木製の書棚。現在この色は、「コドリアン・グリーン」として知られている。(Codrington Library, All Souls College, Oxford University, UK)



## 【コラム2】中国出版事情

－杉山寛行教授（名古屋大学大学院文学研究科、中国文学）に聞く－

### ゲーテンベルクに先んじる活字文化

ゲーテンベルク（15世紀半ば）以前に活字が存在しなかったわけではない。11世紀頃、中国では活字（粘土に文字を彫って焼いたもの）がつくられ、また13世紀の朝鮮では金属活字（銅）が作られていたといわれる。

### 中国の刊本第一主義

中国の学術書に関しては、刊本第一主義であり、刊行されなければその価値が認められなかった。同時に、出版することに対するエネルギーは相当のものであった。ヨーロッパの出版事情と異なり、出版はおもに個人によってなされていた。したがって資金の問題が影響し、刊行するまでに幾代か経る場合もあり、それでも一族の名誉のために、あくまで刊本をつくることにこだわり続けた。誤字脱字に対しても非常に敏感であり、完全な形での刊本が目指された。書物になってしまえば、草稿類には価値が認められず廃棄されたため、現存するものは後代のものに限られている。また、使用された版木は、それ自体に価値が認められ、売買の対象となった。他方、大衆に流通した小説や参考書の類には誤植も多かった。

ヨーロッパとの対比で興味深いのは、政府の編纂、出版事業への参入である。清代に関していえば、康熙帝（こうきてい）の命による『康熙字典』（30人の学者が携わり1716年に完成した字書。12集に分け、4万2千余字を収めたもので、代表的な漢字字書とされる）、同じく彼の命で編纂された『古今圖書集成』（1万巻に及ぶ類書＝百科事典であり、雍正帝（ようせい）の1725年に完成）乾隆帝（けんりゅうてい）の命による『四庫全書』（古今の書物を集め、経、史、子、集の4部に分類して編集し、それぞれ1庫に収められた一大叢書。3,462種、7万9,582巻に及び、1781年に完成した）などがある。

（文責：福田名津子）

## 【参考資料】方厚枢『中国出版史話』（前野昭吉訳）新曜社、2002年

10世紀の後半から19世紀の中葉までは、宋代から清代の中期までを含み、中国の前近代の出版事業が全面的に発展した時期である。活字印刷術の発明と発展が、この時期の印刷技術の重大な改革であり、世界の印刷史に対する中国人民の重大な貢献でもある。p. 245.

### 1. 宋代（960—1127, —1279）の出版業

宋朝政府が主催した出版事業は非常に盛んで、地方の出版機関も非常に多かった。国子監（政府の出版機関）の出版した書籍は、民間の出版業者が版木を借りて出版することを許可したが、「賃版銭」を納付しなければならなかった。版木を借りて出版する地方の書籍は、巻頭に工料費と賃版量を明記することが義務づけられ、書籍商が勝手に価格を引き上げるのを防止していた。p. 246.

### 2. 元代（1271—1368）の出版業

北宋朝が滅んだ後、出版地の中心は黄河以北に移り、私人がきわめて多数の書房を開設した。12世紀以後は、医書、類書（百科事典）その他さまざまな書籍が少なからず出版された。

元代の農学者、王禎が皇慶年間（1312—13）に木版活字による印刷を研究し創始したことは、印刷史上における古代の一大事であった。彼は木版活字で『旌徳県志』を試験的に印刷したが、6万余字の同書を1か月足らずで100部も印刷して見せた。また、元代の印刷工人が重ね刷りの方法で、多色刷りの木版印刷物を印刷したことも、大きな貢献であった。p. 247.

### 3. 明代（1368—1644）の出版業

明代初期に南京の国子監は、杭州や江南に残っていた各地の宋、元代の版木を集めて引き続き印刷、出版した。杭州の出版技術工人も西湖の書院（地方に設けられた学校）の版木とともに南京に赴いたので、南京は杭州に代わって最重要出版地になった。南京を中心とする江南一帯では16世紀の中期に、挿図本の小説や戯曲が大量に出版された。出版の交流によって書籍の取引が促され、南京の三山街や内橋の一帯には書房が林立し、書籍の販売量は非常に多かった。p. 247.

明代の官刻本は初め、内府の刻本があり、司礼監の宦官が管轄していた。地方の官刻本も普遍的にあり、各省の布政司、按察司、府、県、儒学、書院、監運司などが書籍を出版した。各藩王府（皇族の邸宅）も書籍を出版したが、その多くが中央から恩賞として賜った宋、元代の善本（貴重な書籍、あるいは校訂の行き届いた書籍）を底本にしていたうえ、藩王が物質的に恵まれて一定の学識を有していたため、明代の官刻本のなかでも上等なものが少なくない。

私刻本の出版社は大蔵書家が多く、善本を重んじるとともに校訂を入念に行ったので、書籍の質は非常によかった。

明代の書坊が出版した書籍は非常に種類が多く、大半は人民大衆が日常生活で必要とする実用書が中心であったが、宋、元代の古書も少なからず復刻し、唐、宋代の文集の新版も出版し、さらに専ら小説や戯曲を出版する書舗も現れた。明代の中後期には、編集、出版、発行を一体化した書房も現れ、市場の需要に基づいて大衆の必要とする書籍を出版するようになり、書坊自体の競争力を強化するだけでなく、出版事業の発展をも促進した。p. 248.

### 4. 清代（1616—1912）の出版業

清代前期における官刻本は、おもに内府から集中的に出版された。清代の私刻の書籍は、精緻な楷書による出版が盛んであった。当時は、名家が入念に浄書して印刷、出版したものが多く、様式が精巧で美しいという特徴がある。清代は、考証、校訂、輯逸（散逸した書籍を、別の書籍に引用

されているものを集めて再構成するもの)の学が非常に盛んになり、校訂に精を出す学者や蔵書家もあり、出版した書籍数、分野の広さ、質の点で優れ、清代の木版印刷の書籍のうちで最も価値がある。p. 249.

清代は書坊の出版がいっそう盛んになり、出版点数が非常に多かった。出版される書籍は、大半が庶民の使う教科書、日用の雑字(常用字を、韻を踏んだり、誦読に便利なようにして集めたもので、識字教育に使う)、通俗小説、戯曲、唱本などで、古書もあったが精巧なものは少なかった。

清朝の政府が編纂した『四庫全書』は近世における中国最大の叢書で、古代から当時までの3,400余点、7万9千余巻の著作を収録し、書写本で3万6千余冊に仕立てられた。雍正4年(1726)に武英殿が銅製活字で印刷した陳夢雷(1651-1741)主編の『古今圖書集成』は全1万巻、およそ1億字で、あわせて64部印刷したが、近世の中国の出版史で最も大規模な金属活字による印刷事業であった。p. 250.

### 18世紀中国の印刷技術 (『武英殿聚珍版程式』1776年)



駒の作り方



木活字の製作



組版



活字ケース

## Ⅱ 未知なるものへの欲望

知識の大衆化が進み、より正確な情報が流通するようになった18世紀は、自然や生命、異国など、未知の世界に対する知的欲求が開花した。それは正しい知識に対する渴望となった。天文学はかつてないほど正確に天体の動きを調べ、地球の形状や大きさも明らかになった。顕微鏡は微生物の存在を示した。海外植民地の建設や世界貿易によって、世界の地理と外国の様子が明らかになり、多数の旅行記が出版された。見知らぬ鉱物、動植物がもたらされ、多くは政府が設立した植物園や博物館に収集され、研究された。なかにはクックの航海のように、国家事業として世界の科学的探検が行われた場合もあった。

日本も高い識字率を誇り、元禄時代の経済成長を受けて、武士たちばかりでなく、町人から有力農民層にまで知識欲がひろまった。それは17世紀の朝鮮、中国の知識の貪欲な吸収から、やがて科学を含む西洋の最新情報の吸収にいたった。

しかしヨーロッパが世界を直接に支配するようになる19世紀までは、地球上にもいまだ未知なる世界が残り、新しい「知識」の中には古い時代の幻想や、新発見によって駆り立てられた新しいファンタジーが混ざりこんでいた。それは近代科学の確立がいまだ不十分であり、また国家や軍隊や企業のような組織体による情報収集ではなく、伝聞と書物という間接的な情報源に頼っていた以上、やむをえないことだった。むしろそれだからこそ、やがて大きな政治、社会改革を導くことになる理想社会の青写真が描かれたり、東西の平和的な知的交流が進んだ。「未知なるもの」の残存こそが、この時代の知性を刺激したのだった。

### 早すぎた宇宙時代

コペルニクスが提唱した地動説は、17世紀末のニュートンによる万有引力の法則によって、この世紀のヨーロッパでは正しい学説としての地位を確立した。人々は、神がはかりしれない知恵によって創造した宇宙の真の姿を、人間が理解できるようになったと感じた。地球が太陽の周りを回るなら、他の惑星も地球と同じような星だろう。当時観測された何百もの恒星は太陽のようなものであり、それらは惑星を伴っているに違いない。専門家でない人々も、多くの啓蒙書や文学によって天文学的な知識を得て、巨大な宇宙の姿と、その中での人間の地位について考えをめぐらせるようになった。

東アジア諸国の中でも日本は早期に地動説を理解し、オランダ語経由でジョン・キールなどの代表的な概説書を自由な形で翻訳して出版していた。19世紀には、ニュートン的な天文学が専門家の間では一つのスタンダードとなっていた。これに比べて、明朝末期にイエズス会師によって情報を得て、すでに17世紀に本格的な近代科学の著作を手にしていた中国は、18、9世紀には、かえって新しい宇宙観の導入に遅れをとることとなった。

宇宙への関心は想像力の飛躍を刺激した。18世紀ヨーロッパの多くの思想家は宇宙人の存在を信じており、それをキリスト教の教義と両立させようとしていた。日本でも地動説を受容した学者たちは、異なった文化的伝統の中にとどまりながら、同様な宇宙観を抱いていた。宇宙は軍事利用の対象でも、資源枯渇や人口爆発を解決するために植民する場所でも、また無慈悲な侵略者たちが住む暗黒の空間でもなかった。それは人間の自由な想像力を羽ばたかせる未知の広がりであり、従来人々が暮らしてきた文化によって価値付けることができるものであった。そしてそのような努力の中から、現代的な人間の像がうまれてきた。

6. ニコラ・ビオン (1652-1733) 『科学実験器具の組み立て方と、その主要な方法』 (新版1723、初版は1709)

Bion, Nicolas. *Traité de la construction et des principaux usages des instrumens de mathématique*, new ed. La Haye, 1723. 中央館・貴重書室所蔵

科学器具の説明と製造を扱った同書は、1709年の初版ののち版を重ね、英語やドイツ語にも訳された。著者のビオンはフランス王室に仕え、パリに工房を構えて科学器具を製造し、宇宙や地球や天文観測儀などについての書物を著したことで知られている。

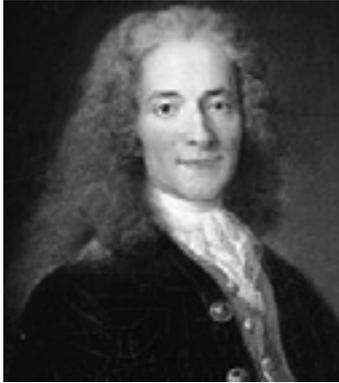


測量器具

## 7. ヴォルテール (1694-1778) 『ニュートン哲学入門』 (初版1738)

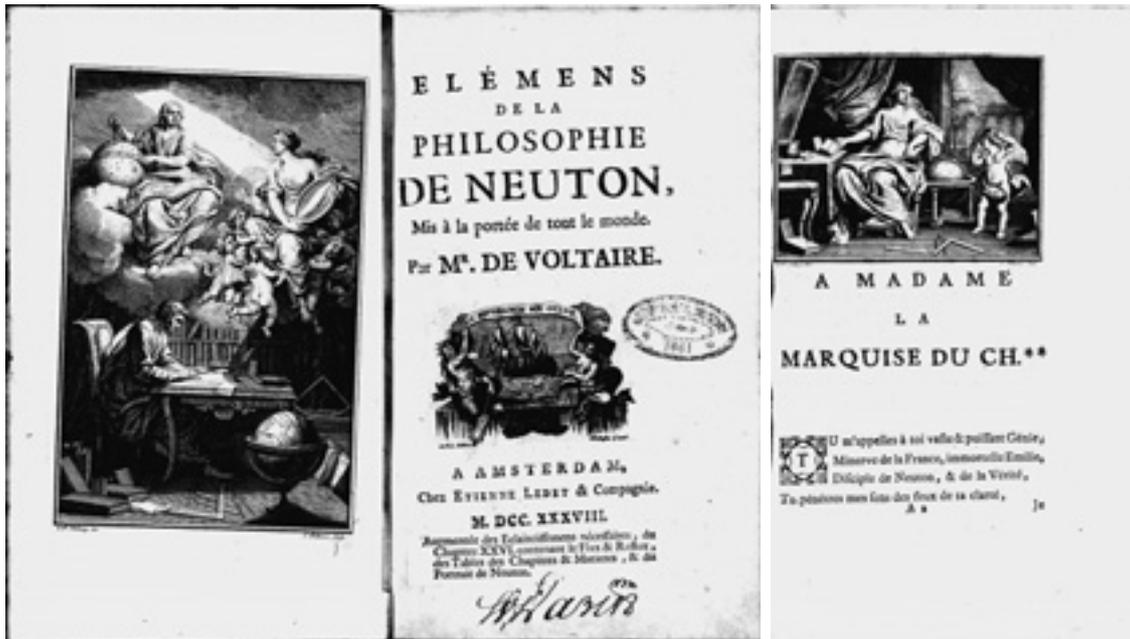
Voltaire. *Elemens de la philosophie de Neuton, mis a la portee de tout le monde*. Amsterdam, 1738.

経済図書室所蔵・貴重図書



Voltaire

フランスでのニュートン体系の代表的な啓蒙書。デカルトの強い影響下にあったフランスにニュートン力学を導入する際に重要な役割を果たした。同書は啓蒙運動を代表するフランスの思想家ヴォルテールが、女性科学者の先駆者のひとりである愛人デュ・シャトレ夫人の協力を得てニュートン研究を行い、成立したものである。初版は3種類あり、展示のアムステルダム版は、出版者が著者の校訂を経ずに出版したばかりでなく、他の著者の文章まで追加されている。ヴォルテールの本名はフランソワ・マリ・アルエ François-Marie Arouet で、ヴォルテールは筆名。『哲学書簡』(英語版1733、フランス語版1734) によってイギリスの政治、科学、文化、宗教を紹介しながらフランスの旧体制を批判し、弾圧を受けた。その難を逃れるためにシレーにある夫人の館で10年間生活をともにし、同書を書き上げた。ヴォルテールは以後、ヨーロッパ全体を舞台に啓蒙運動の先頭に立って活躍した。



協力者デュ・シャトレ夫人への献辞

## 8. ラプラス (1749–1827) 『宇宙体系解説』 (初版1796)

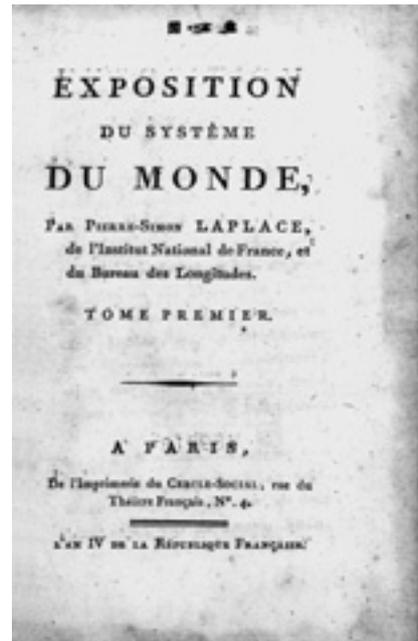
Laplace, Pierre Simon, Marquis de. *Exposition du système du monde*. Paris, 1796.

中央館・貴重書室所蔵

太陽系の起源論を含んだラプラスの代表作。彼は「フランスのニュートン」と呼ばれた物理学者、天文学者、数学者であり、近代数学を駆使して太陽系の安定性を論証した。『天体力学 *Traité de Mécanique Céleste*』(1799)ではニュートン力学を微分方程式で書き表し、『確率の解析理論 *Théorie analytique des probabilités*』(1812)では確率論の基礎をすえるなど、近代数理科学の発展に大きな役割を果たした。



Laplace



## 9. コリン・マクローリン (1698–1746) 『代数論』 (初版1748)

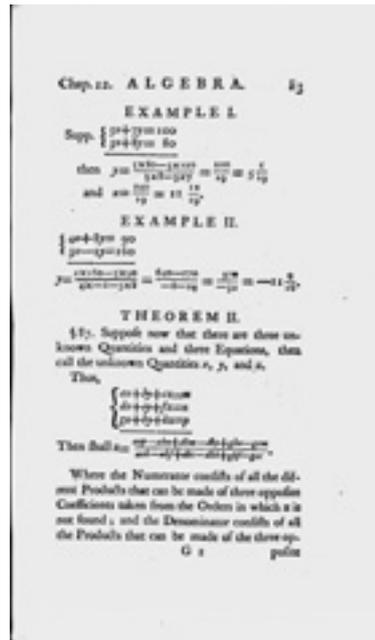
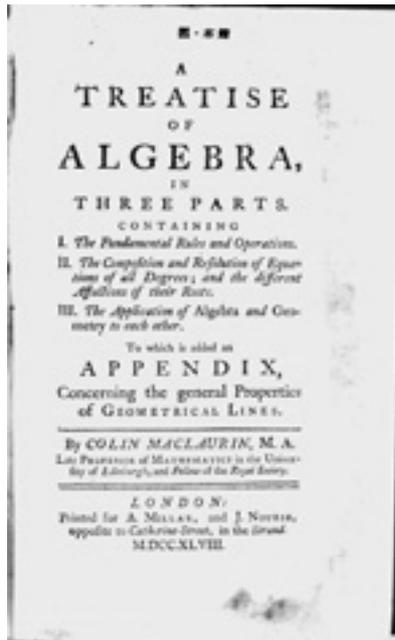
Maclaurin, Colin. *A Treatise of Algebra*. London, 1748.

中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅢ」



Maclaurin

行列式による連立方程式を研究した初めての著作。マクローリンは、18世紀を代表するスコットランドの数学者、物理学者として知られる。彼は、少年時代から優れた数学的才能を示し、ニュートンの知己を得てエディンバラ大学の自然哲学教授となり、スコットランド科学を牽引した。また、ニュートン主義者としてニュートン体系への入門書を書いた。ちなみに1742年の『流率論 *A treatise of fluxions*』は、微積分学の最初の体系的著作であり、「マクローリンの定理」はこれに記されている。



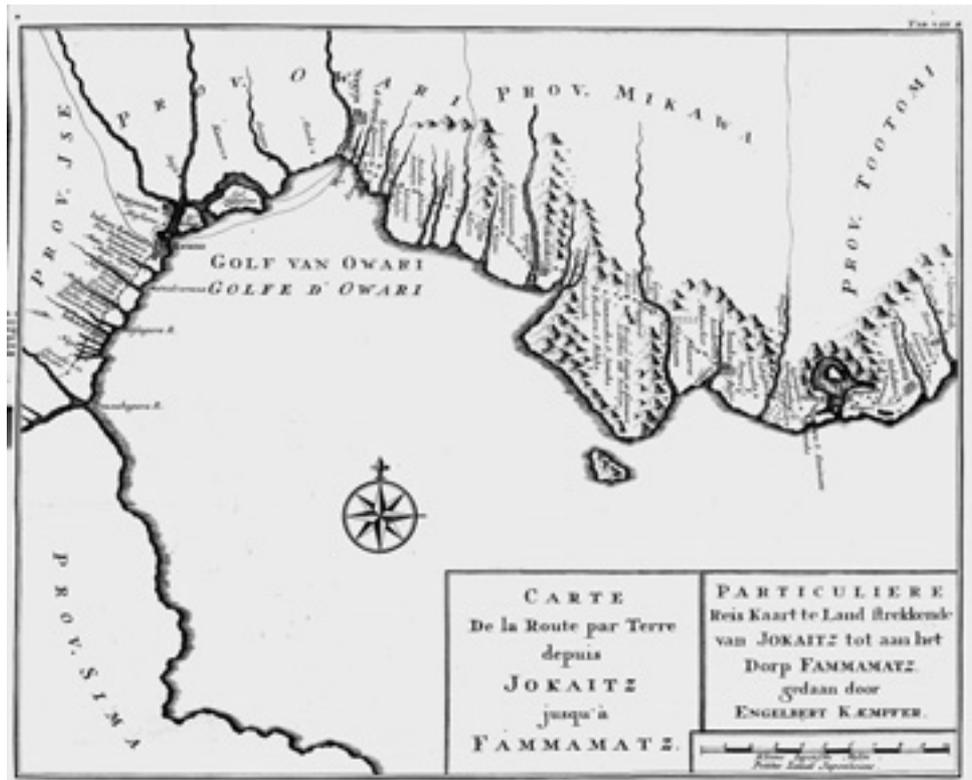
マクローリンによる「クラメールの公式」の記述

10. エンゲルベルト・ケンペル (1651-1716) 『日本誌』(1732、仏初版は1729、独初版は1777)  
 Kämpfer, Engelbert. *Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'empire du Japon*, in 3 vols. La Haye, 1732.  
 中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅢ」

ケンペルの主著のフランス語版。同書は、代表的な日本論であり、そのなかで鎖国が論じられている。彼はドイツの医者、博物学者であり、長崎に1690年から92年にかけて滞在中、その間に2度江戸に旅行し、その機会を利用して自然、文化、社会にわたる全般的な日本研究を行った。また帰国後は旅行中の資料をまとめて発表し、ヨーロッパの日本観に大きな影響を与えた。原稿は最初ドイツ語で書かれたが、彼の死後、1727年に英訳が出版され、以後各国語版が出された。



日本地図



尾張周辺の地図

11. ジェイムズ・クック (1728—1779) 『南極旅行記』 (初版1777)

12. 同 『太平洋旅行記』 (第2版1785、初版は1784)

Cook, James. *A Voyage towards the South Pole*. London, 1777.

——, *A Voyage to the Pacific Ocean: Northern Hemisphere*, 2nd ed. London, 1785

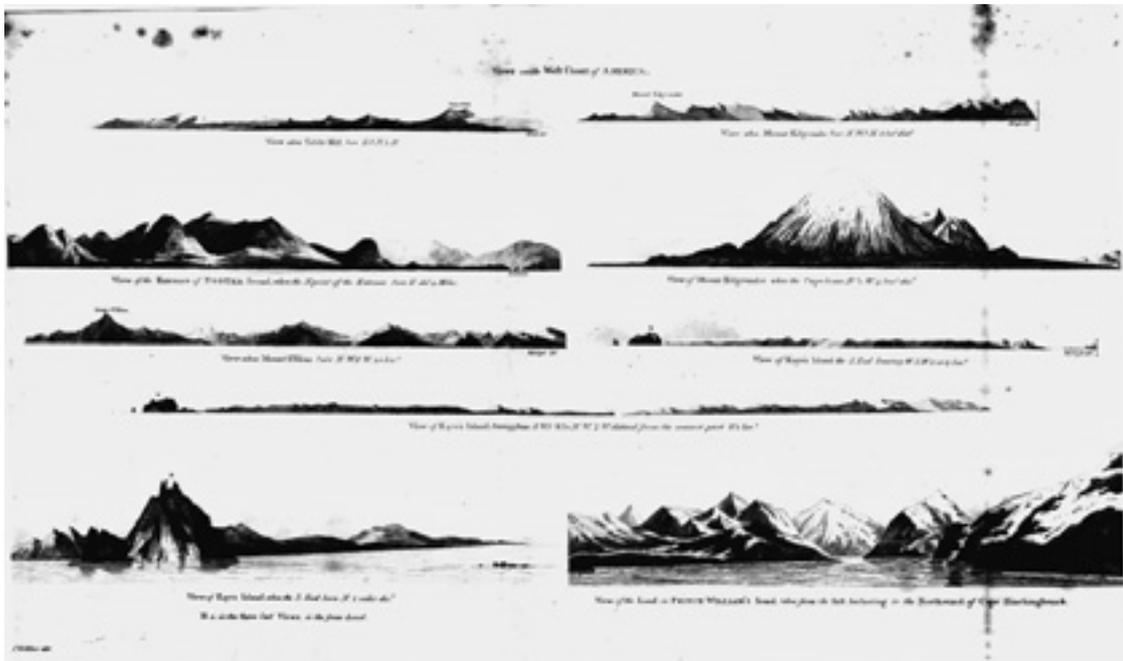
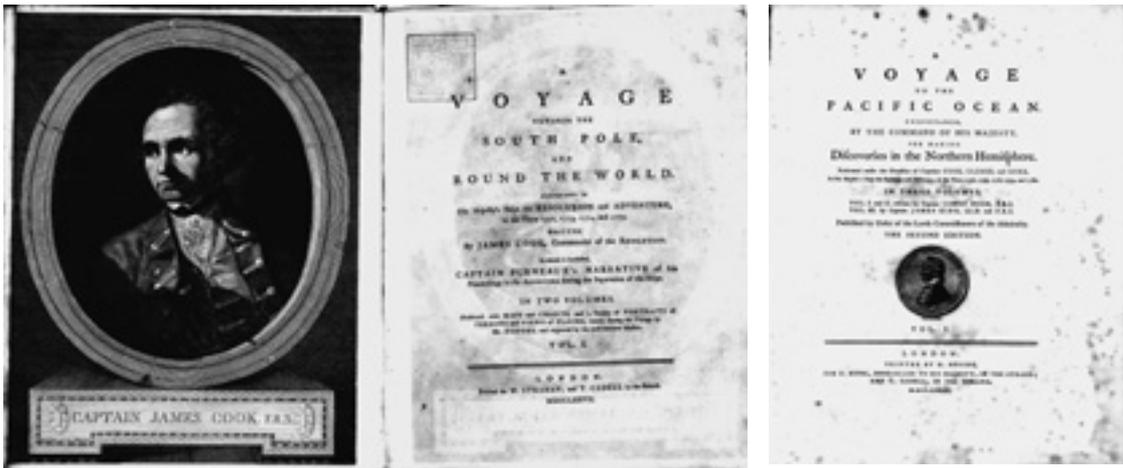
ともに中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅢ」



Cook

イングランドの探検家キャプテン・クックが生涯行った、3度にわたる調査探検旅行のうち、後半の2つに関する著書。最初の航海 (1768—1771) で彼は、エンデヴァー号に乗船し、タヒチ、ニュージーランド、オーストラリア大陸を訪れた。第2の航海 (1772—1775) ではレズリュション号に乗船し、再びオーストラリア大陸を訪れた後、1773年に南極圏との境に相当する南緯71度10分に、最初のヨーロッパ人として到達した。その際の記録が、『南極旅行記』である。第3の航海 (1776—1779) では、同じくレズリュション号に乗船し、タヒチを訪れ、1778年にはハワイ諸島を訪れた最初のヨーロッパ人になった。続いてカリフォルニアからベーリング海峡に至るまで探検したのであるが、帰りに寄ったハワイ島で、現地人とのいさかいが原因で非業の死を遂げた。『太平洋旅行記』は、この最後の航海に関する著作で

ある。クックは小作人出身の軍人であり、科学的知識を身に付けて数度にわたる太平洋、南極への航海を組織した探検家であった。彼の航海は国家的事業であり、各国から何人もの科学者たちが参加した。彼自身も優れた観察眼を持ち、冷静で客観的な記録を残している。



太平洋の島々

13. 『百科全書』全35巻（初版は1751-1780）

*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers.*

「百科全書：学問、技芸、工芸の合理的辞典」全17巻（初版は1751-1765）

「百科全書補遺」全4巻（初版は1776-1777）

「学問、技芸、工芸についての図版集」全11巻（初版は1762-1772）

「図版集補遺」（初版は1777）

「百科全書および同補遺に含まれる事項の分析的・合理的索引」全2巻（初版は1780）

中央館・貴重書室所蔵



Diderot

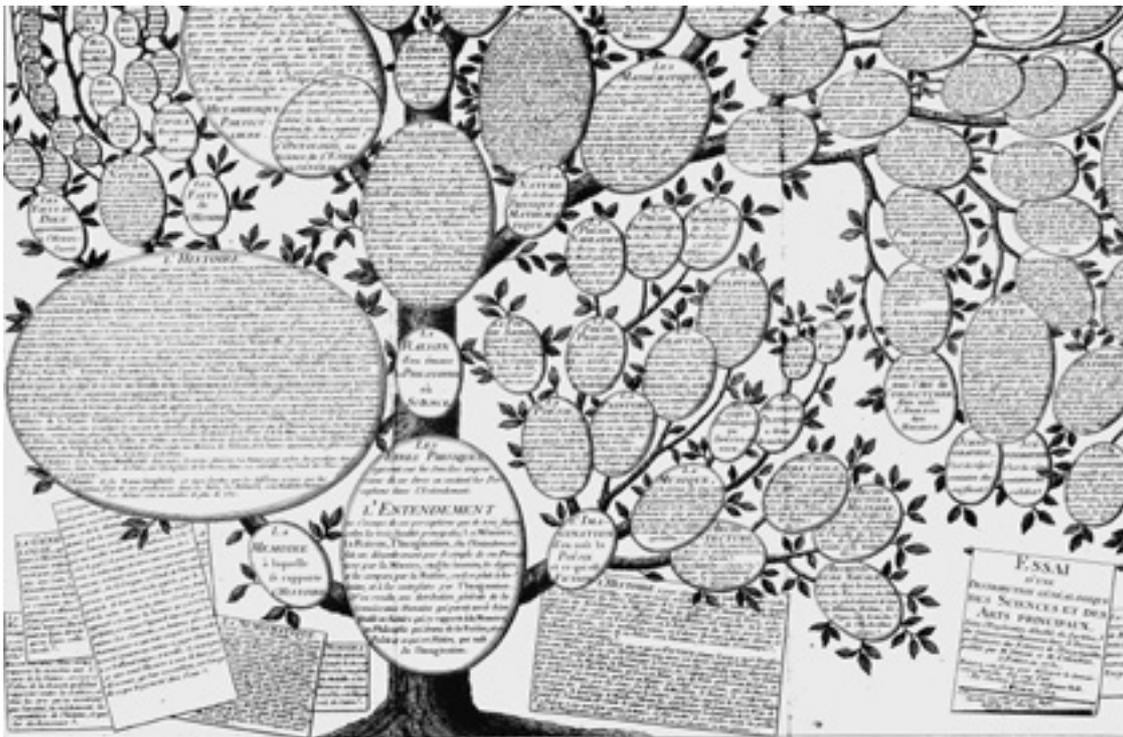
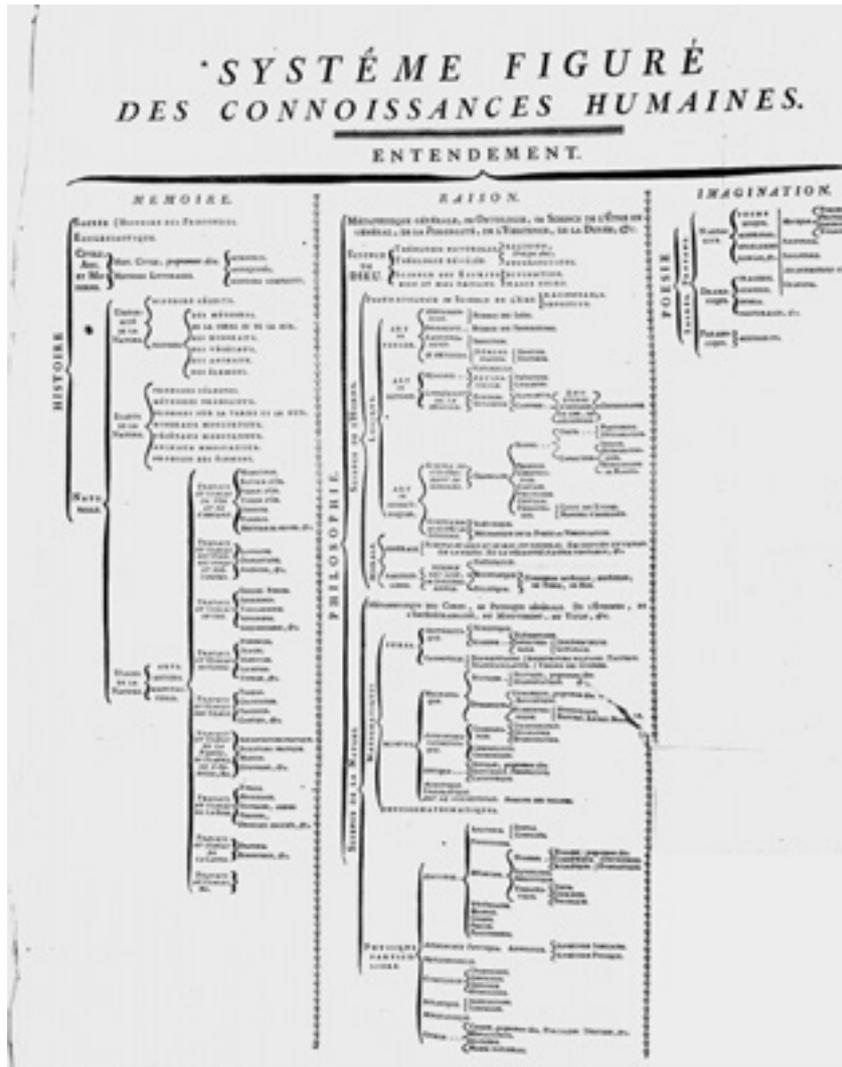
ディドロ Diderot, Denis (1713-1784)、ダランベール Alembert, Jean Le Rond d' (1717-1783) を中心に編纂さ

れたフランスの百科事典。1745年パリの出版社ル・ブルトンとは他社と協同で、イギリスのチェーンバーズ編纂による『サイクロペディア Cyclopadia』（1728）の翻訳を企画し、それをディドロに依頼した。しかし編集を依頼されたディドロは、共同編集者にグランベールを迎え、その他多数の啓蒙知識人を結集して、同事典を超え大陸の百科事典の水準を一新する、独自の新しい事典の作成を決意した。カトリックと専制権力の強固なフランスでの、無神論や理神論の傾向、実学的傾向を備える『百科全書』の刊行は、旧勢力に対する知的全面戦争を意味し、宗教界からは絶えず不信不敬の非難を受けた。

そのため、出版途中の1759年には出版許可が取り消されてしまったが、その効力は、執筆者および出版社の「工夫」によって、きわめて弱められたといえる。すなわち、『百科全書』の刊行はそれ以降（『百科全書』8-17巻）、匿名の出版に切り替えられ、出版地としてパリの名が記載されることはなくなったのであった。このあたりから『百科全書』は、所と形を変えながら、発禁の目をくぐり抜けるだけでなく、ときには著作権（当時は版權）の侵害をも経て広まった。イタリアのルッカでは、1758年ごろから海賊版『百科全書』が、1771年からは、ル・ブルトンから版權を買い取ったパンクックより、パリ初版に似せたジュネーヴ版が出版年も偽り、それぞれ刊行され始めたのである。現在の研究では、各巻・各版の異同によって、6種ほど（ルッカ、リヴォル、ジュネーヴ、ヌーシャテル、ローザンヌ、イヴェルドン）に判別することが可能である。因みに当館所蔵の『百科全書』にパリ初版は含まれていないと思われる。たとえば、匿名での出版となった8巻以降は、星印(\*)で名が伏せられるのであるが、パリ初版は角が6つの星印であるのに対し、当館所蔵の版では、角が5つの星印が用いられている。



中央で光を浴びて立つ女性が「真理」であり、その右側から「理性」と「哲学」が手を差し伸べて、真理のヴェールを取り去ろうとしている。



知識の系統樹 (55頁注6 参照)

#### 14. 『和漢三才図会』(初版1712) 文学研究科所蔵

大坂の医師、寺島良安によって編まれた天部、人倫類、地部など105巻からなる図解百科事典で、正徳2年(1712)頃に完成した。明の王圻(おうき)が天文、地理など14項目に分け、図絵入りで万暦35年(1607)に成した百科全書『三才図会』をモデルとして、編纂されたといわれる。『和漢三才図会』は、全体を天文、人倫から草木まで96類に分け、和漢の事物を収容し、平易な漢文で各事物に簡明な説明と図を入れている。各事項は、広く国内を旅行して実地踏査し、種類、製法、用途、薬効などを明記して客観的、合理的な解説を施し、図解は分析的であるが、他者のイメージには、中国古代の「山海経」に由来する奇怪な異人(下図は胸に穴の空いた穿胸人)などが含まれている。



#### 15. 『四庫全書』(1781)(復刻版) 中央館所蔵

中国、清朝の乾隆帝(けんりゅうてい)の勅命により編纂された、中国最大の漢籍叢書。集書の詔勅が発せられたのが1741年(乾隆6年)で、事業が発足したのが1772年、その完成は1781年といわれる。全3503部79337巻(部数・巻数の数え方には数種ある)にのぼる。全体の構成が、隋以来の四部分類(経・史・子・集)によって分類整理されているため四庫全書といい、これにより、中国の文学、史学、哲学、理学、工学、医学のほとんどあらゆる学科が収録されている。四部の書の表紙は、黄色(経部)・赤色(史部)・青色(子部)・灰色(集部)に色分けされた。広範な資料を網羅しており、資料の保存に多大な貢献をした反面、清朝の国家統治にとって障害となるような書物は、禁書扱いされ、収録されなかった図書は3000点にのぼるといふ。また、たとえ収録されていても、内容を改竄したり削除したりしている例が見られる。

なお、名古屋大学附属図書館が所蔵する四庫全書及び関連叢書は以下の通りである。

##### ○四庫全書

清の乾隆帝の命により1781年に完成。影印本全1500冊(上海 上海古籍出版社 1987年刊)が中央図書館東洋学文献コーナーにある。

##### ○四庫全書総目提要

四庫全書編纂にあたり作成された文献解題集。10254種172860巻分を収録し、1782年に完成。40冊(上海 大東書局 1926年刊)、4冊(上海 商務印書館 1933年刊)、武英殿本5冊(台北 台湾商務印書館 1983年刊)の各全冊が、中央図書館、文学研究科などにある。

##### ○四庫全書珍本

文淵閣本四庫全書の収録文献のうち、約半分にあたる1878種を影印刊行したもの。初集242帙(台北 商務印書館 1934-1935年刊)、2~10集各400冊、11~12集各200冊、別輯400冊(台北 商務印書館)の各全冊が中央図書館東洋学文献コーナーにある。2集以後は戦後の刊行。

○続修四庫全書総目提要

続修四庫全書に収録された文献の解題集。稿本全38冊（済南 齊魯書社 1996年刊）が文学研究科にある。

○四庫全書存目叢書

四庫全書総目に書名だけ記載され、四庫全書には収録されなかった文献約4500種を収録し、1997年までに刊行されたもの。全1200冊（済南 齊魯書社 1995－1997年刊）が中央図書館東洋学文献コーナーにある。

○四庫全書禁毀書叢刊

清朝の統治に不都合と判断され消却対象となった文献類の集成を試みたもので、1999年に刊行された。全311冊が中央図書館東洋学文献コーナーに排架準備中。

○四庫全書存目叢書補編

諸事情により四庫全書存目叢書に未収録となった219種の文献を収録し、2001年に刊行されたもの。全100冊（済南 齊魯書社 2001年刊）が中央図書館東洋学文献コーナーにある。

○続修四庫全書

四庫全書を継承すべく民国期から構想されていた叢書で、5212種の文献を洋装1800冊にまとめ、2002年に刊行されたもの。全1800冊（上海 上海古籍出版社 2002年刊）が中央図書館東洋学文献コーナーにある。



清朝皇帝としての乾隆帝



文人としての乾隆帝

### 【コラム3】 科学における想像力

18世紀までの科学が経験的検証や論理的証明のみに基づく精密な「近代科学」に尽きなかったことは、この時代の宇宙人実在論の自由な展開を見るとよくわかる。地動説が切り開いた宇宙の時代は、それについての想像力も解放した。

他の惑星における生命の存在という考え方は、ギリシア時代のピタゴラス派、クセノファネス、エピクロス、ルクレティウスやプルタルコスなどにまでさかのぼることができる<sup>1</sup>。中世ヨーロッパではニコル・オレーム、ウィリアム・オッカム、ボナヴェントゥーラなどの神学者たちが、世界が永遠で必然的だとするアリストテレスの学説を批判し、神の創造力が無限であるためにこの世界とは別の世界が存在するという「世界の複数性」論を唱えた。同様な論争は、イスラームの反アリストテレス主義者ガザーリーや、急進的アリストテレス主義者アヴェロイェスにも見られた。15世紀には、ドイツの神学者ニコラウス・クザーヌスが主著『無知の知』で、他の恒星系の存在と、そこに住む生命体を考察した。それは地動説を支持して宇宙が無限だと主張したルネサンスの哲学者ジョルダノ・ブルーノに影響したといわれる。

地動説が影響を与えはじめ、ガリレオが1610年に『星界の報告』<sup>2</sup>で、太陽や惑星が地球と同じ物質でできていること、月には地形が見られることを報告すると、天文学者ヨハネス・ケプラーたちが地球外知的生命の存在について議論を始めた。ケプラーは『夢』の注の中で、月には不規則な地形と規則的な地形が観察でき、前者は山や海のような自然の地形だが、後者は大規模な人工的構造物であると考えた。もしそうであるなら、月に住人が存在するだけでなく、そのような建設工事を行える存在は優れた文明を持っていることになる。

この近代天文学による月世界人のイメージの復活は、ルキアノスから続く文学的伝統を受け継ぎながら、当時の科学的知識を吸収して月世界を描いたゴドウィン『月の男』<sup>3</sup>や、リベルタンの文学者シラノ・ド・ベルジュラックの『日月両世界旅行記』（初版1657年）<sup>4</sup>を生み出した。17世紀末には、世界の複数性論争と地動説に基づく天界理論を総括し、新しい世界を切り開いたフランス啓蒙の先駆者フォントネルの『世界の複数性についての対話』（1686年）<sup>5</sup>が現れた。

イングランドでケプラーを受け継いで学問的な議論を展開したのは、科学者集団の組織者として重要な位置を認められている、ジョン・ウィルキンズだった<sup>6</sup>。ウィルキンズにはじまる、惑星人の議論をめぐる自然神学と科学の結合は、オランダの大科学者クリスティアン・ホイヘンスの『天界世界の発見、あるいは諸惑星の住民、植物、生産物に関する考察』に典型的に現れている。ホイヘンスは銀河の恒星にも惑星が存在し、そこにも知的生命が存在するはずだと論じた。宇宙は無限であるなら、知性を持つ神がそれを無駄に作ったはずはない。そこには人間以外の神の似姿である宇宙人たちが生きている。

1 Steven J. Dick, "The Origins of the Extraterrestrial Life Debate and its relation to the Scientific Revolution," *Journal of the History of Ideas*, Vol.41 No.1, 1980.

2 Galileo Galilei, *Sidereus Nuncius*, 1610. ガリレオ・ガリレイ、山田慶児・谷泰訳『星界の報告』（岩波書店、1976年）。

3 Francis Godwin, *The Man in the Moone; or, A Discourse of a Voyage Thither by Domingo Gonsales, The Speedy Messenger*, 1638. フランシス・ゴドウィン、大西洋一訳『月の男』『ユートピア旅行記叢書2』（岩波書店、1998）。

4 Cyrano de Bergerac, *Les Etats et Empires de la Lune, Les Etats et Empires du Soleil*.

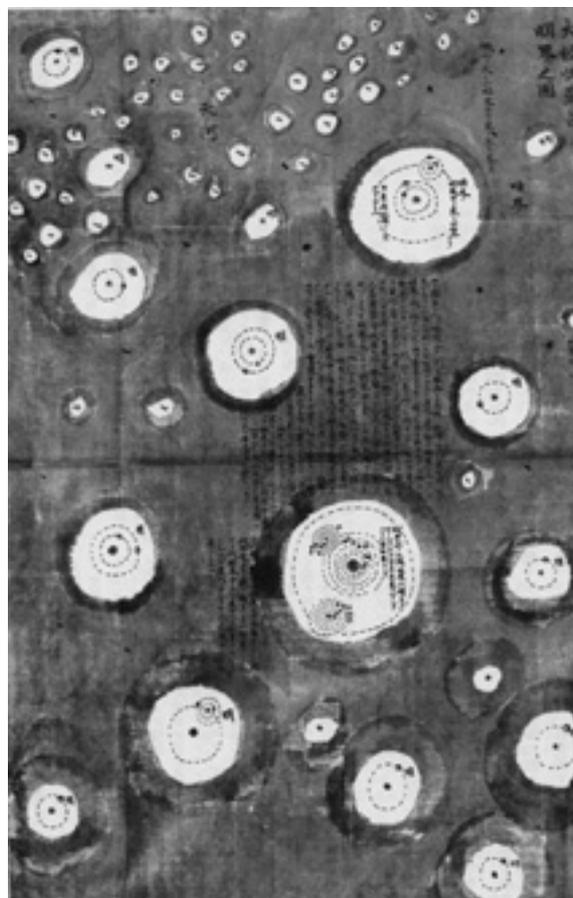
5 Bernard Le Bovier de Fontenelle, *Entretiens sur la Pluralité des mondes*, Flammarion, Paris, 1998. 赤木昭三訳『世界の複数性についての対話』（工作舎、1992）。

6 Barbara Shapiro, *John Wilkins 1614-1672*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1969.

無限宇宙論と宇宙人実在説がそれに基づいて構成された自然神学的な枠組みは、18世紀にはブリテンの自然神学の共有財産となった。ニュートン派の自然神学者たちは、地球以外の世界が多数存在し、そこには無数の知的生命が暮らしていると説き、この世界像こそが神の偉大さを示すのだ、とまじめに説教した。宇宙の無限性と無数の知的生命の存在は、神の万能と偉大さの証明だと思われるようになった。こうしてニュートン体系が受容されるにつれて、宇宙人の存在は知識人の間で広く信じられるようになっていった。神の子である宇宙人は地球を襲う恐ろしく醜悪なエイリアンではなかった。その中には人間よりすぐれ、知的・道徳的に神に迫るほどの完成に達した種族もあると思われていた。その意味で、人類の未来は宇宙にあった。

日本は北東アジアでいち早く地動説を受け入れたが、それと同時にニュートン派の宇宙人論ももたらされた。先駆者志筑忠雄（1760-1806）はイングランドのニュートン主義者ジョン・キールの考え方を伝え、地動説を受け入れた大坂の思想家山片蟠桃（1748-1821）は「大宇宙論」を展開した。また、地動説の普及に努めた吉雄常三（1787-1843）は、宇宙人実在論がヨーロッパの宇宙論の核心であると名古屋で講義した。

ヨーロッパの場合、ユダヤの民の前に現れたただ独りのイエスが神の子であるなら、宇宙人は誰が救うのかという大問題が生じる。フォントネルが世界の複数性を論じたのは、この点からキリスト教を批判することがひとつの主眼だった。事実それがキリスト教と宇宙論を調和させる際のアキレス腱となり、19世紀まで論争が続いた。東洋哲学にはそのような困難がないので、志筑たちは抵抗感を持たなかったのかもしれない。東西の自然科学は、経験的知識だけでなく、自由な想像力も共有していたのである。



山片蟠桃の大宇宙論（『夢の代』、1802年自序）

## 【参考資料】 東西の宇宙人実在説

「もう一つの世界が必ず存在するというのではないが、そうである可能性があり、そしておそらく住むことのできる世界が月にはあるだろうと私は考える。」

(ジョン・ウィルキンズ：17世紀イングランドの数学者、『月世界の発見』より)

「われわれが惑星に容認することは、数え切れない太陽を回る惑星についてもそうすべきである。それらは植物や動物を持ち、そこにはわれわれと同様、天空の熱心な賛嘆者であり、勤勉な観察者である理性的な存在もいるに違いない。」

(クリスティアン・ホイヘンス：17世紀オランダの科学者、『コスモテオロス』より)

「それらの物体は知性的な精神のために創造されたのである。地球が人間の生存と思索に奉仕するという目的で創造されたのだから、他のあらゆる惑星も同様な目的でつくられたと考えるのは当然ではないか」

(リチャード・ベントレー：イングランドの自然神学者、説教「世界の起源と仕組みに基づく無神論の論駁」より)

「われわれは次のようなことが自然の作者の意図的な設計であったということに気づかざるを得ない。彼はわれわれが現在のままでは、この地球から宇宙にある他の巨大な物体に連絡をとることができないようにした。また彼が他の惑星同士や、他の恒星系同士の連絡もできないようにしたというのかなり確かだと思われる。われわれは望遠鏡によって月には山や断崖や窪地があることを知っている。しかし誰がこの断崖を歩くのか、何の目的でこれらの巨大な窪地があるのか（それらの多くは中心に小さな隆起がある）、われわれは知らない。そしてこの惑星が大気や蒸気や海なしに、われわれの地球のような目的に役に立つのかどうかを考えて、われわれは途方にくれる。われわれは巨大な木星の表面に、地球の住人には致命的であるような、突然の驚くべき変化を観察する・・・われわれはこれらを見せられ、神の作品に対する好奇心をかきたてられながら、最後にはただ幻滅するだけだとは思えない。人間は疑いなくこの天体〔地球〕の主であり、この天体はおそらくもっとも重要な点で太陽系の他のどの惑星に劣るとはいえず、そしてまたこの恒星系も他の宇宙の恒星系のどれにも劣っているとはいえないだろう。もし人間が、現在の状態のきわめて不完全な知識のまま、いっそう完全な自然の知識に到達しないで減びるとすれば、類推か類似性に基づく推理によって、同じような欲求が他のすべての惑星や他のすべての恒星系の住人たちを失望させると考えられるだろう。そしてこの自然の美しいシステムが、彼らの誰に対してもきわめて不完全な仕方ではしか現れないと考えられるだろう。したがって、このことは必然的にわれわれの現在の状態はたんにわれわれの存在の夜明け、あるいは始まりであり、いっそうの進歩の準備か見習い状態であるという考えに導くのである。」

(コリン・マクローリン：18世紀スコットランドの数学者、『アイザック・ニュートン卿の哲学的発見の概説』より)

「地球以外の多くの惑星の住民がどのような存在であるか、また彼等の本性がどのようなものであるかは、我々の知るところでない。しかし我々が自然のかかる寄託によく答えるならば、我々は宇宙におけるこれらの隣人たちのなかでも、さほど低くない地位を主張して差支えないと自負してよいだろう。これらの惑星の住民達にあっては、各個体がそれぞれ自己の本分を、彼の生涯のうちにあますところなく達成するかも知れない。しかし我々にあっては、そうはいかない、ただ類のみがこのことを期待し得るにすぎないのである。」

(イマヌエル・カント：ドイツ啓蒙の哲学者、『世界市民的観点から見た普遍史の構想』より)

「もし生まれようとする知的存在の源が絶えることなく、その群れが倍増していくなら、精神の宇宙はそれによって知覚される物質の創造に歩調を合わせて増えていくだろうことが想像できる・・・人類の一世代が十億であったとして、百世代を経れば一兆の魂がすでに地球から生まれ出ることになる。もし太陽系の他の惑星が同様に生産的なら、合計は七兆となろう。そしてもし恒星が二百個あり、それらがわれわれと同様な恒星系だとすれば、[宇宙の人口は] 二百兆となる。」

(アダム・ファーガスン：スコットランド啓蒙の思想家、遺稿集より)

「太虚の無辺なる、太陽の無数なる同く其中に在て、何ぞ必しも我太陽のみ、緯星[惑星]の己を巡ことあらん、他の恒星にも、各五星の如きもの無くてやはあるべき・・・かかる無数の中に混ざりありて、又何ぞ我地球をしても、独り人民万物の住所とすることあらん、他の緯星の世界、及び他の太陽に付属しあらん緯星の世界にも、形状容貌の同異をこそ知らね、いかでか絶えて住者なくて止なん。」

(志筑忠雄：江戸時代の蘭学者、『暦象新書』より)

「凡コノ地球二人民・草木アルヲ以テ推ストキハ、他ノ諸曜[惑星]トイヘドモ、大抵大小我地球二似タルモノナレバ、ミナ土ニシテ湿気ナルベシ。蹴鞠又ハ紙張ノゴトクニハアラザルナリ。シカレバ則、太陽ノ光明ヲ受テ和合セザルコトナカルベキヤ。ステニ和合スレバ水火行ハレテ、草木ノ生ゼザルコトナシ。又虫ハ本ヨリ生ズベシ。虫アレバ魚貝・禽獸ナキコトアタハズ。シカラバ則、何ゾ人民ナカラン。ユヘニ諸曜ミナ人民アリトスルモノ、我ノ有ヲ以テ拡充・推窮スルモノナレバ、妄ニ似テ妄ニアラズ。虚ニ似テ虚ニアラズ。仏家・神道ノゴトク無稽ノ論ニアラザルナリ。」

(山片蟠桃：江戸後期の商人・思想家、『夢ノ代』より)

「地もまた天中の一遊星にして遊星太陰[惑星と月]皆これ人民居住の大世界たることを弁ずべし。これ西哲地動を説くの要旨なり・・・所謂銀河の如きも四万余点の小恒星群集にして一条の河象をなすなり・・・その光り必ず数百万里の内を照らしこれを遊星天と称し許他の遊星その内にありて其の恒星を太陽としてこれを巡回し其の遊星は各一世界にして人畜住し草木生ずること吾地球に異なることな [し]」

(吉雄常三：江戸後期の蘭学者、『理学入式遠西観象図説』より)

### Ⅲ 新しい科学

天文学や物理学の基礎が築かれたためさまざまな17世紀科学の発展と比較すると、18世紀は新しい自然現象への関心が高まった時代だった。フランスを中心に機械論的な数理科学が完成していく半面で、化学的な諸現象や電磁気や生命現象の探求が進められた。また科学への愛好は王侯や貴族のサークルを超えて社会全体にひろがっていった。まだ科学の専門化が完了していないこの時代では誰もが「自然哲学者」となることができ、アマチュアによって「専門家」たちの狭い視野を打破する新鮮な仮説が提起された。このような動きは、力学的な機械としては理解できないような、有機的で、多様な自然の姿が認識されていく端緒となり、やがて18世紀末の近代化学の成立や、太陽系や地球の形成論、さらには19世紀半ばの進化論へと展開していった。

#### 人体への眼差し

自然への眼差しは、人間の身体へも向けられた。18世紀ヨーロッパでも、医学は前世紀と同様、重要な学問分野であり続けた。近代医学がまだ誕生していないこの時代では、医学は実際に病気を治すというより、理論的な点で重要な意味を持っていた。人体への興味は人間を自然の一部として捉えていこうとする人間観の誕生に結びついていった。

日本ではオランダ経由の書物を通じて、西洋医学が急速に導入された。医学書は天文学書と並んで、新しい世界の見方を先導したのである。



百科全書（人体・筋肉系）



百科全書（耳の解剖図）

## 働き、ふれあい、遊ぶ：技術と社交

自然や世界や人体と並んで、現実の人間の営みに対する関心も高まった。とりわけヨーロッパでは、16世紀からはじまる、当時の言葉では「機械的技芸（メカニカル・アート）」と呼ばれる、ものづくりなどの職人的技術を記述し、解明しようとする運動が頂点に達した。膨大な『百科全書』図版の大半は、さまざまな技術の詳細な図解である。また都市ではサロンと呼ばれる上流社会での集まりから、居酒屋、コーヒー店、劇場、公園にいたるまで、一人で神の声を聞いたり、教会で礼拝するだけでなく、人々は世俗的な場で集い、交流し、政治を論じ、知的な会話や食事やゲームを楽しんだ。18世紀の書物は黙読されるばかりではなかった。書物はこのような場所で朗読され、議論された。



ジョフラン夫人のサロン

同様な集まりは、同時代の日本にも見られた。世界的な大都市だった江戸や大坂や京都では、武士や学者や文人や裕福な町人たちが集うサークルが誕生し、時には政治談議までが行われた。尾張でも19世紀には学者を中心とする自然科学愛好家のサークルが見られた。このような集団的な情報交換と討論の中から、新しい人間の学が生まれてきた。



江戸時代の寺子屋には女兒が多く通い、女師匠も珍しくなかった。(寺子屋風俗図絵)

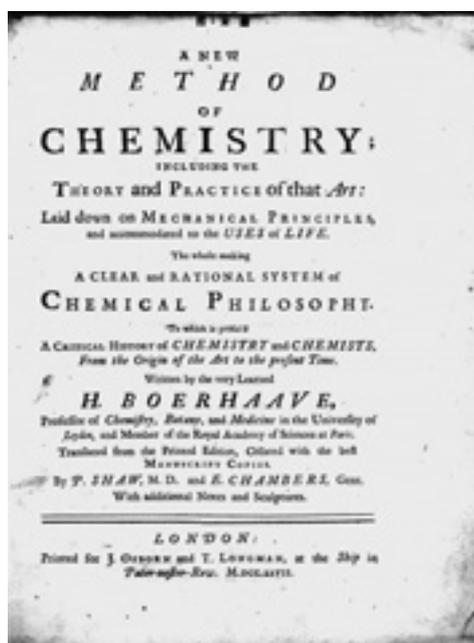
16. ヘルマン・ブールハーヴェ (1668–1738) 『化学原論』 (初版1727)

Boerhaave, Herman. *A New Method of Chemistry*, trans by P. Shaw & E. Chambers, from the printed edition, collated with the best manuscript copies. London, 1727. 中央館・貴重書室所蔵

18世紀オランダを代表する化学者、ブールハーヴェによる『化学原論 *Elementa chemiae*』(1724)の英語訳。同書は各国語に翻訳され、版を重ねた。イギリスの化学者ピーター・ショウ Shaw, Peter (1694–1763) による英訳は、18世紀初頭のイギリスの機械論的な科学観を転換させるきっかけになった。ブールハーヴェは最初、ライデン大学で神学の研究を始め、医学に転じて同大学で医学を教えたのち、植物園長、化学教授となった。彼の医学者としての名声はヨーロッパ中に広まり、1715年にはピョートル大帝の訪問を受け、『医学入門 *Institutiones medicae*』(1708) は多くの言語に訳された。ブールハーヴェは優れた教師でもあり、オランダでニュートン主義を広めた中心人物のひとりであった。



Boerhaave



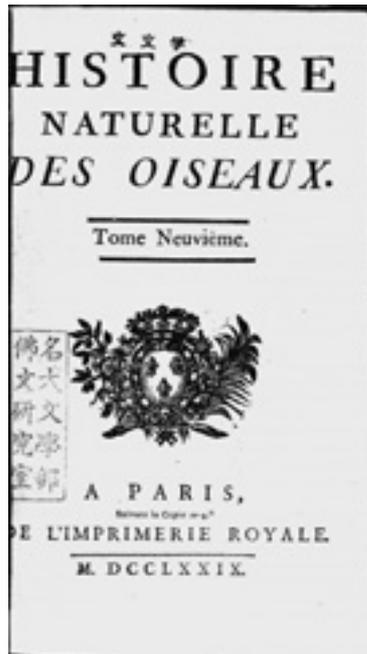
17. ビュフォン (1707–1788) 『博物誌』より『鳥類の博物誌』 (初版1772)

Buffon, Georges Louis Leclerc de. *Histoire naturelle des oiseaux*. Paris, 1772. (*Histoire naturelle, générale et particulière*) 文学研究科所蔵



Buffon

フランスの王立植物園園長にして大博物学者、ビュフォンによる『博物誌』の、鳥類に関する巻。ビュフォンは理神論的な傾向を持つ啓蒙思想家で、1739年にパリの王立植物園の管理を任されてからは博物学の大成に努め、1749年から44巻にのぼる膨大な『博物誌』の刊行を開始し、それは彼の死後も続けられた。彼の著書は、リンネに比べ実証的な学問性は弱いだが、その反面、宇宙や地球と生物の進化論のさきがけとなるような着想を披露している。展示の『鳥類の博物誌』(全9巻、1770–1783)は、王立印刷所による12折の版である。



うぐいすの図

18. ジャン (ジョヴァンニ) ・アルディーニ (1762-1834) 『ガルヴァニズム論』 (1806、初版は1804)

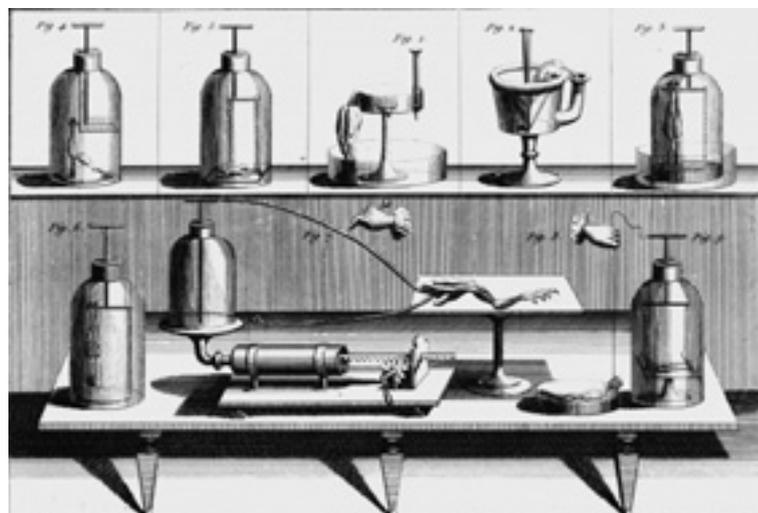
Aldini, Jean (Giovanni Aldini). *Essai theorique et experimental sur Galvanisme*. Paris, 1806.

中央館・貴重書室所蔵



Galvani

イタリアの物理学者アルディーニによる、ガルヴァニズム電気およびその応用に関する著作。「ガルヴァニズム電気」の名は、イタリアの解剖学者・生理学者ルイジ・ガルヴァーニ Galvani, Luigi (1737-1798) に由来し、彼の甥であるアルディーニは、その研究を編集し出版した。ガルヴァーニは、解剖された蛙の脚が金属片の接触によって痙攣する現象を観察し、生体の電気現象の研究に道を開いた。また、この現象の解釈をめぐる論争は、アレッサンドロ・ヴォルタ Volta, Alessandro (1745-1827) の電池発明にきっかけを与えた。



蛙の脚による実験の図

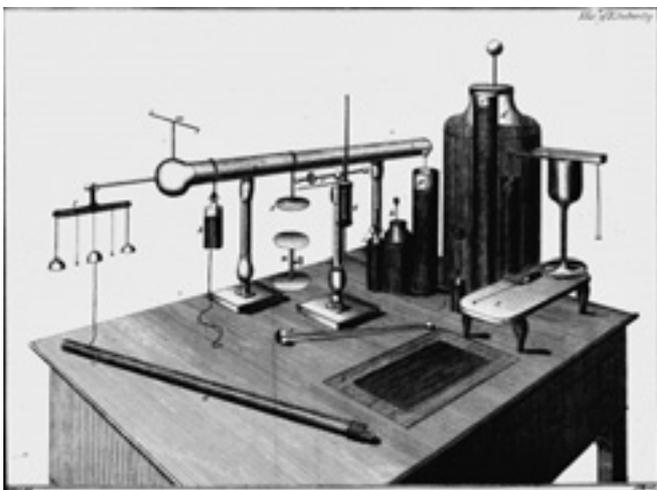
19. ジョージフ・プリーストリー (1733–1804) 『電気学の歴史と現状』(第3版1775、初版は1767)

Priestly, Joseph. *The History and Present State of Electricity: with Original Experiments*, 3rd ed. London, 1775.  
中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅢ」

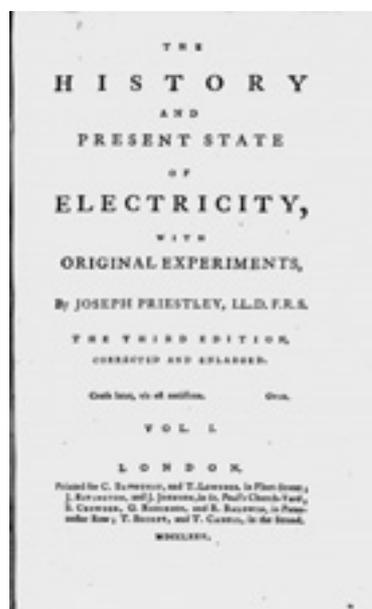


Priestly

同書は、イングランドの化学者にして、政治、社会、宗教思想家プリーストリーが、化学者として高い評価を受けた最初の著作(内容は電気学に関するもの)。彼は非国教徒として国教会を批判するいくつかの著作を出版し、1791年にはフランス革命を支持するなど、臆することない急進的な言説によって弾圧を受け、1794年にはアメリカに移住した。化学者としては、精力的な実験によって多くの気体を研究し、酸素を事実上発見したことで世紀末の化学革命に重要な役割を果たした。

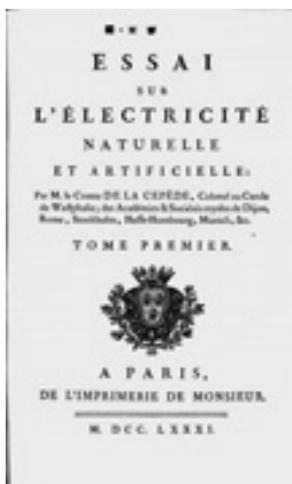


電気の実験器具の図



20. ラセペード (1756–1825) 『電気論』(初版1781)

Lacépède, M. le comte de (Bernard Germain Etienne de La Ville sur Illon). *Essai sur l'electricité & artificielle*. Paris, 1781.  
中央館・貴重書室所蔵



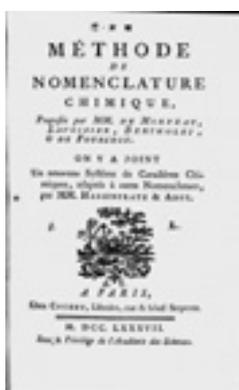
ビュフォンと親交の深かったラセペード伯爵による、電気学に関する著作。彼はビュフォンの『博物誌』に影響を受け、『電気論』と自然学に関する著作(1781–1785)でビュフォンに知られることになった。革命後は、ビュフォンと同じく王立植物園園長を務め、ビュフォン亡き後も『博物誌』の刊行を続けた。

21. アントワヌ＝ロラン・ラヴォワジエ (1743–1794) ほか『**化学命名法**』(初版1787)  
*Antoine-Laurent Lavoisier, Morveau, Lavoisier, Bertholet & Fourcroy. Méthode de nomenclature chimique.* Paris, 1787. 中央館・貴重書室所蔵



Lavoisier

フランスの化学者ラヴォワジエが、ギドン、ベルトレたちと刊行した、化学の命名法に関する著作。同書では元素を定義して、水素や窒素などの名称を使用し、近代的な化学の命名法を確立した。ラヴォワジエは、フロギストン説の批判、定量保存の法則の提唱や厳密な定量的方法の定式化により近代化学の基礎を築いたが、フランス革命の際に処刑された。



1<sup>er</sup> TABLEAU DES CARACTÈRES À EMPLOYER EN CHIMIE POUR DÉSIGNER LES SUBSTANCES SIMPLES. Par M. M. Berthollet & A. L. Lavoisier.

Lettres		SUBSTANCES MÉTALLIQUES		Sous-Éléments		Sels	
1	Chlorure chloré	Plomb	Plomb	①	Acide	①	Acide
2	Chlorure noir	Argent	Argent	②	Alcali	②	Alcali
3	Chlorure blanc	Mercur	Mercur	③	Terre	③	Terre
4	Chlorure rouge	Or	Or	④	Éther	④	Éther
5	Chlorure vert	Étain	Étain	⑤	Essence	⑤	Essence
6	Chlorure bleu	Antimoine	Antimoine	⑥	Essence	⑥	Essence
7	Chlorure brun	As	As	⑦	Essence	⑦	Essence
8	Chlorure noir	Bi	Bi	⑧	Essence	⑧	Essence
9	Chlorure blanc	W	W	⑨	Essence	⑨	Essence
10	Chlorure rouge	Fe	Fe	⑩	Essence	⑩	Essence
11	Chlorure vert	Co	Co	⑪	Essence	⑪	Essence
12	Chlorure bleu	Ni	Ni	⑫	Essence	⑫	Essence
13	Chlorure brun	Zn	Zn	⑬	Essence	⑬	Essence
14	Chlorure noir	Mn	Mn	⑭	Essence	⑭	Essence
15	Chlorure blanc	Pb	Pb	⑮	Essence	⑮	Essence
16	Chlorure rouge	Ag	Ag	⑯	Essence	⑯	Essence
17	Chlorure vert	Hg	Hg	⑰	Essence	⑰	Essence
18	Chlorure bleu	Sn	Sn	⑱	Essence	⑱	Essence
19	Chlorure brun	Sb	Sb	⑲	Essence	⑲	Essence
20	Chlorure noir	As	As	⑳	Essence	⑳	Essence
21	Chlorure blanc	Bi	Bi	㉑	Essence	㉑	Essence
22	Chlorure rouge	W	W	㉒	Essence	㉒	Essence
23	Chlorure vert	Fe	Fe	㉓	Essence	㉓	Essence
24	Chlorure bleu	Co	Co	㉔	Essence	㉔	Essence
25	Chlorure brun	Ni	Ni	㉕	Essence	㉕	Essence
26	Chlorure noir	Zn	Zn	㉖	Essence	㉖	Essence
27	Chlorure blanc	Mn	Mn	㉗	Essence	㉗	Essence
28	Chlorure rouge	Pb	Pb	㉘	Essence	㉘	Essence
29	Chlorure vert	Ag	Ag	㉙	Essence	㉙	Essence
30	Chlorure bleu	Hg	Hg	㉚	Essence	㉚	Essence
31	Chlorure brun	Sn	Sn	㉛	Essence	㉛	Essence
32	Chlorure noir	Sb	Sb	㉜	Essence	㉜	Essence
33	Chlorure blanc	As	As	㉝	Essence	㉝	Essence
34	Chlorure rouge	Bi	Bi	㉞	Essence	㉞	Essence
35	Chlorure vert	W	W	㉟	Essence	㉟	Essence
36	Chlorure bleu	Fe	Fe	㊱	Essence	㊱	Essence
37	Chlorure brun	Co	Co	㊲	Essence	㊲	Essence
38	Chlorure noir	Ni	Ni	㊳	Essence	㊳	Essence
39	Chlorure blanc	Zn	Zn	㊴	Essence	㊴	Essence
40	Chlorure rouge	Mn	Mn	㊵	Essence	㊵	Essence
41	Chlorure vert	Pb	Pb	㊶	Essence	㊶	Essence
42	Chlorure bleu	Ag	Ag	㊷	Essence	㊷	Essence
43	Chlorure brun	Hg	Hg	㊸	Essence	㊸	Essence
44	Chlorure noir	Sn	Sn	㊹	Essence	㊹	Essence
45	Chlorure blanc	Sb	Sb	㊺	Essence	㊺	Essence
46	Chlorure rouge	As	As	㊻	Essence	㊻	Essence
47	Chlorure vert	Bi	Bi	㊼	Essence	㊼	Essence
48	Chlorure bleu	W	W	㊽	Essence	㊽	Essence
49	Chlorure brun	Fe	Fe	㊾	Essence	㊾	Essence
50	Chlorure noir	Co	Co	㊿	Essence	㊿	Essence

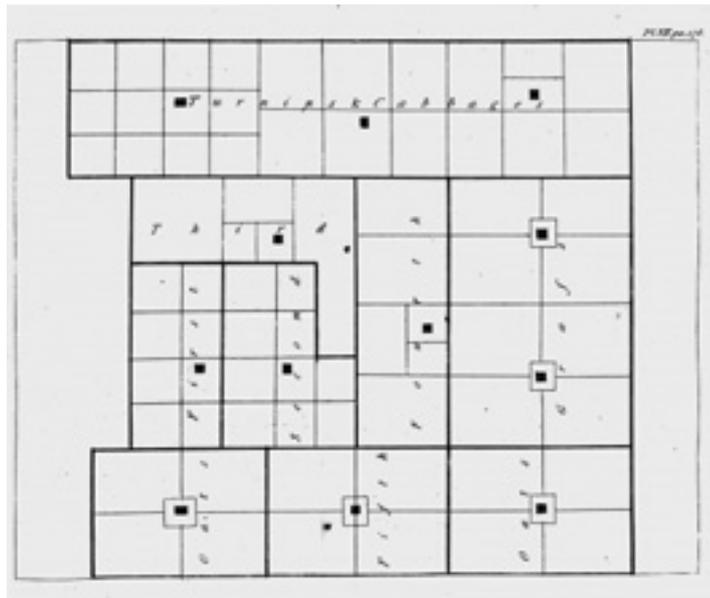
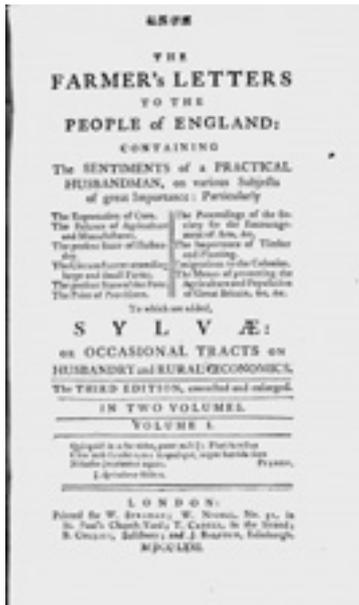
単体の表記を簡単にするために提案された記号

22. アーサー・ヤング (1741–1820) 『**農民からイングランド国民への手紙**』(第3版 1771、初版は1767)
23. 同『**農民のための手引書**』(初版1770)  
 Young, Arthur. *The Farmer's Letters to the People of England*, 3rd ed. London, 1771  
 —, *The Farmer's Guide*. London, 1770. ともに経済図書室所蔵・貴重図書



Young

『農民からイングランド国民への手紙』は、ヤングが1767年頃から国内を旅行して、農業技術を見聞した成果をまとめた最初の著作。彼はイングランド、サフォークの牧師の家に生まれ、1770年代には農業経営に行き詰まるものの、1780年代後半には、フランスからスペインのバルセロナまで視察旅行をし、旅行記をまとめるとともに農業改良を進めた。1793年には農務局長となり、イングランド各県の農業事情の調査報告書作成の中心となった。彼の農業改良論の基礎となったのは、輪作農法を取り入れて生産性を急速に高めつつあったノーフォーク県の農法(輪栽式農法)であり、その一生はこの農法の普及に捧げられたともいえる。また、囲い込み enclosure とそれに基づく大農経営の熱心な主張者でもあった。



輪作農法を説明する図



18世紀英国のコーヒー・ハウス

## Ⅳ 人間の学と古典の成立

ヨーロッパの17世紀が自然を解明するための新しい方法や体系が生まれた自然科学の世紀であったとすれば、18世紀は人間と社会の学問が誕生した時代であった。自然の法則を明らかにできたという確信に鼓舞されて、人間を宗教的人間観から離れ、経験的に研究することによって、正しい人間と社会についての知識を獲得し、社会改革の手がかりにしようとした。この試みから、現代の人間科学、社会科学の原型が生まれてきた。そして『人間本性論』、『法の精神』、『諸国民の富』といった、現代でもこの知識の分野に関する最大の古典と呼ばれる著作が次々に出版され、汎ヨーロッパ的な出版ネットワークに載せられ、原著や翻訳や要約によって、国境を越えて影響を与えたのである。

しかしこの時代の人間や社会に関する学問は、現代のように専門分化してはいなかった。それらは自然科学の方法や新しい自然観と結びついた、総合的な知識の一部を形成するものと考えられた。また政治や経済や社会についての学問は、「政治学」、「経済学」、「社会学」などへと分化する以前の段階にあり、倫理学と密接な連関を持ち、「道徳哲学」の一分野を構成していた。事実ジャン＝ジャック・ルソー、デイヴィッド・ヒューム、アダム・スミスのような代表的な思想家たちは、「専門」を持つことなく、広く自然や倫理や社会について自由に探求を続けたのであった。

同時代の北東アジアにも、新しい人間の見方や、社会や経済の研究が芽生えつつあった。それはたんなる輸入の学問ではなかった。社会や政治についての主要な古典がこの地域にもたらされたのは、19世紀後半になってからであった。山片蟠桃のような新しい知性は、西洋の新知識に刺激を受けながら、自国の社会や世界の新しい動きに対応して、この地域に強固に確立していた伝統的な学問の内部から登場したのである。

### 24. ジョン・ウィルキンズ (1614–1672) 『数学・哲学全集』 (初版1708)

Wilkins, John. *The Mathematical & Philosophical Works*. London, 1708.

中央館・貴重書室所蔵「言語哲学コレクション」



Wilkins

17世紀イングランドの科学者、数学者、聖職者であるウィルキンズの全集。彼は、後にアイザック・ニュートンが会長となったロンドンの王立協会の創設者のひとりで、イングランドの科学革命の組織者であった。1638年に出版した『月世界の発見 *The discovery of a world in the moone*』は、SFのはしりともいわれるが、18世紀の知識人を支配した宇宙人存在説の先駆的な著作としても知られる。世界の真の姿を表現できる普遍的な理想言語を創造しようとした『真の文字と哲学的言語についてのエッセー *An essay towards a real character, and a philosophical language*』(1668)では、18世紀の言語論の先駆者となった。



月世界論

普遍言語論

25. バーナード・マンデヴィル (1670—1733) 『蜂の寓話』 (1724、初版は1714)

Mandeville, Bernard. *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*. Paris, 1724.

中央館・貴重図書室所蔵

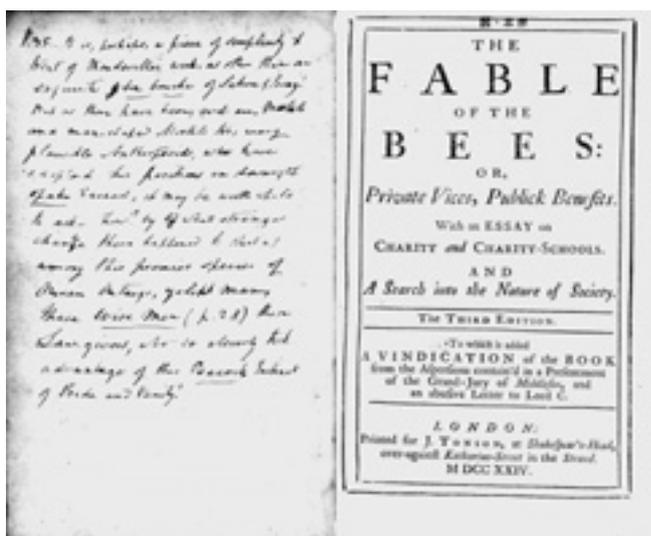
同書は、副題にある「私益はすなわち公益である」というパラドクスでよく知られ、人間本性のうち利己心を重視する彼の思想体系は、ハチスンをはじめその他多くの道徳哲学者の批判の的となった。他方で、利己心の原理から考察された分業・交換社会は、市場社会の把握として高く評価される。著者のマンデヴィルは、オランダ、ロッテルダムに生まれ、ライデン大学で医学と哲学を学び、その後イギリスに渡り帰化した。同書は、彼の代表作である。

展示した見返し頁には、詩人であり文芸理論家として著名なサミュエル・テイラー・コールリッジ Coleridge, Samuel Taylor. (1772—1834) が、マンデヴィルの人間および社会観を批判した自筆の書き込みがある。コールリッジは、イングランド、デヴォンシャーに生まれ、ケンブリッジ大学に特待生として入学後、中退している。詩人としてはワーズワースとの共著があり、また講演家、ジャーナリストとして、文学、神学、哲学、社会に関する批評を行った。

なお、このコールリッジの蔵書が名古屋大学にたどりつくまでの数奇な運命については、加藤龍太郎「奇本『蜜蜂物語』」(中日新聞夕刊、1972.12.1)、水田洋「蜂の寓話のコールリッジ所蔵本」(館燈 No.15、1973.2.15) に紹介がある。



Coleridge



26. フランシス・ハチスン (1694–1746) 『道徳哲学体系』 (初版1755)

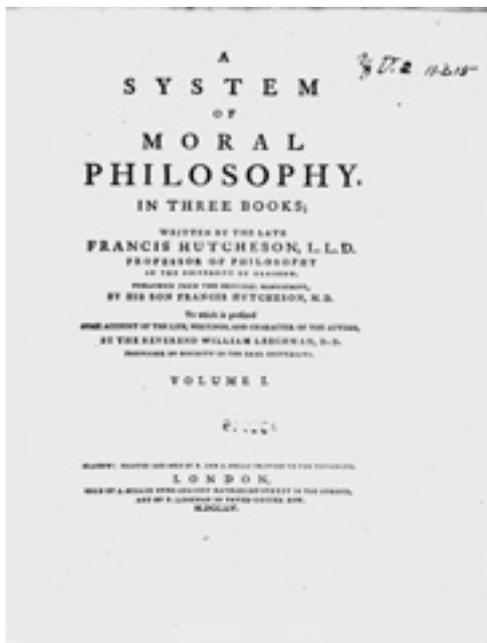
Hutcheson, Francis. *A System of the Moral Philosophy*. London, 1755.

中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅡ, Ⅲ」



Hutcheson

スコットランド、グラスゴー大学道徳哲学教授を務めたハチスンによる、道徳哲学講義を出版したもの。彼は、アイルランドのアルスターに牧師の子として生まれ、グラスゴー大学で神学を学び、のちに同大学で道徳哲学教授となった。スミスはそのときの教え子のひとりである。ハチスンは、善悪を判断する感覚＝モラル・センス学派の創始者として知られる。ちなみに同書は、著書の死後の出版である。



27. デイヴィッド・ヒューム (1711–1776) 『人間本性論』 (初版1739)

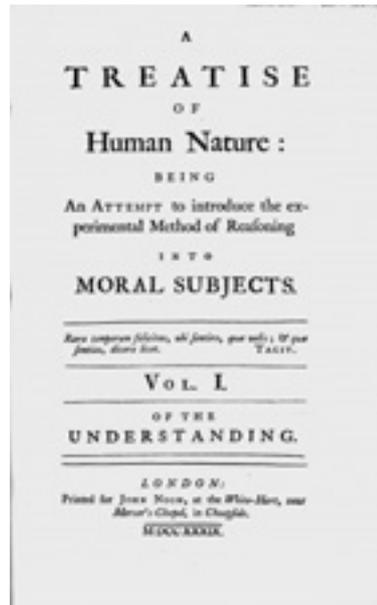
Hume, David. *A Treatise of Human Nature*, in 4vols. London, 1739.

中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅡ, Ⅲ」

18世紀スコットランドを代表する哲学者、デイヴィッド・ヒュームの主著。同書は、あらゆる知識を蓋然知に還元した点、スミスに先んじる同感概念の考察、社会契約論の否定、功利主義的な正義論などで、多くの批判を巻き起こした。彼は、スコットランド、エディンバラ近郊の法曹地主の末子として生まれ、エディンバラ大学で古典と法律とともに、ロックやニュートンを学び、商業にも従事した。最初の作品である同書は、本人が「印刷機から死んで生まれた」と表現するほど当時は不評であったが、18世紀の思想に大きな影響を与えた。



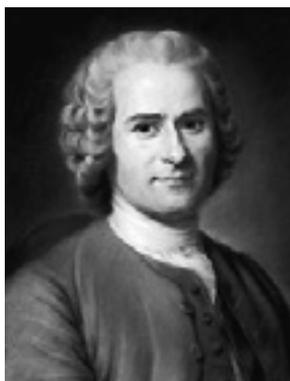
Hume



28. ジャン＝ジャック・ルソー (1712－1778) 『人間不平等起源論』 (1760、初版は1755)

Rousseau, Jean-Jacques. *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inegalité parmi les hommes*. Amsterdam, 1760.  
中央館・貴重書室所蔵「言語哲学コレクション」

ルソーによる文明批判の書。同書では、ディジョン・アカデミーの当選懸賞論文『学問・芸術論 *Discours sur les sciences et les arts*』 (1750) の、学問および芸術、技術の進歩は人間を墮落させ不幸にするという主張が、人類の歴史の歩みのなかで示されている。同書は『学問・芸術論』と同じく懸賞論文応募作品であったが、落選している。ルソーは、スイス、ジュネーヴに時計職人の子として生まれ、ヴァランス夫人の庇護のもと独学で勉強し、音楽批評をきっかけにパリのサロンに出入りするようになり、学識を積んだといわれている。



Rousseau



29. エドワード・ギボン (1737－1794) 『ローマ帝国衰亡史』 (初版1776－1788)

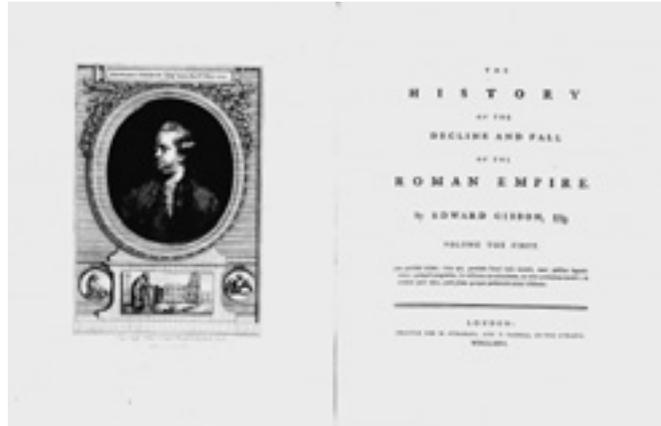
Gibbon, Edward. *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, in 6 vols. London, 1776-1788.  
中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションII」

2世紀から1453年のコンスタンチノーブル陥落までのローマ史を描いた18世紀イギリスの代表的

な歴史書。ギボンは、イングランド、サリーの資産家の家に長男として生まれ、幼少期の病弱を克服し、オックスフォード大学に入学するも、同大学には知的にも精神的にも失望し、ひとり神学に没頭するうちカトリックに改宗。これがきっかけで父の不興を買い、スイスのローザンヌのカルバン派牧師のもとに預けられた（後にプロテスタントに復帰）。同書は1776年に第1巻、1781年に第2、3巻、1788年に第4巻から6巻が出版された。著作の成功の裏で、キリスト教の勃興を扱ったふたつの章は事実と反するという批判を受けた。彼はこれに対し、『ローマ帝国衰亡史の15、16章の一部についての弁明』（1779）で反駁している。



Gibbon



### 30. アダム・ファーガスン（1723—1816）『市民社会史論』（初版1767）

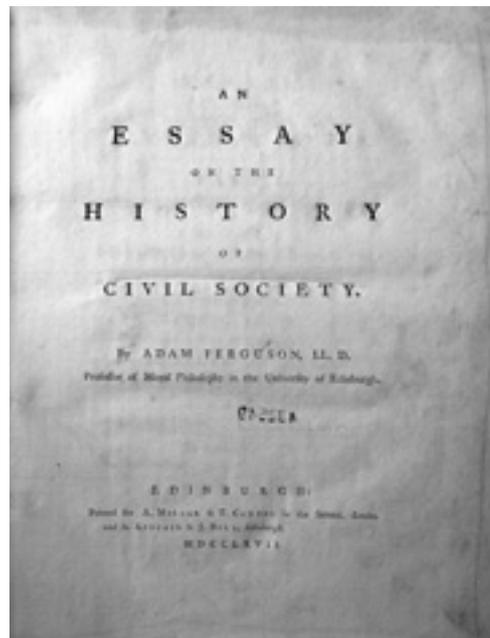
Ferguson, Adam. *An Essay on the History of Civil Society*. Edinburgh, 1767.

経済図書室所蔵・貴重図書

ホブズ・ルソー流の自然状態論を退けた経験主義的方法を徹底し、人間および社会が野蛮状態から文明状態に移行する過程を叙述した著作。同書について書評誌『マンズリー・レビュー』（1767）は、宗教と社会の関係について考察が十分でない点を指摘しつつも、ファーガスンが歴史的事実に基づき、人類と社会の壮大な記述を完成させた功績を称えている。ファーガスンはスコットランドのパーサチャーに、長老派牧師の子として生まれ、セント・アンドルーズ大学およびエディンバラ大学で学んだ。従軍牧師の職を経て、エディンバラ大学自然哲学教授、次いで道徳哲学教授に就任した。



Ferguson

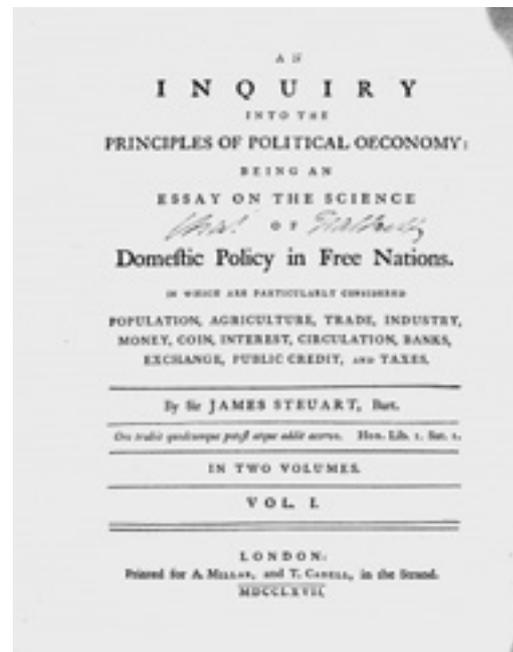


### 31. ジェイムズ・ステュアート (1713–1780) 『政治経済原理』 (初版1767)

Steuart, James. *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*. London, 1767.

経済図書室所蔵・貴重図書

スミスの『諸国民の富』の10年前に出版された、体系的な経済理論の書。ステュアートはスコットランド、エディンバラに貴族の長男として生まれ、エディンバラ大学で学ぶ。その後、大陸遊学先でスコットランド王党派と交流を持ち、1745年のジャコバイトの乱では反乱軍に加担したため大逆罪に問われ、大陸亡命生活は18年に及んだ。同書の執筆も、亡命中に始まったものである。



### 32. コンディヤック (1715–1780) 『商業と政府』 (初版1776)

Condillac, Etienne Bonnot de. *Le commerce et le gouvernement*. Amsterdam, 1776.

中央館・貴重書室所蔵

同書では、交換はいかなる場合にも等価ではないという結論に立脚した、コンディヤックの利潤学説が樹立されている。コンディヤックは、18世紀フランスの代表的な思想家のひとりである。彼はフランス、グルノーブルに生まれ、パリに出てのち、デイドロヤルソーと親交を深めた。感覚論に基づく効用価値説（主観的価値説）を採用し、重農主義を批判した彼の思想は、革命期のイデオログに多大な影響を与えたといわれる。また同書では、等価交換に関するテーゼと、農業のみを生産的とみなす重農学派の2大テーゼが全面的に批判されている。



Condillac



33. アダム・スミス (1723–1790) 『道徳感情論』 (初版1759、第8版1797)

Smith, Adam. *The Theory of Moral Sentiments*. London, 1759. 8th ed. London, 1797.

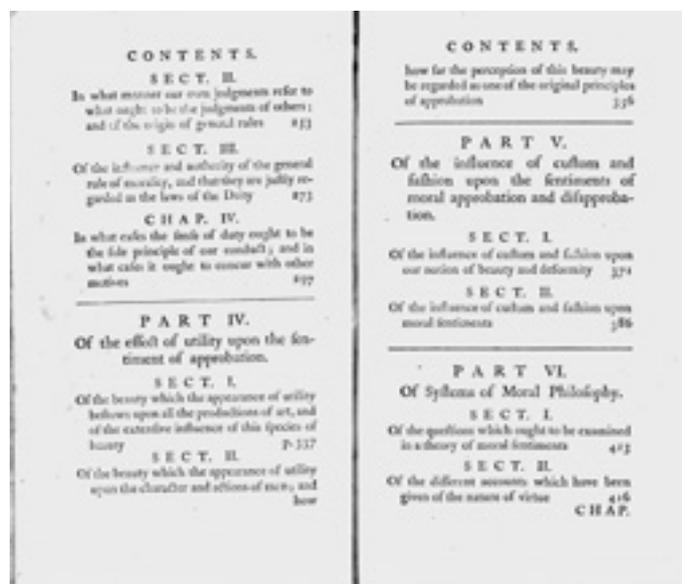
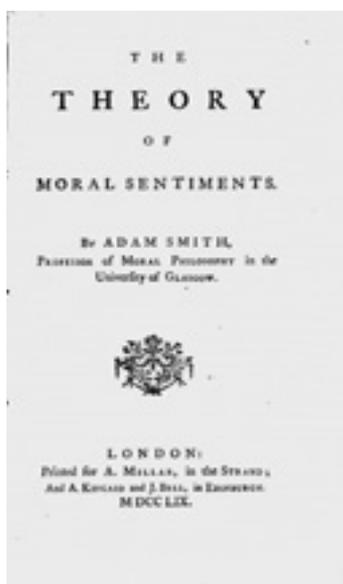
33-1. (初版) 中央館・貴重書室所蔵「ホップズ・コレクションⅢ」

33-2. (8版) 経済図書室所蔵・貴重図書

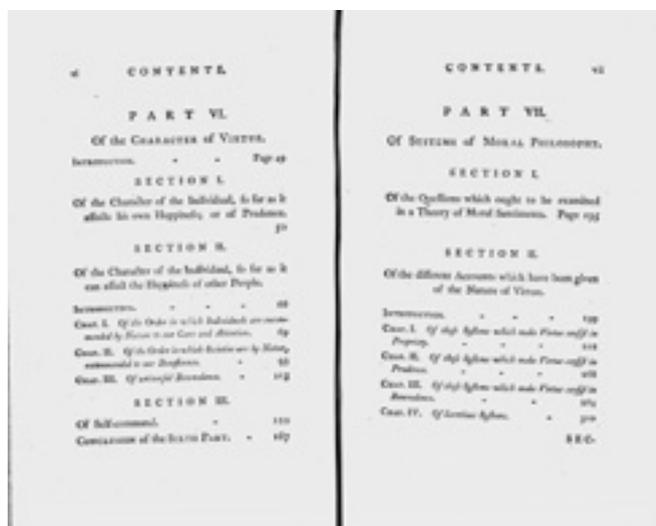


Smith

スミスの最初の著作であり、彼がグラスゴー大学で行った道徳哲学講義 (1752–1763) のうち、おもに倫理学に関する著作。同書では、立場交換に基づく「同感」の原理から、行為や感情の適宜性が説明されている。死の直前に刊行された第6版 (1790) では大幅な改訂が行われ、新たに第6部「徳の性格について」が追加され、従来の第6部「道徳哲学の諸体系について」は、第7部として残された。スミスはスコットランド、カーコーディに税関吏の次男として生まれ、グラスゴー大学でハチスンに師事した後、同大学の道徳哲学教授に就任した。



初版目次



第8版目次

### 34. ドルバック (1723–1789) 『自然の体系』 (初版1770)

Holbach, Paul-Henri Thiry, Baron d'. *Système de la nature*. London, 1770.

中央館・貴重書室所蔵「自由思想家コレクション」

ドルバック男爵の家で定期的に行われたサロンには、ルソーやコンディヤック、ラ・メトリら当時の著名な啓蒙思想家の多くが参加し、同書はこのサロンでの議論を集大成したものと思われる。同書では唯物論の立場が貫かれ、自然、あるいは物質的世界こそが精神を含めた現象の原因であり、すべてはその「自然の体系」より説明されると論じられる。自然の産物である人間は物質的存在であり、靈魂などの精神的存在の実在性は擁護されず無神論に結びつくため、当時としては大変危険な思想であった。ドルバックは、エーデスハイムにドイツ人貴族の子として生まれ、パリでのディドロとの交遊を通じ、『百科全書』に鉱物学、化学、博物学などの項目を執筆した。



Holbach



### 35. リチャード・プライス (1723–1791) 『神意、祈禱、理性、キリスト教に関する4つの論文』 (第4版1777、初版は1767)

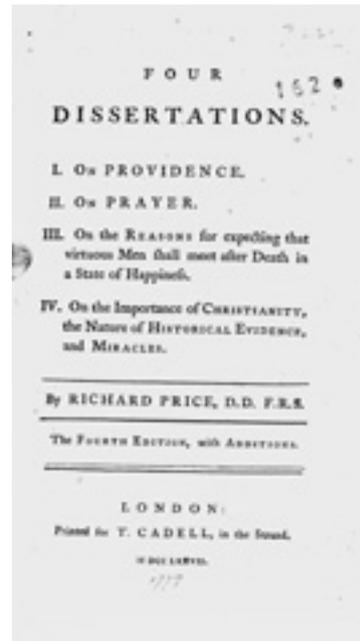
Price, Richard. *Four Dissertations: Providence, Prayer, Reasons & Christianity*. London, 1777.

経済図書室所蔵・貴重図書

プライスの宗教的見解をまとめた著作。神は「最初の原動力」とされ、自然の営みはすべて、神の力の発露として捉えられており、ニュートンの宇宙観の受容が見られる。予定調和的な世界にあっても、ときに神意は捉えがたく、数々の矛盾が解決しえなく感じられるのは、そもそも有限な人間が、無限なる神の意思を完全に理解するのは不可能だからであるとする。プライスは同書によって、スコットランド、アバディーン大学から神学博士の学位を受けた。彼は、ウェールズ、グラモーガンに生まれ、ユニテリアン派の牧師となり、急進的な思想家として知られる。アメリカ独立戦争に際して発表した『市民的自由 *Observations on the Nature of Civil Liberty*』 (1776) では、アメリカ側の正義を擁護し、これをめぐってパンフレット論争が起きた。また晩年、フランス革命に対する支持を表明した『わが祖国愛について *A Discourse on the Love of our Country*』 (1789) では、バークの批判を浴びることになった。



Price



読書する女性 (1766年頃、イギリス)



書店で禁書処分の本を求める客(1781年、フランス)

## V 本の世界旅行

日本人も大洋を越えて盛んに海外貿易を行っていた16世紀から17世紀はじめとは異なり、清朝中国、李氏朝鮮、江戸時代の日本と、18世紀の北東アジア三国は海禁体制をとっていた。しかし外交的、政治的には「内向き」な姿勢をとっていたこれらの国々でも、当時めざましく発展しているヨーロッパ諸国の正確な情報を吸収し、把握した多くの人々がいた。それはたとえば清朝の皇帝であり、長崎のオランダ通詞であり、江戸の学問好きな町人たちであった。そしてその主な手段は書物だった。

書物は海を越え、翻訳されて形を変えつつ、世界を旅した。ヨーロッパの内部では、「文芸共和国」ともいわれる国境を越えた知識社会が成立して書物の流通を助け、重要な著作の多くは各国語に翻訳された。さらに書物は未知の国へと旅立った。欧米の軍艦が北東アジア諸国に公式の開国を迫った19世紀にさきだって、この平和な使者たちはすでにこの地域に到達し、自然科学的な知識を中心に、知の共有がひろまっていった。そして反対に、北東アジア諸国の情報もヨーロッパにもたらされ、これら未知の文明大国の存在は、啓蒙運動の大きな知的刺激となった。

### 翻訳と創作

書物は貴重な情報や思想や学問を伝達する重要な媒体だった。とくにヨーロッパと北東アジアという遠くはなれた地域の間ではそうだった。しかし著作権が確立し、著者のオリジナリティが尊重される現代と異なり、「翻訳」は一種の創作ともいえる面を持っていた。日本にニュートン物理学と地動説を紹介したといわれる志筑忠雄の『暦象新書』は、その原版であるイングランドのニュートン主義者ジョン・キールの本文を、多くの訳語を自ら創造して翻訳し、その内容に注釈を加えて解説し、さらには自身の手になる補論を付け加えることで成立した、一つの再解釈の書であった。それは「気」の概念に基づく東洋哲学とニュートンの科学を結びつけようとした、独自の自然哲学の書だった。

江戸後期の代表的な西洋天文学の教科書として知られる吉雄常三の『理学入式遠西観象図説』は、流浪の知識人常三が、尾張名古屋で私塾を開いた際の講義ノートがもとになっている。江戸の文化に大きな影響を与えたオランダ大通詞吉雄耕牛の家に生まれ、吉雄流の医学者であり、志筑忠雄の影響を受けた天文学者・自然科学者でもあった常三の詳細な履歴は不明だが、長崎を出て大坂、江戸、名古屋と、仕官を求め各地のサロンを転々とした放浪の旅は、18世紀フランスの「フィロゾフ」たちを思い出させる。著者によれば、『理学入式遠西観象図説』が主に利用したのは、イングランドのベンジャミン・マーティン<sup>7</sup>とオランダのヨハネス・マルティネット<sup>8</sup>の著書だった。この二人は科学の大衆化の時代である18世紀をそれぞれの国で代表する、有名な科学啓蒙家である。科学器具製作者であった彼らは、イングランド、オランダの各地を回り、実験とそれにもとづくニュートン理論の解説によって多くの受講者を集め、受講料で生計をたてた。長崎で仕事をできなかった常三もまた、日本の各地で同じような活動を行った。

そればかりでなく、書物の内容自体も18世紀ヨーロッパの知識のあり方に照応する。優れた天文学入門書である『遠西観象図説』は、ガリレオの相対論に始まり、太陽系外惑星の存在と宇宙人実在論にいたるまで、思想的・学問的に、18世紀ヨーロッパのニュートン主義者たちの啓蒙書と同じ

7 Benjamin Martin(1705-1782). *The Philosophical grammar: being a view of the present state of experimented physiology, or natural philosophy*. (London, 1735).

8 Martinet, Joannes Florentius(1729-1795). *Natuurkundige en ophelderende aanmerkingen, over het eerste deel van den Katechismus der natuur*. (Amsterdam, 1778-1779). aka. Katechismus der natuur.

内容を持っている。だが哲学的枠組みについては、常三は志筑忠雄を継承して、東洋哲学の基礎の上にニュートン力学を組み立てようとしている。それは東洋的ニュートン主義と呼べるだろう。

このヨーロッパと北東アジアの不思議な類似性は、18世紀のヨーロッパ科学が専門的学ではなく、まだ倫理学や神学などと結びつきを保った総体的な知識の一部であったことにも一つの原因がある。とくに志筑忠雄や常三が格闘したイギリスやオランダのニュートン主義の啓蒙書は、ニュートン力学が神による世界の創造の証明を与えていると主張していた。重力の原因や太陽系の数理的秩序の成立を合理的に説明できないことが、かえって「神の智慧」を示しているとさえ言われていた。志筑忠雄は、この「説明」の空白部分に東洋哲学を挿入し、さらにはキールを越えて、カントの天文学理論を思わせる太陽系生成論を展開した。ニュートン天文学を解説しながら、東洋の学問は西洋に劣っていないと語る常三の自信は、科学理論にとどまらないこのような思想的対決を背景にしている。このような出会いは、科学の制度化が完成しつつある時代である明治以後に行われた、西洋科学の「導入」とは異なっていたのである。そして当時のヨーロッパの知のあり方自体が、そうした「異文明間の対話」を可能にし、「翻訳」がそのための舞台を提供していた。

### 36. リンネ (1707—1778) /ハウトゥイン『自然の体系』全37巻 (1761—1785)

Linné, Carl von. /Houttuyn, M. *Natuurlyke Historie of Uitvoerige Beschryving der Dieren, Planten en Mineralen, volgens het samenstel van den heer Linnaeus in 37 vols.* Amsterdam, 1761—1785.

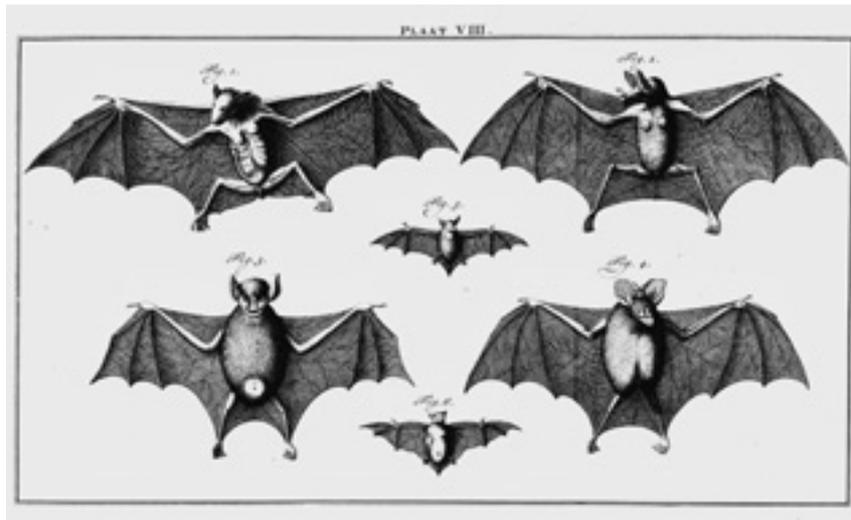
中央館・貴重書室所蔵



Linné

出版者ハウトゥイン Houttuyn, M の同書名を直訳すると、『自然誌、またはリンネ氏の体系による動物・植物・鉱物の詳細な記述』となる。全37巻の内訳は、動物部18巻18冊・植物部14巻14冊・鉱物部5巻5冊である。分類体系や学名はリンネによるが、その他は出版者自身の膨大な研究成果をまとめたものであり、江戸時代の蘭学者たちによって使用された。また、飯沼慾齋や伊藤圭介の関係においても貴重なオリジナル資料である。著者リンネは、スウェーデンの博物学者であり、1742年にウプサラ大学植物園長に就任し、鉱物、植物、動物の全般を研究した。彼は生物の分類学を大成し、分類学の父と呼ばれる。それらは進化論以前の業績だが、種と類による命名法（二名式命名法）や、種より上位の分類である綱、目、属は現在も使われている。

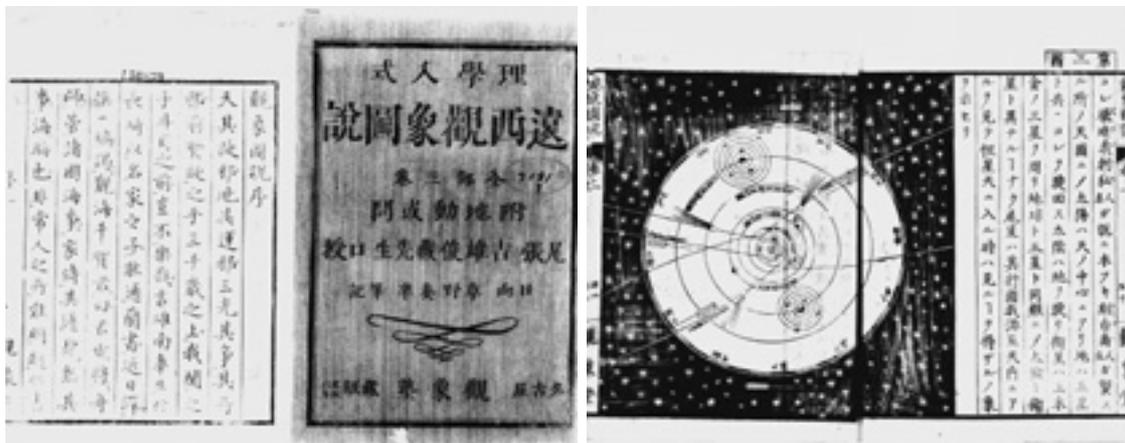




37. 吉雄常三 (1787—1843) 『理学入式遠西観象図説』 (1828)

中央館・神宮皇学館文庫所蔵

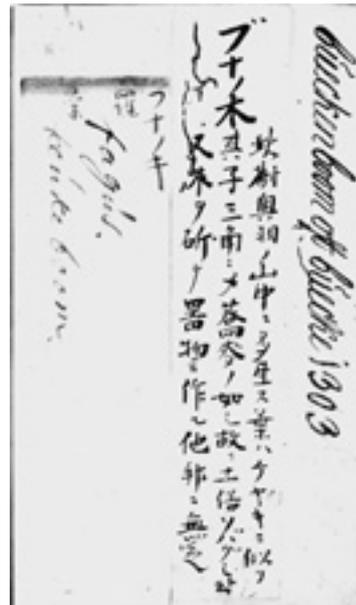
吉雄常三の講義を門下の草野養準が筆録したものを、養準の死後、常三が編集して出版した天文学書。文政6年(1823)の初版後、版を重ね、江戸時代末期の代表的な天文学教科書・啓蒙書として普及した。常三によれば、本書ではおもにマーティンとマルティネットの著作を参考にしたと述べている。巻末には地動説の普及をめざし、常三自筆の「地動或問」が付されている。『日本思想体系』65などに収める。



38. 吉雄耕牛 (1724—1800) 「ド、ネウス本草草木名彙」

中央館・伊藤圭介文庫所蔵

常三の祖父、吉雄耕牛によるオランダの植物学者 Rembertus Dodonaeus (1517—1585) 『草木譜』(Crydyt-Boeck) の翻訳稿本。耕牛は語学に堪能で、半世紀にわたり長崎大通詞を務め、蘭館医師に医学を学び、吉雄流外科の祖ともなった。門人は、平賀源内、前野良沢、杉田玄白など多彩で、『解体新書』に序文を書いたことでも知られる。なお、この稿本は、伊藤圭介が「錦窠百珍之一」として愛蔵したものである。ドドネウスの原著は1618年、1644年版が日本に伝わり、野呂元丈、平賀源内、吉雄耕牛らが抄訳を試みたのち、松平定信の命で、石井当光らが完訳したとされるが、現存しない。



39-1. アダム・スミス (1723-1790) 『諸国民の富』 (初版1776)

Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. London, 1776.

経済図書室所蔵・貴重書

・フランス語訳 (39-2)

Roucher, Jean Antoine. *Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations*. Paris, 1790.

経済図書室所蔵・貴重書 (初訳は、Blavet, J.L. による La Haye, 1778)

・ドイツ語訳 (39-3)

Garve, Christian. *Untersuchung über die Natur und die Ursachen des Nationalreichthums*. Breslau, 1794. 経済図書室所蔵・貴重書 (初訳は、Schiller, J.F. and Wichmann, C.A. *Untersuchung der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern*, in 2 vols. Leipzig, 1776-1778)

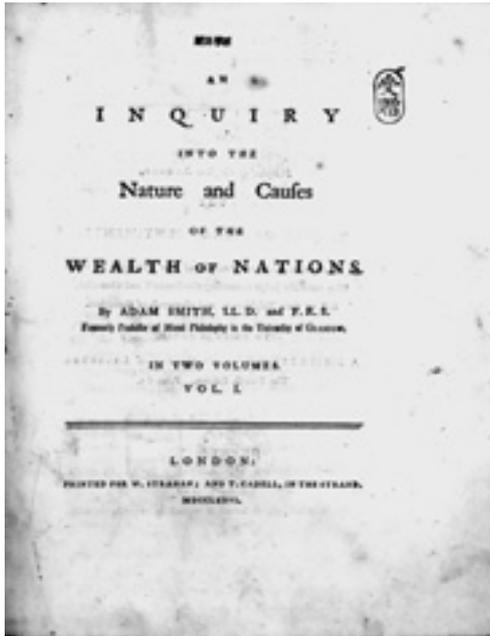
・日本語訳 (39-4)

石川暎作・瑳峨正作『富國論』全12巻 (1884-1888) 経済図書室所蔵

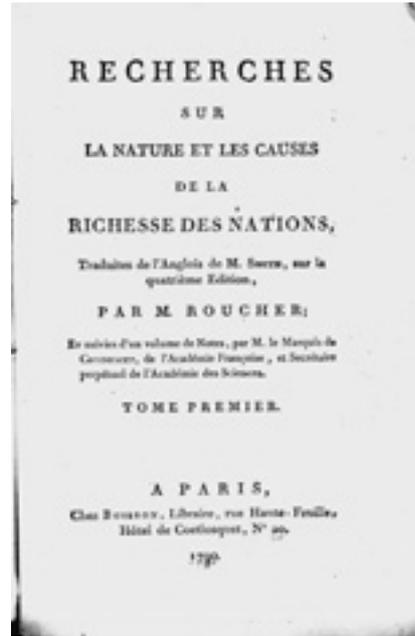
・中国語訳 (39-5)

嚴復『原富』(全集内に収録1998、初訳は1902) 文学研究科所蔵

経済学者の創始者と見なされているスミスの主著。スミスが、『道徳感情論』(1759)に続き出版した同書は、各国語に翻訳されて大きな影響力を持った。最も早い翻訳は、刊行と同年に出版されたドイツ語訳であり、これにフランス語訳が続く。和訳は19世紀末、中国語訳は20世紀初頭に出版されている。同書の翻訳には、クリスティアン・ガルヴェ、コンドルセ、嚴復などが関わり、それ自体がひとつの思想史を構成しているともいえる。



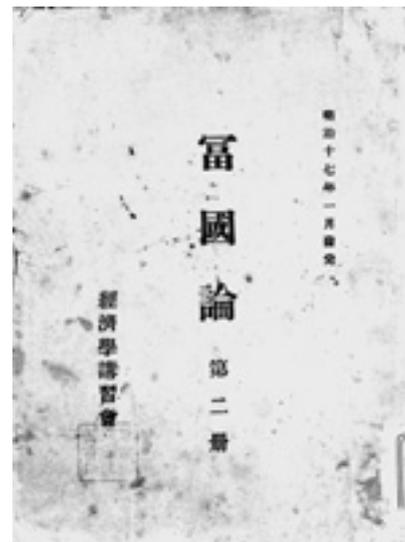
初版『諸国民の富』



フランス語訳



ドイツ語訳



日本語訳

#### 【コラム4】吉雄常三の履歴、作品、関連資料

##### ①吉雄常三（1787～1843）の履歴

江戸時代後期の蘭学者。諱は尚貞、通称は俊蔵のち常三。南臯と号す。阿蘭陀通詞吉雄耕牛の次男定之助の子として天明7年（1787）長崎に生まれる。叔父の吉雄権之助に蘭学を学んだのち、江戸・大坂をへて、文化13年（1816）来名。名古屋にて私塾観象堂を経営する傍ら、医療にも従事。文政9年（1826）尾張藩から二人扶持を給され、同11年御目見医師、天保7年（1836）寄合医師、同10年奥医師となる。訳著には、オランダ語の格変化を述べた『六格前篇』3巻（文化11年）のほか、『和蘭内外要方』12巻（文政3年刊）、『西説観象経』一折（文政5年刊）、『理学入式遠西観象図説』3巻（同6年刊）、『粉砲考』

(天保14年)などがある。天保14年9月2日、雷汞粉製法の実験中、爆発により事故死したと伝えられている。享年57歳。

## ②墓所：平和公園白林寺墓所（名古屋市千種区）

白林寺は、1625年創建の妙心寺派寺院で、成瀬家菩提所。常三の碑文は、吉川芳秋著作集（後掲）に所収。

## ③訳・著

- 1) 六格前篇・稿本3冊（文化11年）静嘉堂文庫所蔵  
→『和蘭文法書集成4』（ゆまに書房 2000.2刊）
- 2) 瘍科精撰図符（文化11年）早稲田大学図書館所蔵  
「洋々斎主人、羽栗長隠」独医ロレンツ・ヘイステルの外科書のうち図解部分の翻訳
- 3) 和蘭内外要方・12巻（文政3年）
- 4) 西説観象経・折1冊（文政5年）→吉川芳秋
- 5) 遠西観象図説・3冊（文政6年）→『日本思想大系』所収  
    〃          ・4冊（文政9年）→『名古屋叢書13』所収
- 6) 晴雨考・各1冊（天保5年～14年）
- 7) 粉砲考（現存2冊？刊記無）→『名古屋叢書13』『江戸科学古典叢書2』所収
- 8) 和蘭薬剤譜（写本）
- 9) 和蘭草木譜（写本）

## ④関連史料

年未詳正月〔攘夷決定による良策上申の件及び惣髮改名願いにつき書付扣〕  
年未詳（天保7－8年？）〔上京時の願達取扱い方につき伺書〕  
野村立栄「免帽降乗録」（内藤記念くすり博物館所蔵）  
野村立栄「医家姓名録」（名古屋市鶴舞中央図書館所蔵）  
「藩士名寄」名古屋市蓬左文庫所蔵  
奥村得義「松濤棹筆」（『名古屋叢書』）

## ⑤関連著作・論考

- 1) 堀川柳人（安藤次郎）『尾張蘭学者考』（私家版、1933年）
- 2) 『名古屋市史 人物編』（名古屋市、1934年）
- 3) 『郷土科学者伝記叢書：科学の犠牲者 吉雄南臯』（愛知県科学技術振興会、1944年）
- 4) 吉川芳秋『随筆 尾張郷土文化医科学史考』（私家版、1955年）  
「日本化学鉄砲研究の犠牲者・尾張藩南臯吉雄常三先生」  
「和蘭文詞学を唱えた吉雄常三」  
「吉雄南臯の『西説観象経』」  
「吉雄常三の『晴雨考』」  
「吉雄常三先生の子孫と遺物」
- 5) 吉川芳秋『本草蘭医科学郷土史考』（私家版、1971年）  
「愛国の蘭方医家高野長英と尾張の人々」（1968）
- 6) 広瀬秀雄「吉雄南臯と『遠西観象図説』」（日本思想大系『洋学下』、岩波書店、1972年）

- 7) 千野光芳「吉雄常三著『粉砲考』－江戸時代化学実験書として」『化学史研究』14.1980
- 8) 渡辺敏夫『近世日本天文学史』（恒星社厚生閣、1987年）
- 9) 吉川芳秋『医学・洋学・本草学者の研究：吉川芳秋著作集』（八坂書房、1993年再録）
- 10) 岸野俊彦『尾張藩社会の文化・情報・学問』（清文堂、2002年）

### 吉雄常三（略年表）

西暦	和暦	事 項
1787	天明 7	於長崎、吉雄耕牛次男定（貞）之助の子として誕生
1800	寛政12	8 / 祖父吉雄耕牛没
1814	文化11	於大坂、羽栗三溪（洋斎）として『六格前篇』著す
1815	文化12	江戸滞在、宇田川らと交流 ←大槻磐里『蘭学凡』による
1816	文化13	9 / 11（18）来名、小川守中（志水家時習館学頭）宅に半年逗留 野村立栄に江戸蘭学者の情報伝える、「尚貞先生」（免帽降乗録）
1817	文化14	3 / 8 長崎へ帰郷、再来名、家塾「観象堂」経営
1820	文政 3	尚貞吉雄先生夜講（免帽降乗録） 「3 / 8 曆象新書、4 解体新書、5 / 10生前父、9 運氣論、毎日午前蘭学譚」 『和蘭内外要方』12巻刊（浅井貞庵序）
1821	文政 4	石黒濟庵による名古屋での初解剖を参観 門人草野養準の「遠西観象図説」題言（出版企図）
1822	文政 5	閏 1 / 24高木経貞宛秦鼎書状に「長崎外科医吉雄俊蔵・・（猪）解体」 6 / 『西説観象経』刊〔1 / 宇田川榕庵『苦多尼訶経』刊〕
1823	文政 6	『理学入式遠西観象図説』3冊刊、この年より伊藤圭介が師事
1824	文政 7	七間町四丁目東側居住、御用人支配（立栄稿「医家姓名録」）
1826	文政 9	9 / 11 蘭学心得・翻訳により二人扶持（「藩士名寄」、以下同） 『理学入式遠西観象図説』4冊刊
1828	文政11	3 / 御目見医師
1830	天保元	来名した高野長英と面会（伊藤圭介宛書状）
1835	天保 6	嘗百社本草会にチョコレート・駝鳥卵を出品（『乙未本草会物品目録』）
1836	天保 7	4 / 24 寄合医師、七人扶持 *この頃出張のため中村又蔵附属上京
1837	天保 8	8 / 『丁酉晴雨考』刊（尾張医学館門人吉雄常三考定）～天保11年
1838	天保 9	2 / 8 奥医師格：切米25石・五人扶持、前大納言御用向心得
1839	天保10	3 / 10 奥医師：元高30俵、100俵足高、前大納言御用向 9 / 10 本道専門・外科金瘡兼務
1842	天保13	1 / 11 足高50俵
1843	天保14	9 / 2 事故死（享年57歳）

## 座談会 「書物の18世紀学」

### 第1部 出版を通じてみたヨーロッパと東アジア

#### 参加者

安藤隆穂（名古屋大学 大学院経済学研究科、日本18世紀学会会員）

フランス啓蒙、コンドルセ

川島慶子（名古屋工業大学 工学研究科、日本18世紀学会会員）

啓蒙期フランスにおける科学

高橋博巳（金城学院大学 文学部、日本18世紀学会会員）

近世漢文学

寺田元一（名古屋市立大学 人文社会学部、日本18世紀学会会員）

18世紀フランス思想

長尾伸一（名古屋大学 大学院経済学研究科、日本18世紀学会会員）

ニュートン主義と社会科学の形成

堀田誠三（名古屋経済大学 経済学部、日本18世紀学会会員）

ベッカリーアとイタリア啓蒙

### 東西の蔵書のあり方と、知識の独占

長尾：最初に、西洋と東洋の書物の保管に関して、お伺いできますか。

安藤：日本の幕府はどのようにして、書物を保存していますか。

高橋：紅葉山文庫<sup>1</sup>ですが、めったに見られません。せっかくあっても学者が見られなければ、仕方ありません。きれいな本は大体全部、将軍家が持っています。～などは、偶然九州の平戸藩主松浦静山の所蔵ですが、いい本は大体将軍家、次は大名となります。

川島：茶碗などと同じ扱いだと考えてもいいですか。

高橋：そうです。おもに特権階級が所有しており、自由がなかったというのはそういう意味です。

安藤：人に見せないのですね。

長尾：幕府に集中してしまうわけですか。

高橋：そうです。あるいは諸大名、とりわけ好学の大名です。

安藤：18世紀について、幕府がどういう物を集めていたかという視点から捉えると、面白いかもしれませんね。

高橋：大名が持っている物でも家臣に見せれば、あるいは褒美で与えたりすれば役に立つといえます。

安藤：民間での図書の保存や流通と、幕府による（倉庫に入れた）保存の違いは、興味深いですね。



1 紅葉山は江戸城内中央にある小山で、歴代将軍の霊廟が営まれた。また、その東北には具足蔵とともに、将軍の御文庫（紅葉山文庫）などの建造物があった。

高橋：例えば、蓬左文庫<sup>2</sup>の本はきれいです。

寺田：ショメールの翻訳も『厚生新編<sup>3</sup>』という形で、オランダで出てすぐ日本に入ってきていて、松浦静山などはオランダ語で持っていました。しかし、読む能力は持っていません。そこで、幕府はそれを蕃書和解御用掛で継続的に訳させています。しかし結局江戸時代には出版されず、外部に持ち出すこともできませんでした。おそらく3分の1くらいは訳していて、しかも解説や脚注のようなものもたくさん付けて、日本的な状況に適合させてあります。それが完全に、蕃書和解御用掛に死蔵されています。

川島：書物に限らず絵画に関してもそうなのですが、ダ・ヴィンチなどが教会に絵を描いた場合、誰でも見に来られますね。教会の絵はキリストの生涯を表すため、字が読めない人にとっては聖書の代わりになり、書物に関しても、フランスの王立図書館ではもっと人が近づきやすいです。しかしお茶会だと、例えば大名が優れた茶碗をそのときだけ持ち出してきて、しかも茶会には選ばれた特別な人しか参加できません。西洋では美術館を作ったり、あるいはサロンを開いたり、書物に限らず全体的にあって、「公共に見せる」という意識がありますが、東洋では襖絵など、隠すように持っていて特別な場合にだけ見せるのですよね。

長尾：幕府が本を集めて死蔵する際には、知識の独占といった意図があったのか、あるいは単に貴重品だからそうしたのでしょうか。

安藤：従来の江戸の見方は、鎖国して日本は閉じていたというイメージですが、最近の見方ではむしろ、幕府は情報独占していたのであって、ヨーロッパに向けて開いていたということです。

川島：しかし自国の人に対しては、閉じていたわけですね。

安藤：そうですね。幕府と比較して、民間はどうであったのかといいますと、例えば絵の具などはすぐに手に入りましたし、結構開かれていたようです。

堀田：読書のあり方に関して、具体的にどのように成立していたのか見てみると、日本では識字率の高さが指摘できます。イタリアの例を見ると、1871年の時点で、南部で2割、北部では2



2 正式名称は「名古屋市蓬左文庫」といい、現在は徳川美術館と同じく愛知県名古屋市東区徳川町の徳川園にある。もともと蓬左文庫は、徳川家康が第9子の尾張徳川義直に多数の蔵書を与えたのに始まるといい、全部で約10万点の中国、朝鮮の文献、古地図、尾張藩関係の文書がある。河内本源氏物語、金沢文庫本続日本紀は特に重要なものである。なお、「蓬左」とは、名古屋のことである。

3 江戸幕府（暦局蕃書和解御用）の事業として行われた、ショメール Chomel, Noel の『日用百科事典』（オランダ語、1778年）の翻訳である。ショメールの翻訳といわれているが、ショメール自身の書いた『家政事典』（仏語、初版1709年）とオランダ語版『日用百科事典』とはまったく別物といっているほど異なり、後者には大幅な増補改訂が施されている。実際、このオランダ語版は、ショメール死後に出た『家政事典』の増補改訂新版（仏語、1740年）を、その後出版されたデイドロ、ダランベール編『百科全書』（パリ版1751-72年）の記述なども利用してさらに大幅に増補改訂して新たに作り直された、単なる家政事典にとどまらない日用百科事典といえる。この翻訳事業は、その量と質からいって、江戸時代西洋書翻訳事業中第1に置かれるべきものであり、この事業が、当時の蘭学を公学にまで高めたといわれる。馬場佐十郎、大槻玄沢、宇田川玄眞、小関三英、宇田川榕庵などが翻訳にあたり、文化8年（1811）3月から少なくとも弘化2年（1845）8月まで約35年間訳述が行われたが、ついに昭和になるまで出版されなかった。この訳述がZまで訳了したかどうか不明である。伝来の「厚生新編」は70（68冊）であるが、その後、古書店からその続編と思われる32冊が見出され、これも静岡県立中央図書館葵文庫の所蔵となっている。

から4割といった具合です。日本はやはり高いといえます。

寺田：むしろ、高くなっているのです。江戸後期にかけて寺子屋がどんどん広まるにつれ、識字率は18世紀後半から19世紀前期にかけ、大きく伸びます。

堀田：民間で識字率が高くなってきたことと、幕府の情報独占はどう関わっているのか、東西で比較すると、19世紀との関わりも見えてくるかもしれません。

高橋：それにはレベルの違いがあり、普段の生活のために識字率を高めるのと、学問のためにそうするのでは、少し別です。支配という側面からいえば、高札（禁令などを人民に知らせた、役所の掲示板）が読めないのは問題ですから、その程度の勉強は必要ですが、学問となるとそれよりはるかに高いレベルが必要です。

川島：ここまではいいけれど、ここまでは立ち入らせないという境界があるわけですね。

堀田：図式的に言えば、その「ここからはダメ」という制限が明治時代になると、かなり外れてくるのでしょね。そうすると19世紀前半から、いわゆる「明治啓蒙」を視野に入れないと、読書のあり方は見えてこないのではないのでしょうか。

寺田：例えば、山片蟠桃は『夢の代』を、わざと漢文を用いずに「書き下し文」という形で書いているのですが、自分の商店で奉公人や召使として働いている人々も含めて読んでもらいたいからそのように書いているのだ、と序文ではっきりと書いています。大坂などでかなり識字率が高まっている状況で、さすがに漢文は読めませんが、漢字仮名混じりの書き下し文ならある程度読めるだろうと考えて、山片はわざとそのように書いているわけです。その一方で、明治維新以後、中江兆民などは東アジア的な規模で思想を伝達したほうが良いと考えて、意図的に漢文で書いています。福沢諭吉は逆のことをやるわけですよ。そういった理由で、両者は思想的には甲乙つけがたいような人物であるにも拘わらず、福沢のほうがはるかに影響力が大きく、中江の場合はそうではないという問題が出てきます。

堀田：その代わりに、ルソーが兆民の漢訳で中国に入っていくとか、そういう側面もあります。

安藤：江戸には、マカオなどを経由してヨーロッパの情報が多く入ってくるのですが、中国や朝鮮半島を軽視しているという面もあります。ヨーロッパから日本へ、そして朝鮮半島・中国へという情報伝達のルートがあったわけです。さきほどの、江戸がヨーロッパに対して開かれていたという話に戻れば、例えば島原の乱の際には、オランダから兵器を輸入していたわけですから、江戸幕府が農民の反乱を弾圧しただけでなく、プロテスタントの国とつながってカトリックを弾圧したことになります。江戸は、ヨーロッパを権力のパートナーとして、どんどん世界の情報を入手し、これを大事な要素として独占します。その情報を違うシステムに、この場合おそらく朱子学ですが、それに組みこんで「縦の系列」で流していきました。代官などに手紙や通達などを出して、それを高札に書くという形で、情報が民衆に行くわけです。こういう知識や情報の流れと、民間独自の教育や知識の世界とのつながりがどうなっていたか、興味深いところです。

川島：一定の知識を与えようと思って教育しはするけれど、いったん読めるようになると別のものにもアクセスできるようになりますね。日



本の士農工商という階級制度もヨーロッパの階級社会と比べると、厳然としたそれではありません。ヨーロッパでは『百科全書』など、知識人の間で知識は開けていますが、庶民レベルまで広げると、日本の庶民は結構いろいろな物が読めるのに対し、ヨーロッパでは閉鎖されています。彼らが何か知的なものに到達するという事は、ほとんどありません。ヨーロッパと比較すると、日本の士農工商のほうがずっと緩い階級制度で、例えば武士が農民を養子にする場合だってありますね。しかし、ヨーロッパで貴族が庶民を養子にするかということ、そんなことはまずありません。



高橋：日本の養子制度は、特殊ですからね。

川島：それはそうですが、日本では、結婚させるためにいったん武士の養女にするとか、武家の3男が武士を捨てて商家に入るといった話もありますね。ヨーロッパでは、そうしたことはありません。どのレベルまで想定するかという問題がありますが、絶対数からいって、日本のほうが字の読める人がいますし、民衆が爆発したときに知識の広まる土壌があります。一見するとヨーロッパは開けているように思われますが、大多数の人々は知識にアクセスできず、生活に変化のないままです。

高橋：日本は農家が豊かになって、豪農（上層の農民）が勉強をするようになり、これがエリート化します。そうすると、高札が読めるという段階をはるかに超えて、漢文が読めて書けるところまで行きます。これは大きな進歩です。強制されてもいないのに、自ら努力してそこまで到達するわけですから。

## 知識の伝播

安藤：江戸のネットワークは相当進んでいるのですが一枚岩でなく、「近代国家」とはだいぶ違います。中山道や東海道など街道や回船が整備され、知識が伝わっていく際には、結局は幕府の傘下にいるような人々、例えばオランダ通事などが活躍しなければ、知識は流通しません。それでは、地方にいた人たちはそれをどう受け取って使ったのかということを考えてみると、安藤昌益などは独立共和国的といいますか、地域的な独自性を示しています。したがって、幕藩体制が全体的に整備されていく過程で、逆にそれぞれの地域的な独自性が出てきて、民間の意識が反映されるという面があります。

寺田：大坂だと、安藤昌益の場合とは違って、やはり天下の台所ですから、幕府の持っていたネットワークとはかなり違う、商人を通じた情報ネットワークがあります。各藩を脱藩して大坂に移り住んで、医者として生業を立てていくという人も多くいました。『和漢三才図会<sup>4</sup>』を書いた寺島良安にしても、詳細は不明ですが、もとは商人の息子で、彼は大坂に出てきて医者になっています。山片蟠桃が天文学を学んだ麻田剛立にしても、大分から脱藩して大坂に来ています。大坂ではそのようにして、ある種独特な情報のネットワークを通じて、実際に様々な場所から人間が集まってきて、それが新しい文化的な拠点を形成したという面があります。

川島：大坂の持つ『百科全書』的・サロンの役割が感じられますね。

4 大坂の医師、寺島良安によって編まれた天部、人倫類、地部など105巻からなる図解百科辞典で、正徳2年(1712)ごろに完成した。明の王圻おうきが天文、地理など14項目に分け、図絵入りで万暦35年(1607)に成した百科全書『三才図会』をモデルとして、編纂されたといわれる。

堀田：名古屋には一時的に本屋はありますが、今も昔も変わらず比較的にな古屋圏内で自足しているために、大坂のようなことはなかったのではないのでしょうか。

寺田：大坂には「市民的公共圏」といったものがかなりありましたし、だからこそ『和漢三才図会』のような、百科全書的なものが可能であったと思います。寺島のような人間が様々な情報を収集するにあたって、大坂には学問所のようなもの、つまり懐徳堂<sup>5</sup>ができ、様々な知識を持った人間が多数います。市場もありますから、そういう場所には各地の情報が、ほぼリアル・タイムで入ってきます。

川島：大坂にはいったん年貢米が集まりますから、日本中から人間が集まりますね。

寺田：そういった状況を背景にして寺島は、『和漢三才図会』を編んでいると思いますし、百科全書的なものを書いた山片蟠桃にしても、結局は同じような背景があったと思います。

長尾：それは幕府による、上からの知的支配とは別のルートですね。

寺田：そうですね。パリのヴェルサイユとはまったく異なる、パリのカフェやサロンなどに依拠しながら『百科全書』が作成されていった過程と非常によく似て、大坂の市民的公共圏のようなものを母体にして、新しい百科全書的な書物が作られていったという点は、非常に興味深いです。

堀田：書物というモノが、中国のように政府が編む形で、政府の情報独占という形での公共性の表現であったものから、市民的公共圏の表現に変化したのですね。モノとしては同じですが、その表現する世界がどのあたりで変わってくるのかという点が重要です。

長尾：日本でいうと、18世紀末になりますか。

安藤：そのような問題が「18世紀学」という今回のテーマに関連してきます。昨年度「東アジア18世紀学」というテーマで総経費による研究に取り組みました。その結果見えてきたのが、18世紀の知識に活力を与えていたのは、「市民的公共圏」であったのではないかということでした。「日本18世紀学会」は、18世紀という時代の個性について研究しています。18世紀に対する魅力はイギリスやフランス、ドイツに直接行ってみれば明らかです。19世紀では、知識が制度化され、人間がそれを消費する側になります。現代風というなら、国家単位で様々なものが編成されてしまった19世紀に対して、18世紀はあらゆる要素が出て来てはいるのだけれど、それがどこへ向かうのか分からないでいるような状態で、知識の消費というよりは、これを生み出すという側面が強いです。18世紀は、『百科全書』冒頭の「知識の系統樹<sup>6</sup>」にあるように、様々な知識は19世紀のように体系化されることなく、生き生きと育とうとしています。

文学者の多くは「18世紀学会」に、「18世紀」をキーワードに参加しましたが、社会科学系の研究者は「近代の典型としての18世紀」という意識で、近代研究としてこれに参加しました。そうすると、日本の18世紀は視野に入ってきません。極端に言えば、ルソーは中江兆民に相当すると考えますから、アダム・スミス研究者から見ると、日本でスミスの思想状況が生まれるのは19世紀以降になります。したがって社会科学者には特に多いのですが、18世紀研究者は、日本については19世紀、明治維新以降に着目してきました。ところが、近年こういう意識はずいぶん変化しています。

韓国に「18世紀学会」が発足したのには大きな意味があり、その当時は「文明の中心と周

5 江戸時代大坂の民間の手になる学問所。享保9年(1724)、大坂の豪商たち(三星屋武右衛門・富永芳春(道明寺屋吉左衛門)・舟橋屋四郎右衛門・備前屋吉兵衛・鴻池又四郎)が出資して設立した。享保11年(1726)には江戸幕府より公認されて官許学問所となる。初期には朱子学・陽明学などを交えた雑駁な傾向であったが、五井蘭洲の復帰より以降、正統な朱子学を標榜して荻生徂徠の学派を排撃し、その徂徠学批判は中井竹山らの時代に頂点を迎えた。門下より草間直方・富永仲基・山片蟠桃などの特徴的な町人学者を輩出したことでも知られる。

6 『百科全書および同補遺に含まれる事項の分析的・合理的索引』(1780)の冒頭には、ペーコンを踏襲する形で、人間の知識を、記憶 Memoire に関するもの、理性 Raison に関するもの、想像力 Imagination に関するものに分類して、知識の系統樹が描かれている。記憶の学問として歴史が、理性の学問として哲学が、想像力の学問として詩が、それぞれ枝葉を伸ばしている。

辺」という研究視角で、18世紀研究はヨーロッパから見た辺境にまで広がっていきました。「後進国近代」という発想ではなく、同等のものが形を変えて、辺境の地で存在しているという発想で、ヨーロッパ以外の地域の18世紀研究が活発になりました。そういう流れのなかで、日本や韓国が視野に入ってきて、私たちもそういう目で再度日本を見直そうと考えたのです。18世紀を、「ヨーロッパ近代の典型」という形で探究するのではなく、18世紀そのものとして見るという見方が、とても魅力的になってきたのです。つまり、「ヨーロッパの18世紀」ということではなく、「アジアをも入れた18世紀」ということです。

そうして、こういう意味で18世紀をつなぐのが、「公共圏」ではないかと思われまます。事実18世紀には、パリでも大坂でも書物が流通して様々なサロンができ、そこで知識が生産されるという形になっています。この点で、両者は非常によく似ています。ところが、19世紀になると（もちろん18世紀から始まっていますが）、図書館などができ、アカデミーが整備されていく過程で、最終的には国家が出現します。制度化された世界で、知識が目に見える形で体系化されてしまうのです。そういう19世紀と異なり、書物の流通する公共圏が、知識を生産する世界にもなっているのが、18世紀の特徴です。そうした違いを明らかにするには、例えば明治以降の近代的なものを、ヨーロッパの18世紀と比較するというのではなく、江戸の知識形態を踏まえ、「共通枠としてヨーロッパの18世紀」と日本をつなぐ、というやり方が非常に魅力的だと思います。

川島：それに関連し、18世紀のヨーロッパでは「本を紹介する本」、つまり書評誌の存在が特徴的だと思いますが、日本や中国で同様の本はあるのでしょうか。

堀田：書評誌の例を挙げれば、デ＝フェリーチェ（Fortunato Bartolomeo De Felice, 1723–1789）がスイスのベルンから、イタリア語で『ヨーロッパ文芸抄録（Estratto della letteratura europea）』（1758–1769）を出していました。この人物はローマ出身で、その土地のカトリックの学院で教育を受け、後にベルンに定住、プロテスタントに改宗したのですが、イヴェルドゥン（Yverdon）版の『百科全書』（42 voll., 1770–1780）の企画に集中するため、この書評誌の編集印刷をミラノの啓蒙思想家グループが肩代わりするのです。

そのグループの中心にいたヴェッリ（Pietro Verri, 1728–1797）は、『百科全書』のリヴォルノ版（33 voll., 1770–1779）の出版にも重要な役割を果たしました。この企画は、予約購読者を募って『百科全書協会』を組織し、トスカナの海港都市というリヴォルノの性格を反映してか、ロンドンから活字を取り寄せる努力までして、実現されます。やはり「モノとしての本」の生産と流通の仕方（マーケット）を具体的に見ていくと、洋の東西を問わず、「公共圏」の様相が浮かびあがると思います。

安藤：別のいい方をすれば、「知識を生み出す個人の形態が異なる」ということですね。さきほど中国の話で、本屋と政府、個人など出てきましたが、寺田さんのいう「編集知<sup>7</sup>」のようなものが知識の生産にとって意味を持っていたわけですね。例えばドルバックのように、自分の館を貸して議論させた後、皆が部屋にこもってその内容を反省し、それぞれ自分の書物を書くという形をとっていると、自分の考えと他人の考えが区別できなくなってしまう。そのような形で知識は生産されていました。ある意味で知識の生産は、「編集知」によってなされたといえるわけです。

川島：翻訳もそうです。自分の解釈や注を勝手に付け加えたりしますから。

安藤：ルソーはヴェルサイユで自分の作品が上演される時、カフェで見知らぬ人が自分の作品の

7 「『編集知』は、歴史汎通的には、著者や編集者がテキストを書き、そのテキストをイラストなどとともに印刷物（あるいは写本、口承、電子メディア）へと転換させる際の、テキストならびに印刷物の編集上の戦略に関わる知のことである」寺田元一『「編集知」の世紀：一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』（日本評論社、2003年）、11ページ。著者によれば、この編集知は、コミュニケーションのあるところならどこにでも存在する普遍的な知であるが、18世紀に始まる「モダン」の時代に入ると、出版文化の発達によってそれがとりわけ前面に出てくるのだという。そこでは、知を伝える主体が意識的に知の順序を入れ替えたり、形式を変換するなどして、これを効果的に伝えるようになる。

批評をしているのを聞き、恥ずかしくて逃げ出しています。川島さんのいう「書評誌」の役割と似て、評価がどんどん作家を動かし、作家の思想の生産に直接入りこんでいきます。したがって18世紀では、19世紀の独立した作家とはずいぶん性格が違うと思います。

川島：19世紀の書評は、18世紀と比べると、もう少しプロフェッショナルな感じですね。その点は区別して考えたほうがいいですね。

安藤：知識を生み出す個人の存在形態が、18世紀は独特ですね。

高橋：日本に関して、書評誌は分かりませんが、本好きは大抵の場合、随筆を書きます。膨大な活字版になるくらい、読んだ人が皆リライト re-write します。そうすると、どんどん内容が膨らみますが、それをまたリライトする、この繰り返しです。

川島：それがまた出回るのですか。

高橋：有名人のものは回ったかもしれません。

長尾：中国の活字第一主義と比較して、日本では、書かれたものがある程度の範囲内で流通するということはあるのですか。

高橋：それはあると思います。

川島：サロンのようなところで流通していたかもしれませんね。

寺田：弟子筋みたいなどころでは、そうした流通があったかもしれません。荻生徂徠などは弟子が三千人程いて、そのようなどころでは、徂徠の書いたものがかなり流通していました。

高橋：徂徠がしばらく千葉に流された後、20代半ばに江戸に戻って授業をしたとき、漢字の意味（漢和辞典の内容のような）を説明しているのですが、それを弟子が筆記しています。これが写本として伝わり、のちに京都まで流れていきました。それを読んだ者がこれは面白いとって、江戸に出てきて徂徠に入門したという話もあるのです。こうした事例からも、当時は相当写本が出回っていたといえます。

川島：活字になっているのなら、業者が入っているのではないですか。

高橋：そうです。それだけ広がりますと、本屋がついて出版したのです。

寺田：ある意味で、ドイツに近いかもしれませんね。ドイツには講義ノートのようなものがあります。例えば、ヘーゲルの残した講義ノートが、後に出てきましたね。これは、フランスとはずいぶん異なります。フランスでは18世紀に、大学の権威そのものがほとんどなくなっていますから。

川島：それでも、デイドロによるルエルの講義ノートが回っていたようですが。

寺田：確かに、デイドロのものを含め多くの講義ノートが、まるで手書き新聞のように出回りました。とはいえ、ルエルの講義は王立植物園で一般向けになされた公開講義・実験で、大学とは無関係のものです。

高橋：元禄（18世紀はじめ）の頃、伊藤仁斎という京都の儒者が書いた本の海賊版は、本物が出版される前に江戸で出ます。海賊版のほうが早いというのは驚くべきことです。この海賊版を見て、荻生徂徠は影響を受けるのです。そして、いわゆるファンレターを書くのですが、仁斎はすぐに死んでしまい、そのうえ徂徠の手紙を勝手に印刷したため、両者の関係がこじれてしまいました。

長尾：海賊版の存在は、検閲や著作権の問題にも関連すると思われます。海賊版や地下出版が持った各々の意義などはあるのでしょうか。

安藤：手書きであろうと活字であろうと、書物を通じてものを考えたり、伝えたりするということが、文明において決定的に重要です。したがって、どんな形であれ書物を残すという行為は、権力闘争の問題であるともいえます。中国では王朝が滅びるとき、歴史だけは書き残しています。そこに書かれているものに最も価値があり、真実であるとして保管され、ずっと人目に触れるということが大事なのです。フランス啓蒙でも、例えばルソーが『告白』を書いたとき、彼は将来デイドロなどの策略で、人々が彼を誤解するような場合に突然この本が

発見され、「ここに真のルソーあり」と皆に気づいてほしいと本気で考えていました。

寺田：デイドロは、『告白』が出ることを心底恐れていたのですよね。「ルソーは生前の自分たちとの関係について、いったい何を書き残したのだ」と。

安藤：活字が決定的に重要なことは同じですが、中国では、国家や権力によって保管されることがポイントになっているのに対し、ヨーロッパはもう少し異なり、それぞれ公共圏で判定されるというのがポイントになっているようです。

高橋：中国の国家は清朝ですから、かなりのバイアスがかかっています。異民族ですから。そこで正当性を確認するわけです。

川島：だからこそ、余計に必死になるのですね。

長尾：清朝というだけでなく、知識人の活字信仰というのがあったのではないですか。

高橋：それはあると思います。

長尾：それもあって、活字にして残さなければいけなかったのでしょうか。そうでなければ、自分の仕事がゼロになってしまうので、信頼を得るために出版することになるのではないのでしょうか。

安藤：滅亡した王朝について書き残された歴史は、大事にされています。どんな王朝にしても、同じことがいえます。中国では、公式な場で活字になっているものが、決定的な意味を持つのです。フランスについては、寺田さんにお聞きしたいのですが、例えば地下出版のようなもののほうが真実を表している、と思った人たちもいるのではないですか。

寺田：まず、出版のようなものが手稿に対して決定的な優位性を持っていたのかどうかという点がひとつの問題としてあります。18世紀でも実際のところ、少なくともその前半あたりには、「出版する」ことが財政的に非常に難しかったという状況が続いていました。したがって、危険な思想だから地下写本（手稿）として流通していたというような側面も、確かにありますが、そうした解釈だけでは不十分です。例えばケンペルは『日本誌』を残そうとしましたが、どの出版社にも話ののってもらえず、結局出版できないまま死んでしまいました。そこに、かの大英博物館を作ったハンス・スローンという大物が、ケンペルの手稿に目をつけ、1727年にその英訳が出されたという経緯があります。こうしてケンペルのように、出版したいと思ってもそれが叶わなかった人物もたくさんいるのです。当時は本を出版するだけでも、財政的負担がかなり大きいため、手稿のようなものを残せたとしても、なかなか出版までたどり着けないという場合が18世紀前半までは珍しくなかったという事実があります。

川島：発表・流通のあり方に関して、手紙についても考える必要があるのではないのでしょうか。手紙は、手稿とは異なりますね。

安藤：日本でも手紙は、特に江戸時代には、決定的に重要な役割を果たしていますね。

高橋：儒者たちの残した文集のなかには、たいがい書簡があります。重要なことは、書簡で長々と書いています。

安藤：江戸から手紙が来るところは、有利なわけですね。

寺田：大坂の市場のようなところでは、至るところから飛脚が情報を伝達してきます。そうしたものが、彼らにとってかなりの情報源になっていました。そして市場において、いわゆる書物のようなものが、ニュースや噂という形で流布していたわけではなく、例えば、手紙や口コミなど様々な形で流布しており、そのなかで相場のようなものが決まっていこうち、ひとつの共通認識が得られていきます。山片蟠桃はこれを、「大知（たいち）」と名付けています。確かに蟠桃は儒教的な表現を使っていますが、これは私なりに言い換えれば、「編集知」的に形成された世論・公論に相当します。それは、手紙や口コミなどが蓄積されて作られたようなもので、これによって相場のようなものが決定されるのだと思います。そうすると大坂を考えるにあたって、もちろん書物も重要ですが、手紙や口コミなどの情報が、当時かなり重要な位置を占めていたといえるのではないかと思います。

長尾：瓦版や、新聞はどうなのでしょう。

高橋：瓦版はもっと低いレベルです。「兼葭堂日記」で有名な木村兼葭堂（1736-1802）のところには、情報が全国から集まってきました。例えば博学的な情報にしても、各地の珍しいものをスケッチして、データ付きで送ってきたのです。日本全国にそういうネットワークが張り巡らされているため、その場にながらにして、情報が集まるのです。これは内閣文庫などに納められています。

川島：幕府はそういう情報を得ているのですか。

高橋：そうですね。ただ、本当にしっかりと情報が受け止められていたかは疑問です。

## 図版のインパクト

安藤：『百科全書』には図版がありましたが、瓦版に絵は入っていたのでしょうか。時代劇では瓦版に絵が入っているのですが、あれは創作なのでしょう。

高橋：どうでしょうね。でもまったくの誤りではないと思いますよ。

安藤：というのは、この図版の問題については寺田さんの意見も伺いたいのですが、個人的な印象では、図版を大衆化してうまく使ったのは、19世紀の初期社会主義者ではないかと思うのです。労働者の新聞では、「世の中がこんなに非合理になっているから皆怒れ」と訴えかけても、労働者は疲れて帰宅するため、最後まで読むことができないのです。だから、一目で内容の分かる絵が掲載されると、その効果は大きいわけです。フランス革命のときも、僧侶と貴族が民衆のうえに乗っている絵などがありました。ただ、「ひとつの絵」として印象づけられるような、そうした使い方が多く出てくるようになったのは、例えばルイ・ブランなどの初期社会主義者たちの影響ではないでしょうか。

寺田：でも、フランスよりイギリスのほうがかなり早いですよね。例えば、18世紀前半に有名な版画、現代でいう風俗版画のようなものを描いた Hogarth がいます。『「編集知」の世紀<sup>8</sup>』にも書きましたが、18世紀におけるかなり大きな変化として、イラストが圧倒的に増えてきているということがあります。それは、やはり自然誌、または博物学関係のものが口火を切るという形で広まって行くわけですが、さらに『百科全書』などが出てくると、博物学的な範囲を超えていきます。機械技術がそうです。ただ、機械技術にしても、さらに遡れば機械劇場（テアトル・ド・ラ・マシーヌ）のようなものが、16世紀の終わりにかなり出ていることから、すでにイラスト重視の流れがあったと思います。とはいえ、いわゆる政治風刺画—例えば、フランス革命期にはルイ16世やマリー・アントワネットを、ポルノ的糞尿趣味的に風刺したイラストが有名ですが—に大きく展開していく場合は、やはりフランス革命のような事件が、ひとつの大きな転換期になっていると思います。

長尾：知識を正確に伝達する「言葉では伝わらない部分」という意味で、絵はイメージとして捉えたらよいのでしょうか。

堀田：版画の役割も重要です。例えば18世紀の版画では、皆が少しずつ見たいということと、「貴族はこんなに偉いのだ」ということを伝える効果があったと思います。

寺田：『百科全書』の絵巻には、「貴族生活の賛美」の側面がかなり入っています。格好のよい乗馬姿の貴族を載せたり、馬車や銀器などを載せたりしています。その意味で確かに『百科全書』には、職人たちの階層的な位置を高めるため、機械技術を重視した側面がありますが、それだけでなく、貴族趣味に迎合したような部分もかなりあったのではないかと思います。また図版には、南国幻想のようなものも相当入っていて、ある意味、その時代の様々な社会的現実のようなものを隠蔽し、様々な幻想を与える役割を果たしていたと思います。

8 寺田元一『「編集知」の世紀：一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』（日本評論社、2003年）。

堀田：フランスでは、金持ちのブルジョワが貴族生活に憧れて、そのような版画を買っているのでしょうかね。イタリアの貴族は、版画によって自分たちの権威をなるべく広範囲に誇示し、アルプスの向こうから旅行に来た人がその版画を見て貴族生活に憧れるという感じです。ヴェネツィアといえば、対として出てくるカナレット（Giovanni Antonio Canal, 通称 Canaletto, 1697-1768）でも同様でしょう。

川島：グランド・ツアー<sup>9</sup>では、イタリアを訪れますし、カナレットはドイツの美術館にもたくさんあります。

堀田：カナレットは、実際にイギリスにも渡ります。絵画や図像については、受容する側の社会的地位も、王侯貴族から始まって様々ですが、版画はイタリア土産というか、一番手が届きやすいですね。

長尾：日本の場合はどうなのでしょう。

高橋：浮世絵でしょうか。北斎漫画なら、19世紀ぐらいでしょうか。

安藤：そうですね。歌川（安藤）広重の風景画などは、ある程度ヨーロッパのほうにも入ってきましたよね。

高橋：いわゆるジャポニスムですね。

安藤：構図などが、わりと遠近法的ですね。ある程度内面を備えた個人が存在しているような、そういうイメージの絵が出てきますね。

長尾：書籍そのものではなく、「イメージの逆輸出」ですよ。

## 書物の旅と、東西交流

高橋：輸出からいえば、書籍は少ないですね。日本から輸出された例外的なものに、徂徠の弟子が足利文庫で孟子を校訂して、中国にないヴァージョンが、向こうのシリーズに入っていくケースがあります。おそらく作画的ですが、江戸時代初期（17世紀）に、日本のお坊さんが書いた本を長崎に来ていた商人に持って帰らせ、中国のお坊さんに渡しました。それを読んだ中国のお坊さんが自発的に序文を書いて、中国の本として日本に入ってくるようなことがありました。要するに、数少ない逆輸出です。たいていは、向こうから一方的に入ってきて、日本から出たのはほとんどありません。その際に、たまたま自分の本が、中国から版本になって、しかも序文が付いて入ってくるということで、それを書いた日本のお坊さんは大変感激するのです。でも、これは本当に例外的なのです。

長尾：中国からヨーロッパへの輸出に関しては、どうですか。

安藤：フランスには、色々なものが入っているかもしれませんね。

寺田：例えば『論語』が17世紀末に訳されるという形で、四書五経の一部が紹介されたり、あるいはデュアルドなどが『中国帝国誌』（1734）などを書いたりしています。そのなかには、別のイエズス会士が、中国の古典などを一部分訳したようなものが多数含まれています。このような部分訳が、パリのイエズス会士の所に多数送られてきています。そこから、デュアルドなどがそれを『中国帝国誌』のなかで、色々な形で利用するということが起きます。その意味で、中国の情報のようなものが、「イエズス会士の関心」という限られた視野からではあるけれども、取り入れられているという側面はあります。とりわけ『論語』を中心とした、道徳哲学のようなものへの関心が非常に高かったので、それに関するかなりの翻訳が入ってきています。

高橋：フランスの中国学は、いつ頃から盛んになったのでしょうか。宣教師が伝えた段階からですか。

寺田：本当に盛んになったのは、19世紀になってからですね。

---

9 イギリス貴族の子弟が行った、ヨーロッパ大陸への遊学をいう。

安藤：それでも、18世紀に、あるいはもっと以前からかもしれませんが、その先駆けがあるのではないですか。

寺田：もちろん、そうです。フランスの場合では17世紀後半に、イエズス会の宣教師を中心に中国に渡っています。それ以前だと、むしろイタリアやベルギーなどのイエズス会士が中国に行っているのですが、その時点ぐらいから、フランスの中国学が徐々に動き出していることは間違いありません。ある意味18世紀の中国学の集大成的なものとして、デュアルドの『中国帝国誌』があります。これは1734年ですから、18世紀の前半です。18世紀の前後半にかけては、かの有名な『イエズス会士書簡集』が編纂されて出ていますし、イエズス会の系統のなかでマイヤという人物を中心として、新たな中国誌のようなものが12巻本（最終的には13巻本）で18世紀末に出ています。それが、大体フランスにおける18世紀の中国学の基本的な成果です。

堀田：中国の歴史は、普通、天地創造より6000年といわれるキリスト教的歴史の枠をはみだす可能性があって、それでは困るわけですが、この点はどのように考えられていたのですか。寺田さんのいう中国史は、年代学としては、どのくらいの時期から始まるとされていたのでしょうか。

寺田：その問題は17世紀の後半において、かなり深刻に論じられていますが、18世紀あたりになると、大体キリスト教の世界においては、ノアの洪水から数百年後ぐらいから、とりあえず中国の信憑性のある歴史記述が始まっているということで落ち着いてきます。ノアの子孫たちが数百年ぐらいかけて中国に渡り、そこから始まるという形で落ち着くのです。

安藤：だから18世紀になると、堀田さんがおっしゃるような矛盾には、それほど困っていませんよね。つまり18世紀には、ヴォルテールの場合のように、中国という国は、キリスト教を知らないが、文明を持った立派な人たちがいる国として紹介されるようになります。

長尾：18世紀における道德哲学の問題について、東洋と比較して、西洋ではどういった点が特徴的ですか。

安藤：ウェーバー的ないい方かもしれませんが、「権力と道德」という視点から考えていくと、アジアとヨーロッパはずいぶん違います。中国では、国家の道德は儒教、民間の道德は道教というように、分離していました。その融合されてくるのが、近代の問題だといえます。このように「権力と道德」という視点から、道德哲学について考えることはやはり大切だと思います。

長尾：日本や中国でも、ヨーロッパのように「人間とは何か」について、真剣に考え直すということですか。

安藤：安藤昌益、もっと典型的なのは山片蟠桃かもしれませんが、昌益の書いたものには、「オランダでは人間がこのように扱われ、一夫一婦制のなかで女性が守られている」という内容がありましたよね。

寺田：司馬江漢なども、はっきりいっています。彼は町人で、士農工商に対する反発が余計に強いので、ヨーロッパでは皆平等だということをするわけです。山片蟠桃でも『夢の代』のなかで、本当は「人間は平等なのだ」といっています。

川島：それぞれの国がお互いに、他国を引いていますね。

寺田：ただ、道德哲学などを考える場合、日本では儒教的なものが確かに強いのですが、他方で、海保青陵や草間直方、山片蟠桃のように、経済認識を非常に強く持っているような人たちのなかには、明らかに利己心などを意識した人たちがいた点を重視するべきだと思います。例えば山片蟠桃は、商人は「利に聡い」、つまり商人は利を追求するものだとして捉え、利の追求が実際に、市場においては相場を形成していくという認識を持っていました。その意味では、利己的に行動しても「神の見えざる手<sup>10</sup>」によってある種の秩序（「大知」）が成立しようと

10 アダム・スミス『諸国民の富』（1776）より、市場の自動調整機能を指す用語。

いう認識に到達している部分があると思います。そういう意味では、道徳哲学を、もう少し別の形で組み直す必要がありますね。

長尾：儒学という点からはいかがでしょうか。

高橋：儒者は色々な人がいて、本当に両極端です。例えば近代には、外国語（ヨーロッパの言語）を日本語に、つまり漢字2文字の熟語に大体訳しましたね。あの蓄積の前段階において、儒学はその準備をしたと思います。ほとんどの熟語の組合せは、儒学の専門用語ですよ。儒者がそこまで考えていたとは思えませんが、半ば無意識のうちに行ったのでしょう。儒者による言葉の定義は、少し動かせばもう近代に行きそうなほどで、ヨーロッパの言語を翻訳できる一歩手前までいっています。そのようなことがなければ、近代の翻訳はできなかったと思います。

川島：中国はどのようなのでしょうか。

高橋：中国もかなり熟語を輸入しています。

安藤：仏教では、どのようなのでしょうか。鎌倉時代あたりでの道元や空海などは、消えてしまうのでしょうか。道元などは、素晴らしい文章を書き残していますが。

高橋：道元にせよ何にせよ、鎌倉時代から室町にかけて、五山の伝統は寺院のなかでつながっています。江戸初期の独庵玄光という僧侶は、五山の伝統のまさに正統に位置づけられると思いますが、外に広がらないのです。

長尾：寺はかえって、閉鎖的になってしまうのですか。

高橋：そうですね。だから、やむを得ずどこかで本を書くのです。誰も話を聞いてくれないので、著述をするのです。だからこそ、現在それらが残っているのですが。

川島：それはすべて刊本ですか。

高橋：刊本です。要するにスポンサーがいるのです。17世紀に本を出すには、お金がかかり、かなり大変なことです。しかし誰も聞いてくれないので、100年後に期待するのです。漢文ですが、今見ても感動的な名文です。

安藤：朱子は仏教の自己批判から始め、朱子学を作りました。日本も平安時代の頃に、仏教的な言語世界というものが相当整備されていましたが、それはその後どのようになったのでしょうか。儒教との関係で、いかに継承されたのか、あるいは断絶してしまったのか。そのあたりが18世紀を考える場合、非常に大きな問題だと思います。

高橋：日本の儒学は、お寺から出ましたよね。そこで、仏教と儒教はつながっていると思います。中世の時代には、寺院を大学と呼んでいました。江戸時代になると儒学の時代だと簡単にいわれますが、僧侶は相当な力を持っていたのです。ただ、世の中の人々はどうしても、新しいほうに目がいきますからね。

安藤：儒教の場合は、民間と支配者が分離しているだけでなく、徳のレベルが違います。仏教において、現世は否定される代わりに、真実の世界は対等な世界ですよ。「18世紀の知の転換」として道徳哲学を見るうえでは、仏教を視野に入れなければならないと思います。

高橋：少々特殊ですが、独庵玄光は「民の元気」といっています。つまり、君（くん）は偉大ではなく、人民が支えて初めて国は成立する。もし、君が徳を失えば、ただひとりの男となってしまい、首が飛んでしまう。玄光はこのようなことを、話の通じる相手にしているのです。いってみれば、江戸時代の初期に民主主義を先取りしています。残念ながら、周りの人々に伝わりませんでした。

## 名古屋大学の図書コレクションについて

安藤：今回の特別展とのからみで、図書コレクションについても触れておきたいのですが、名古屋大学は相当興味深いものを持っていると思います。それは、水田洋先生の役割が非常に大きいと思うのです。特に、経済学部の水田先生、法学部の長谷川正安先生、哲学の竹内良知先生によって出された『近代社会観の解明<sup>11</sup>』は、18世紀も含む思想史研究のパイオニア的な本なのですが、このような書物が出せたのは、やはり当時、名古屋大学が個人蔵書だけでなく様々な本を持っており、そのような内容の書物が書ける環境にあったからだと思います。そして、これを出发点として、各研究者が努力をして、現在に至るまで多くの本が蓄積されてきました。とりわけ、水田洋先生の役割は大きく、「ホップズ・コレクション」をはじめ、それ以降の18世紀関係、アダム・スミス関係などが多く所蔵されています。「自由思想家コレクション」はそのひとつです。私自身も以前、現在は退官された先生も含め多くの先生とともに、こちらの図書館に、オランダの古本屋から書物を入れたことがあります。その他に『百科全書』をはじめ、18世紀におけるフランスの雑誌類、イギリスの「リトルトン・コレクション」など色々な書物が所蔵されており、日本の国立大学のなかでは、名古屋大学は小さな大学だと思いますが、相当様々な本があると思うのです。また、古書ではありませんが、エルヴェシウスやコンディヤックの本も所蔵しています。このように名古屋大学は、「自助努力」によって相当充実している図書館を持っているということ、ぜひ知って頂きたいと思います。名古屋大学図書館は、徐々に研究ベースを整えることで、18世紀研究に非常に貢献できる体制を持つようになったのです。

川島：経済学部図書室も、貴重書をかなり持っていますよね。

安藤：そうですね。文学部の方々が、自分のところがないので、経済学部に借りに来るという本がたくさんあります。とはいえ、色々不備な面があるのも事実です。本来ならば他学部で入手してもらえばいいのですが、予算の関係もあり、経済学部が請け負っている部分があります。

川島：ヨーロッパ関係の書物もあり、日本関係もありということで、目配りがきいていますね。

安藤：また、東洋学文献コーナーなど、様々なところが整備されてきて、今回初めて、東西をあわせて全体を展示できるように思います。従来は、「ヨーロッパの18世紀」「東洋の18世紀」というのがあっても、それらを包括する18世紀についてはできませんでした。その点については、評価するべきだと思います。

## 書物の役割と、その将来

長尾：最後に、「情報の担い手」としての書物の役割について議論できればと思います。寺田さんがまとめてきた、現代のインターネットなどとの関連から見た場合の、書物の役割についてはいかがでしょうか。

寺田：書物という媒体は、これから徐々に消えていくのではないかと思います。けれども、コンテンツ産業<sup>12</sup>などが今かなり話題になっていますね。コンテンツを担う媒体は、これからも色々な形で存在し続けるだろうと思います。少なくとも18世紀の出版文化のなかでは、書物という媒体が非常に大きな役割を果たしました。ただそれも、書物が担うコンテンツがあったからこそです。

11 水田洋・長谷川正安・竹内良知『近代社会観の解明：社会科学の成立』（理論社、1952年）。

12 映像や音楽、ゲーム、放送、出版、新聞など、様々な「情報の内容（コンテンツ）」を商品とする業界全体を示す。

その点について多少詳しく説明しますと、フランスの場合がそうですし、大坂もそうかもしれませんが、書簡や口コミで伝わっていったものは、一時的に色々な役割を果たしますが、消えていってしまう可能性は非常に高いわけです。しかし、書物という形でまとまった内容（コンテンツ）が与えられると、今度はそれが多くの人たちによって読み継がれることで、共通認識が形成される方向で伝達されていきます。その意味で、18世紀フランスでは、コンテンツを担う書物が重要な意味を持っていたと思います。コンテンツが重要であることは、現在においても同じです。ですから、インターネットやテレビなど色々なものが今後、融合していこうといわれていますし、そのなかでどちらが優位に立つかなどが話題になってきますが、やはりまとまったコンテンツとして表現することの重要性はなくならないと思います。

そうしたなかで当然のことながら、出版文化がどのような位置を占めるようになるのかについて考えた場合には、斜陽産業といえますし、現在では、本の形態でもって知識を交換したり発表したりすることが必ずしも必要ではないと、考えざるを得ません。それに代わる媒体が色々あるからです。しかし、まとまったコンテンツとして表現することは、どうしても必要です。例えば文字はどうしても必要になってきて、単に映像的なものによって伝えられないことがあると思います。文字を媒介にすることで、色々な形でもって、我々の記憶のなかにその内容（コンテンツ）が定着し、非常に大きな、ある種のイデオロギー的な力を持ちうるということ、残り続けるだろうと思います。

堀田：私の仮説ですが、伝達の媒体と関わって、18世紀は「レトリック論の転換の時点」だと思います。つまり、本（文字で書いたもの）以前のレトリックは、ギリシア以来、話すことが基本でした。それが弁論の伝統につながっており、直接声が聞こえ、姿が見える人に向けたものであると思います。しかし書物の場合、眼前にいない人を相手に伝達しますので、声は使われません。こうして次第に、弁論のような話す形のレトリックから、文体や文章構成といった文章のレトリックに変わっていくと思うのです。そのなかで、寺田さんがおっしゃったような文体やコンテンツといったものが重要になってきたのだと思います。18世紀は、このような大きい転換の時期なのではないでしょうか。

川島：あまり知られていませんが、アルガロッチの『御婦人方のためのニュートン主義』は、初版では会話体で書かれていますが、18世紀の流れのなかで書き直すうち、記述式になっていくということが確かにありますね。

高橋：そうした移行に関して、中国は早いです。レトリックは、古代や中世からやっていますから。

長尾：書くレトリックですね。

高橋：もちろんそうです。

堀田：だからこそ、さきほどの活字信仰などにつながるのかもしれませんが。

長尾：中国の18世紀は、もはや紀元前といえるかもしれないですね。

安藤：ただ、ひとつ追加していえば、今の堀田さんの発言はその通りですが、転換後の視点から18世紀を眺めるのではなく、「転換期」として18世紀を見るということがポイントだと思います。

長尾：リカードはスミスの『諸国民の富』と違って、本当に論文の言葉ですよ。

川島：リカードでは、ダイアログではなくて、文章体なのですね

長尾：スミスの場合だと、レクチャー形式です。

寺田：「メディアの転換」という点からいえば、例えばテレビのドラマを作る際に、インターネットで読者から色々な意見を聞いて、それを脚本に反映させて変えていくやり方が一方で行われています。そうすると、ある意味でコンテンツがリアル・タイムで変えられ、著者を作品の支配者とするような、近代的な前提を崩壊させることにもなります。これは確かに19世紀以後の近代を超える現代的方法だと捉えることができますが、実は、こうしたコンテンツの

編集方法は、口コミや手書きヌーヴェルの伝達の際に、すでに18世紀において存在していたことなのです。だから、その意味で18世紀のメディアのあり方のなかに、著者がコンテンツをしっかりと確定していく、いわゆる「近代的」流れと、それとは異なる流れが存在していたのです。そのようなふたつの流れが、ある意味で非常に面白いバランスを取って成立していた時代が、18世紀だと思います。

堀田：それに関連して、例えば海賊版でも、著作権のような考え方がないために、当時の人々にとっては、今日いうところの「海賊版」という意識をもって出しているのではなく、「よいものだから出そう」という意図と、自分の野心や欲とが一体になってやっているわけですね。

安藤：そうですね。また、さきほどいったように、この時代というのは、どこまでが自分の考えで、どこまでが他人の考えなのかが分からなくなってくると思うのです。

寺田：それは現代と非常に重なっていますね。その意味では、19、20世紀的近代を通過して、18世紀が孕んでいた問題が、マルチメディア、インターネットの21世紀的現代において再び問われていると思います。〈了〉

## 第2部 18世紀の日本の書物

### 参加者

秋山晶則（名古屋大学 附属図書館研究開発室）日本近世史

逸村 裕（名古屋大学 附属図書館研究開発室）図書館情報学

塩村 耕（名古屋大学 大学院文学研究科）日本近世文学

長尾伸一（名古屋大学 大学院経済学研究科、日本18世紀学会会員）

ニュートン主義と社会科学の形成

福田名津子（名古屋大学 附属図書館研究開発室、日本18世紀学会会員）

### 東西固有の書物文化

塩村：日本の書物文化が、中国および朝鮮を模範としてきたことは疑いようもないのですが、他の様々な文化と同様、大きな変化を見せています。まず日本では、伝統的に多様なテキストのあり方に寛容でした。中国だとひとつの古典が、ある時代に版本になって定着すると、その他のものは廃棄されるという経路をたどります。一方、日本は割に早く印刷文化が発達したにも拘わらず、それと並行して写本文化がありました。そもそも印刷・出版が始まる以前から、古典作品については多様なテキストがあり、むしろこれが常態でした。商業出版はおよそ江戸時代初期、17世紀初頭あたりに本格化しますが、それ以降も江戸時代を通じて版本文化と写本文化が並行してありました。非常に多くの写本が作られたことは江戸時代の文化的特徴であり、近代と大きく異なる点もそこにあります。江戸時代の人々は大量に写本を作成するというメンタリティーを持っており、これは明治時代まで続いたのですが、近・現代にいたってはご存知の通り、自分で写本を作ったりする人はほとんどいません。そうやって様々な形のテキストが作られ、残されました。

江戸時代は何でも二重構造なのですが、書物の世界でも、「かたい本」と「俗な本」—当時の言葉でいえば、「物の本」と「草紙類」—のそれぞれが並行して流通していました。一方が優れていて、他方を排除するというだけでなく、雅俗が並行してありました。朝鮮は、出版に関して世界で最先端を行く先進国でした。ところが、今まで私たちの見てきたなかで、俗

な本を目にすることはまずありません。ほとんどが、「かたい本」です。日本は中国や朝鮮を手本にしながらも、独自の展開をしていることは興味深いことです。

長尾：写本と出版された本の内容は同じですか。それぞれで違う版が流通するということか、あるいは分野によって違うのでしょうか。例えばアカデミックなものは写本で流通し、大衆的なものは出版物として流通するとか。

塩村：もちろん出版されたものが写されることもあります。一方で、江戸時代は出版物には書いてはならない内容があります。実際の政治に関することは、もちろんだめです。歴史的な話題でも豊臣家の衰亡にまつわる件などを出版物に記すことは、基本的にタブーでした。しかし写本で扱う分には、ほとんど自由でした。ここでも二重構造があったわけです。その結果、豊臣秀吉の伝記などは、子どもでも知っていたわけです。キリシタンに関しても同じで、出版物にはほとんど扱われませんが、一般的な常識としては誰もが知っていました。戦前の思想弾圧や出版禁止令などと江戸時代のそれとは、雰囲気はずいぶん違います。風俗的なものについても同じで、いわゆるポルノグラフィーに属するものでも、一般に規制は厳しくありません。書物の大きさにも、大型の本と小型の本との二重構造があり、小型の本は粗末なものとして扱われ、逆にポルノ的なものでも、小型本では比較的自由に出版できました。

長尾：それは、ちょっとヨーロッパに似たところがありますね。ヨーロッパの場合は、印刷一元論ではなく、印刷にもいろいろなレベルがあって、海賊版や、例えばフランス国内ではオランダやロンドンで刷ったもの、ロンドンで刷ったと称する「フランス国内で刷ったもの」ものが流通して、そのような行為をする者を捕えようのない状況でした。出版についても、カトリック教会はかなり厳しい規定がありましたが、それをすり抜ける方法もありましたし、ベスト・セラーのなかには海賊版・発禁本もあったといわれ、かなりの本が写本で出回りました。地下文書として、キリスト・マホメット・モーゼを扱った『3人の詐欺師』という有名な文書があります。これは、彼ら3人が詐欺師であり、人類を騙したのだという内容のもので、オランダを通じて回っていきます。そういう点で、かなり共通性があるように思えますね。

杉山先生のお話のように、中国は活字の歴史が長いので、「活字がなければ信用しない」という文化が定着してしまったのではないのでしょうか。それに比べて、ヨーロッパの活字文化は新しく、写本の伝統は元来中世からあり、書簡は非常に重要で、事実上学者の間では、出版に近い性格で回っていました。また、大学の講義ノートもきれいに書かれ綴じられた状態で回りました。そういう形の文化（写本文化）が昔の人の間に残っており、意外にも18世紀まで、同時並行的にそのような世界があったのです。

このような違いは、歴史の浅さの違いからかと思ったのですが、日本の場合はどうなのでしょう。

塩村：確かに日本の書物文化には、未熟な面があるのでしょうか、また独特な面があります。先ほども申し上げたように、古典のテキストのあり方は多様で、たとえば『源氏物語』といっても、決定版のテキストはいまだにありません。「様々なテキストが多様にある」というのが本来の形である、という考え方が、むしろあったのではないのでしょうか。「正しいテキストはひとつだ」というのは近代人の幻想で、昔の日本人は必ずしもそのようには考えなかったようです。

長尾：多様性を容認する文化が、相当継続してあったということですね。しかしある時点で校訂版が作られ、テキストが完全に決められてしまうのが普通です。日本では、正しいテキストを国家が決めたり、あるいは学者が正しいテキストを確定していくということに対して、大変な努力を払うということは、ほとんど見られないのでしょうか。

塩村：そうですね。

逸村：ヨーロッパの場合、キリスト教がひとつの大きな要素で、勸善懲悪の世界とはいわないまで

も相当の影響力を持ちました。シェークスピアの作品でもキリスト教の精神に合うように一時期書き直され、しばらくの間ずっとそれが通用し、かなり後になって元の姿に戻るといったことがありました。

長尾：18世紀のヨーロッパでは、著作権などが明確ではなかったので、オリジナリティの考え方が希薄でした。だから、本屋が勝手に書き足すということも起こります。また私たち研究する側からすれば、どれが正しいテキストであるか決めることが困難になります。これは、日本の事情と似通っているように思います。

塩村：日本の場合、多様なテキストの並存する原因のひとつは、「聖典」がなかったことではないでしょうか。キリスト教の場合、聖書がありますし、中国の場合、四書五経類という儒教の聖典があります。聖典の場合、一字一句を正しいものとして求め定めていくという非常に強いパワーが働きました。でも日本の場合は、それに相当するものが皆無とはいわないまでも、あまり多く存在しなかったようです。

逸村：フランスは、国家が「納本制度」を定め、本を出版したら、とにかく国に納めるという現代的なシステムが、かなり早い時期（16世紀）から整っていました。したがって、国には必ず一部数は残るので、ある意味フランスの教会と王制国家の双方のメリットが合致しているといえます。同様のことは、日本では考えなかったのでしょうか。

塩村：それは、ほとんどありませんでした。さきほどの「聖典」として数少ない例外は『日本書紀神代卷』です。江戸時代、最初に出版が行われたとき、後陽成天皇が公家たちを動員して実際に印刷作業を行った「慶長勅版」という活字の出版物があるのですが、このとき最初に刊行された作品が、この『日本書紀神代卷』だったということは非常に象徴的な出来事です。このように印刷されたテキストとして日本の神話が定着すると、中世的な雑多な神話が排除されていきます。スタンダードが確立してくるわけです。

逸村：そうすると、中国は天によって正統であるという条件の下に国が成立していますので、ある意味分かりやすいです。それに対し、ヨーロッパでのキリスト教をベースにした思想の展開があり、日本では今のような話をベースにした出版物が細々と出回っているのですね。

長尾：中国の場合、商業出版は、学問的な意味では「テキスト」という信頼に値しないことに対し、自費出版、あるいは国家による出版というものは学問性が高く、主流になっていたらしいのですが、日本では、その点どのようになっていたのでしょうか。

塩村：日本の場合は、中国や朝鮮と比べると、商業出版のほうが主流のように思われます。

逸村：読める人が多かったからですか。

塩村：それもあったかと思われれます。日本は識字率が高かったようですから。

## 読書するという行為

長尾：識字率の違いもかなり大きいですが、読み方について、日本は音読、黙読のどちらが主流だったのでしょうか。

塩村：一般に音読だったといわれています。読書について、文学作品の記述を見ていくと、大体大きな声に出して読むことが多いと分かります。

長尾：ひとりでも声に出して読むのですか。

塩村：そのようです。大体、大正期頃まで、読書は音読が一般的だったそうです。

逸村：『「読書国民」の誕生<sup>13</sup>』では、鉄道の普及によって、出版が広く日本中に広がったのと同時に、電車で長時間を過ごすなかで黙読が普及したと書かれています。電車のなかで本を読む際に、声に出すのは迷惑だからです。さらに、夏目漱石などを読むと、電車のなかで長時間

13 永嶺重敏『「読書国民」の誕生：明治30年代の活字メディアと読書文化』（日本エディタースクール出版部、2004）。

過ごすために、本や新聞などを「回し読み」をしていたことが分かります。ヨーロッパや中国で鉄道が普及したときには、これと同様なことが起きたのでしょうか。

長尾：その点はよく分かりませんが、一般的にヨーロッパでは、19世紀に黙読の世界に入り、それに伴って小説の文体が変化するといわれています。音読の世界では1人称がかなり支配的で、3人称的世界は、19世紀のバルザックやフロベールに変わっていくプロセスで、そこで黙読する読者になっていきます。それは「静かに読む」という変化であり、大体ここに19世紀ヨーロッパの文学の成立があるといわれています。

逸村：18世紀では、戯曲などはそのように設定して、読まれていたようですね。

長尾：文体でも、スミスの『諸国民の富』などは講義調で書かれてあり、声に出して読むような文章になっています。スコットランド啓蒙の作家たちも一般にそうです。ジョン・ロックの場合は覚え書き的な文章という側面があり、悪文で知られているのですが、スミスなどのいわゆる名文といわれるものは、論文自体が講談調です。つまり、大学の教壇で説教するとおりに書くという形式を取っており、その後19世紀に入ると、経済学関連の文献等は論文調になっていきます。確かにこの現象は、「黙読する読者の成立」と大きな関係があるように思います。日本の場合も、19世紀の明治以降からそのようになってくるのですか。

塩村：大正時代の新聞の投書に「電車のなかで音読するのはうるさいから、やめたほうがいい」というのがあるそうです。

長尾：江戸時代に音読する際、「聞かせる場」というのはあったのでしょうか。あるとすると、どのような場だったのでしょうか。

塩村：読書の実際の現場がどうなっていたのかに関してはあまり資料がなく、よく分からないことが多いです。

秋山：「読み聞かせている」という資料はありますね。18世紀になると、地域では、読み聞かせるために民衆自身が本を作ったりしています。少し時代が下りますが、天保期、三河の山間部で加茂一揆が起きた際にも、地元の間人がその事件に取材し、そこから実録風の大部な書物を作って、夜の町なかで話して聞かせるということをやっています。

## 「読み聞かせ」から議論への広がり

長尾：具体的に「読み聞かせ」は、どのような場所で行われていたのですか。

秋山：町屋のなかだだと思います。そのような「語り」は、人々に読ませるというよりは、「語るためのテキスト」として考えられ、本が作られたのだという資料があります。

長尾：ヨーロッパでは、パブやコーヒー・ハウスで、新聞やニュース、政治パンフレット類が声に出して読まれていました。すべての人が字を読めるわけでないので、読める人が声に出して読んで聞かせるという場があったり、あるいはコーヒー・ハウスのようなところには図書館のように本が置いてあり、そこで皆が本を読んだり話したりする空間があるというのが、17・18世紀のヨーロッパ事情です。その意味では、書物が声に出して読まれ、あるいは聞かされたということがあると思うのですが、日本の場合はいかがでしょうか。例えば、瓦版やニュース等、情報関係についてはどうだったのでしょうか。

塩村：井原西鶴の場合、残念ながら読者側の資料はほとんどありませんが、紀州藩家老の侍医を務めていた人物が日記を残しており、そのなかに西鶴の読書に関する資料があります。それによると、主人の前で「侍読」が行われています。つまり、西鶴の作品は殿様の前で声に出して読まれているのですね。

長尾：誰か別の人が読んでいるのですね。その場合、医者が音読してみせたのでしょうか。

塩村：そうです。そこで皆が聞いているわけです。おそらく、同時に評論を加えたりしたのでしょ

う。今の講読ゼミみたいなものですね。

長尾：読者は耳から聞いたり、自分で音声として発したりしていたのですね。

逸村：明治初期には、自発的なのか、上の政策なのか定かではないですが、「ニュースをきちんと伝える」という行為がありました。ただそれは、あまり長続きしなかったと思います。

秋山：それは、非常に興味深い問題です。幕末期には、政治情報を筆写した「風説留」が、全国各地で分厚く蓄積されていることが知られています。さまざまな政治情報の入りこんだ風説を書きとめ、それがどんどん転写され、全国的に流通するのです。それが、明治政府が新聞を許可し、太政官報を出すようになると、急激になくなってしまいます。このように、「風説留」は、時代の狭間に生まれたメディアとして存在したのですが、その情報源は、サロンのネットワークとして全国に張り巡らされており、それを通じて政治・経済に関わる重要情報が各地に届きました。

長尾：「サロンの」というのは、どのようなものだったのですか。

秋山：これは江戸中期から、小規模な和歌、俳諧や漢詩といった文芸サークルの形をとって、小さい町や村々をエリアに存在していたのですが、徐々に大規模で強力な豪農商の情報網を結び、権力末端とも接触しながら、全国ネットワークとなっていきました。

長尾：おもに文芸ですか。

秋山：ベースはそうですが、かなり政治・経済的な要素が入っていますから、必ずしも文芸一色ではありません。

長尾：米の価格などが、通信として使えるわけですね。

秋山：当然、公式なものではありませんが、そのようなところに、為政者は政治情報を意図的に投げこんだといわれています。そのような緊張関係があったのだと思います。

長尾：同様の役割は、都会では豪商が担ってきたのですか。

秋山：そうですね。

長尾：農村部でも、豪農層という形でかなり広がっていたのですね。

秋山：そうです。そのようなサロンの部分は、大小サイズの違いこそあれ、小林一茶などが、そのネットワークの上を俳句一本で全国を歩ける状態になったのは、かなり早い段階です。

長尾：それは何世紀ぐらいですか。

秋山：18世紀の後半には、確実にそのようなネットワークができていました。

長尾：そのような場には、基本的には文学的な議論をするために集まっていますが、それ以外のものが流通するのですね。そこでは、様々なことが議論されるのですか。

秋山：純文芸的な存在というよりは、地域の政治・経済などに関わりのある支配層や豪商農層の人々が嗜んでやっている場合が多いと思います。

長尾：現代風に言えば、公共圏という感じでしょうか。それが18世紀後半ぐらいから、かなり発達してきたのですね。

秋山：そのようです。もちろん、そこに流れる情報が極端に政治化してくるのは、やはりペリー来航を契機とする危機意識の高揚があつてからのことです。

## 『百科全書』的な知と、東洋のあり方

長尾：そうすると、日本とヨーロッパではかなり共通性がありますね。ヨーロッパの公教育制度の確立、または近代国家の確立が、日本や中国に入ってきて変化するという事は知られていますが、それ以前の世界の共通性もありますね。

それでは「知識の総合」という点ではいかがでしょうか。中国（清代）では康熙帝が辞典（康熙字典）を作ったり、『古今圖書集成』が作られたりなど、中央集権的に行われていました。

また、民間もちろん、博物学に関する著作がずいぶん昔からあり、重要なものが日本に入ってきています。このように、民間の学者が集成していくというやり方と、国家が集成するというやり方との、ふたつの流れが同時的にあります。ヨーロッパにはアカデミー（フランスの王立アカデミーなど）があり、科学をまとめる役割を果たすという中央集権的な動きと、一方では、結果的に国家に対立する形で百科全書の編纂が進められるわけです。ですから、むしろ両者が対抗しつつ進んでいくなかで、総合的な知識を集成するという動きがありますし、あるいは、いろいろな科学者集団が王立協会のなかから広がりを見せ、様々な影響を与えます。そのような集団を中心にして、百科事典的に知識をまとめるというのが、18世紀の典型的な特徴で、その場合、中国やヨーロッパと比べて、日本の場合は知識の集成はどのような形で考えられていったのでしょうか。あるいは、どのような人が担ったのかという点について何か教えて頂ければと思います。

塩村：日本では、中国的な類書（百科事典）は発達しません。ただ、小規模な漢籍類書は「和刻本」として日本で覆刻刊行されています。もちろん『古今図書集成』のように大規模なものはありませんが。また、中国の類書をまねて、個人的な覚書的な類書を作ろうとしています。しかし、中国の類書に比べると、まさに雲泥の差で、「知識の総合」のようなことはあまり考えなかったようですね。

逸村：それは例えば、財力に関係しているのですか。

塩村：それもあります。そもそも日本には、類書を作り上げるような中央集権的な強力な権力がありませんでした。幕府もやろうと思えば、できなくはなかったのですが、そのような発想はありませんでした。百科事典も結局『和漢三才図会』のみで、これは大坂の町医者寺島良安が編んだものですから、明らかに個人的な事業です。

長尾：個人的なものということですか。

塩村：そうです。江戸期の百科事典といえばそれきりで、もう江戸時代には同様のものを作ろうとする人は出てきませんでした。ただし本草学については、若干それに類することを試みた人がいましたが、総合的な百科事典はないです。これが封建という時代のひとつの特徴、あるいは限界ではないでしょうか。そういう発想がそもそもなかったのでしょうか。

福田：『和漢三才図会』はテーマごとに構成されていて、厳密にヨーロッパのようなアルファベット順になっていませんよね。

塩村：『和漢三才図会』は分類です。もちろん、中国の『三才図会』に倣っているのですが。

福田：その『三才図会』も、グループに分けられたものなのではないでしょうか。

塩村：すでに中国の雛形があって、それに日本的なものをはめこんであります。解説も基本的に『本草綱目』の解説が引いてあり、そのうえで日本独自の解説が「案ずるに」という具合に書いてあります。

秋山：それが馴染んだ方法だったのでしょう。さらにそこから構造化するという発想はなかったようです。以前、伊藤圭介展を行ったとき、磯野直秀先生がいらっしゃり、そのようなお話をされていました。知のあり方に関して、ヨーロッパと日本を同一線上で考えると話が分からなくなるので、むしろ両者は違う線路を走っている、西洋が「体系化・総合化していく」という列車に乗っているのに対し、日本は別の列車に乗っていると考えるほうが分かりやすいのではないかと。日本の知のあり方は、世界を身近なものとして認識するが、それは「引き出しに入れる」という感覚に近いようです。日本では知識を、自分が使いやすいような引き出しに入れて格納すると捉え、ヨーロッパのようにそれを積み上げ構造化していこうとする発想にはいかないのです。その点について磯野先生は「仕分ける」という言葉が使われていました。

例えば、クジラが魚でないことは承知していますが、魚に分類したほうが納得しやすいというか、分かりやすいですね。ですから、今でも我々は日常生活のうえでは、むしろ魚と

いう認識で捉えています。「見て取れるものならば、それでよいではないか」という、日本的な「仕分け」の方法の指摘には、非常に納得させられました。「仕分け」がなされれば、そこで役目を終えるのです。伊藤圭介にしても、徹底的に資料を集めて「仕分け」をしていますが、最終的にどこを目指していたのかはよく分からないですね。

長尾：それは彼が、情報整理の立場に立っていたということでしょうか。

逸村：実用性を重視したのでしょうか。まだ知らないことがたくさんあるので、「仕分け」の引き出しのなかで増やしていこうではないかと考えたのではないのでしょうか。それこそ、「引き出し」の世界で、それを抽象化・体系化するという風には考えなかったのでしょうか。

秋山：仕分けるのですが、それが徹底しています。観察の緻密さという点で、ヨーロッパでフェアブルのような人は特異な存在だと思うのですが、日本にはいくらでもそのような人がいました。尾張では吉田雀巢庵などが代表ですが、描かれた昆虫の絵の微細なことには、本当に驚かされます。目にしたそのままの形で認識しようと徹底していたことは、特徴的だと思います。

長尾：かなり厳密な経験主義だったのでしょうか。

秋山：そうですね。違う列車に乗っているといえば、その通りです。

逸村：分類は、それこそアリストテレスの頃から熱心に試みられてきましたし、キリスト教神学やベーコンなども、やたら分類に固執していますね。ようやく哲学は神学から独立し、科学から独立して、という具合に。これに対し、日本的な発想はあくまで役立つか否か、それも日常の暮らしのうえで役立つかどうかというレベルで、同心円を描いており、西洋のようなツリー状には向かわなかったのです。

福田：無理して分類・体系化しないという具合ですね。

逸村：そうする必要を感じなかったのでしょうか。

秋山：そのような意味で、現代のように、知識や科学が我々の日常世界から完全に離れているのではなく、非常に身近なものとして捉えられていることが特徴だと思います。これも磯野先生のご研究によるのですが、国立国会図書館に、岐阜県養老町沢田の真泉寺という寺の住職が描いたという最古のギフチョウのスケッチを含む博物図譜があります。享保16年（1731）の序があり、身近にある動植物が非常に微細に描かれ、美しいものですが、自然を「そのもの」として理解し、仕分けようとしているみたいです。目指しているものは、知識の総合化とは異なるものの、18世紀前半という時代性と、その鋭い自然観察眼に驚かされます。

長尾：分類の方法論的な違い、という問題があるのかもしれないですね。

## 東西の写本文化

長尾：18、9世紀における名古屋大学のコレクションとして特筆すべきことがあれば、教えて頂きたいと思います。

塩村：18、9世紀といえば、古典籍が主要な時期ですね。

長尾：そうですね。展示会の当初は、ヨーロッパを考えていたのですが、それは以前にもやったことがあります<sup>14</sup>から、今回はヨーロッパをひとつの柱としますが、和・漢・洋をそれぞれ対比する形で展示しようと考えたわけです。中国の場合、四庫全書（復刻版）については貴重なコレクションとまではいわないまでも、これだけまとめて持っているということは重要なことであり、これを指摘する必要はあると考えています。

塩村：まず、『和漢三才図会』は中央図書館にはありませんが、文学研究科ではこの初版を所蔵しています。『和漢三才図会』の初版本は滅多にないもので、かなり貴重なものなのです。

14 1999年11月22日から28日にかけて、名古屋大学附属図書館では「『百科全書』とその時代展」と題した展示会が行われた。

長尾：洋書に関して、中央図書館には『ホップズ・コレクション』があります。「ホップズ」の名が付されているものの、ホップズ以外の人のものがほとんどで、いわば17・8世紀の洋書本の集まりなのです。

塩村：例えば、講義録のようなものがありますね。17世紀の初めですが、『伊勢物語』の講釈の記録があり、これは貴重です。おそらく連歌師による講釈ではなかったかと推測されます。現代風に言えば、先生の講義を録したオリジナル・ノートのようなものです。こういうものが、何種類かあります。

長尾：そういったものは、流通していたのですか。

塩村：いいえ、珍しいです。実際の講義そのものを録しているわけですから。当時の古典の教授のあり方を知る資料として、国文学者の間では珍重されるものです。

長尾：実録して、個人の文庫に所蔵されていたのですか。

塩村：そうです。

福田：清書したのですか。

塩村：いいえ、清書はされていませんから、読みにくいです。

長尾：大体17世紀頃でしょうか。

塩村：そうです、17世紀ですね。その類のものは何種類かあります。

秋山：今整理しているなかでいえば、18、19世紀にかけて旗本当主が持っていた複数の書籍目録があります。その中身は漢籍が多いのですが、失われたものばかりです。

塩村：書籍そのものは、もう無いのですか。

秋山：そうですね、もうありません。

長尾：どこの旗本ですか。

秋山：交代寄合の高木家<sup>15</sup>です。

長尾：水田洋先生は、アダム・スミスの蔵書目録を作られましたが、同様のものでしょうか。

秋山：性格は違うにせよ、ある時代の旗本クラスがどのように勉強していたか、どういった本を持っていたのかということを知ることができます。

長尾：それは面白いですね。その書籍簿には、大体どのような系統のものがあるということについて、把握されていますか。

秋山：大体分かります。

逸村：それこそ、分類されているのですか。

秋山：それが、されていません。しかも、独特の筆遣いで書かれていますから、読みにくいです。

塩村：「大福帳」みたいな形態ですか。

秋山：そうです。横帳です。

長尾：大体どのようなものが何割くらい入っているか、そういったことは分かりますか。

塩村：一般には、ほとんどが漢籍で、まず四書五経の類が多数を占めます。

秋山：高木家のある当主のケースでは、漢籍は2割ほどで、存外に歌論が多かったのが印象に残っています。これは、その当主の個性によるのかもしれませんが。

逸村：その旗本は、どうやって収集したのでしょうか。

秋山：先ほどいわれたように、写本が圧倒的だと思います。

逸村：写本を生業にしている人がいたわけですか。

塩村：写本屋さんが存在しました。自分や知り合いが写したり、写本屋で作ってもらったり、いろ

15 宝暦治水をはじめ木曾三川流域治水史の宝庫として知られる名古屋大学附属図書館所蔵高木家文書は、総点数約10万点に及ぶ一大古文書群である。うち、5万2000点については既に目録5巻が刊行されており、残る書状類数万点の整理・研究が現在進められている。文書旧蔵者の高木家は、戦国期には養老山地東部の駒野・今尾一帯に勢力を張る土豪で、天正18年(1590)豊臣政権に美濃を追われるが、関ヶ原戦後(家譜では1601年とするが別伝もあり)、近江・伊勢と国境を接する美濃国時・多良郷(現岐阜県養老郡上石津町域)に4300石の知行を与えられ(西家2300石、分家の東・北家各1000石)、明治維新まで同地を支配した旗本である。

いろいろあります。

逸村：それは階級的にいえば、町民ですか。

塩村：多分そうだと思うのですが、詳しくは分かりません。

秋山：尾張藩では、陪臣クラスが内職でやっているケースがあります。貸本屋大惣の筆耕をしていた小寺玉晁などが有名ですが。

塩村：侍がアルバイトでやりそうなことですね。

逸村：中世ヨーロッパでは、写本は完全に僧院の仕事となっていて、あの頃は皆カトリックだったと思いますが、ひたすら写すことだけが仕事で、籠城して行っていたようです。

塩村：日本では、公家もたくさん写しましたよね。

逸村：写本屋というのは、内職に近い職業なのでしょうか。

秋山：実態は分かりませんが、写本といっても、刊本から写すほか、写本からの転写もあり、さらには写本屋自身が創作に加わるケースもあります。

塩村：漢籍には、和刻本と唐本（中国から舶載した本）があり、唐本はかなり高価です。これに対し、和刻本は日本で翻刻されたもので、比較的安く入手できます。とはいえ、ある程度有名な本しかありませんから、少し珍しい本の場合は、所蔵者のところへ行き、写させてもらうのです。そういう写本も大量に残っています。岩瀬文庫<sup>16</sup>にもこうした写本が多数あり、昔の人はよくあれだけ写したものだと言わなければならないほどです。

秋山：当時の人々の写すスピードは、我々が想像する以上に早かったのでしょうか。

逸村：昭和の前期頃までは、立身出世の話として残っているものに、本屋に行き、本を写して来るという話があります。そこまで根付いていたのですね。

長尾：ヨーロッパも、写本の習慣があります。

逸村：明治期の東大の学生は、1年間の講義で、今では考えられないほどたくさんのノートを書いていました。写すという行為は、あの当時、当たり前のこととして行われていましたから。

## 国家および科学の制度化プロセス

塩村：ただ、明治期はそのような行為を政策的に捨てたのですね。筆記体を捨てた背景には、そのような意味があるのです。

長尾：それは情報政策か何かですか。

塩村：私はそうだと確信しています。直接的な証拠はまだ見つけれませんが、小学校で草書体を教えなくなった理由に、そのような意図がはっきりあると思います。

長尾：それは、情報を中央政府が管理しているということですね。

塩村：そうです。情報を一元的に管理するという意味があって、江戸時代のような情報の流通の仕方に脅威を感じていたのではないのでしょうか。皆が書物作りに参加するというのは、危険なことですからね。

秋山：「尻尾を捕まえない」ということですね。

塩村：そうです。統制下にある本屋だけが本を作るというのが、一番簡単な話ですね。筆記体を捨てた背景には、そのような陰謀があったのではないのでしょうか。結果的に、それは見事に成功したといえますね。

逸村：当時の文部省に、そのような考えを持った聡明な者がいたということですか。

塩村：そうだと思います。なぜなら、そのような政策をとった国は当時、他にはなかったはずで

16 岩瀬弥助(1867-1930)によって、1908年(明治41年)に設立された私立図書館で、1931年には財団法人岩瀬文庫となり、1955年に西尾市立図書館岩瀬文庫となった。弥助は明治20年ごろから、古書店主が窮迫している年末に現金で本を一括購入、特に自筆本や古版本には金に糸目を付けず買い入れたという。同文庫には、各分野にわたる蔵書が約8万余冊あり、古版本・写本等にも優れたものが蔵されている。

から。欧米でも、いまだに筆記体を捨てていませんよね。

逸村：日本では、江戸期から多くの人々が字を読み、書くということ土台があったがために、そういう政策ができたのですね。

塩村：さきほどいった二重構造が、政府にとっては都合が悪かったのではないのでしょうか。中央集権国家としてやっていくためには、相容れないものだったと思います。

逸村：サロンの、いわゆる情報通というところから、「風説留」のようなものが出てくるのを抑えるために官報を作り、他方でその根源を絶ちつつ、情報を管理するような政策が行われたのだと思います。

塩村：もうひとつ付け足せば、筆記体を捨て去ることによって、過去の文献が読めなくなります。そもそも明治政府がやろうとしたことは、中央集権的国家が、あたかも古代から続いているように装うことだったわけです。そのあたりに転がっている江戸時代の文書なり、出版物なり、写本なりを皆が読めたなら、過去の日本が中央集権ではなかったことが明々白々となってしまう。そのような過去を切り捨てる働きがあったと思うのです。そして、これが結果的に見事に成功しました。江戸時代の文献を皆が読むということは、ある程度危険なことです。江戸時代の朝廷に権威がなく、小さい大名程度の経済力しかないということは、ちょっとした記録を見れば明白です。また、江戸時代には戸籍も徴兵制度もなく、農民以外は所得税もありません。例えば、結婚した夫婦が別姓を名乗るということは、今ごろになっ  
ていわれていますが、江戸時代までは夫婦別姓でした。明治になって、家父長制度を推進するために無理して夫婦同姓にしたのです。それをあたかも昔からそうであるように装っているのです。戸籍にしてもそうで、徴兵制度を行うにはどうしても戸籍が必要になります。そのために、太古の昔から戸籍制度は整っているように見せているわけです。

秋山：夫婦同姓となるのは日清戦争後、1898年の明治民法からですね。「創られた伝統」の典型というわけです。この戸籍制度は、敗戦後に廃止される運命であったところ、家を氏と読みかえて延命し、現在では世界に冠たる国家管理システムといわれています。

逸村：ところで、ヨーロッパで近代国家が成り立つのは、いつ頃だとされていますか。

長尾：フランス革命のときだといわれています。

逸村：文化面と政治面との目的が、ある意味で合致するような動きというのはなかったのでしょうか。19世紀半ば頃には、中学生にラテン語で詩を書かせ、全国コンクールのようなものを行っています。ある意味、過去のもの、その正当性をいつまでも意識し続けたのですね。

長尾：人文教育ですね。戸籍は、フランス革命以降に、要するに中間団体を飛び越えて、個人を掌握する目的でつくられます。中間団体自体を禁止して、直接個人を掌握したのです。そして、そのなかで厳密な戸籍が作られていきました。また、公教育制度を定め、フランスではグラン・ゼコールという専門学校制度を作り、その後初等教育が形作られていき、その下でフランス語を教えるのです。

フランスとイギリスでは大きく異なるような気がするのですが、イギリスの場合は、明確にどの時点で、そのような制度ができるのか特定することは難しいです。イギリスは18・9世紀にかけて、意外と中央集権的です。例えば、1848年に起きた革命<sup>17</sup>のとき、ロンドンの警官の数はパリよりも2倍程度多かったといわれています。中央集権的な環境のなか、個人の掌握は、国家機構が中心となって徹底的になされました。そういうなかで、「黙読する読者」が生まれてきたのだらうと思います。

逸村：徴兵制度というのが、大きなタームですか。

長尾：そうですね。フランス革命時の「国民軍制度」の確立が指摘できます。それまでは「常備軍制度」で、常備軍にしても、もちろん戦争になれば一般人も駆り出されるのですが、基本的に王様が資金を提供して戦争をします。これがフランス革命時には、国民軍制度に変わり、

17 フランス2月革命。

国民を駆り出す体制になりました。そうすると国家が、国民すべてを掌握する必要が出てきて、貴族など中間的な権力を潰していくという形で、国家が管理する制度が完成します。

ただヨーロッパの場合、情報については、印刷を一般化させる形になってきます。イギリスの検閲制度は、基本的に18世紀には残りません。むしろ非常に緩やかになっていくのです。フランスには検閲がありますが、それは教会によるものですから、教会の勢力が衰えていくと同時に、検閲制度は衰えていくわけです。したがって、いわゆる「情報の流通の自由」が、中央集権と同時に確立されていくわけです。この文脈からすると、「江戸期の二重構造の解消」という話とは少々異なる面がある気がします。ただし、画一的な知識を与えていくことで、国民を管理し動員する体制は、ヨーロッパから日本にもたらされたせいもあり、両者の共通点といえるかもしれません。

ヨーロッパの場合、19世紀にかけてのいわゆる「科学の制度化」の役割が大きく、その過程で教育制度は制度化され、専門家とアマチュアが分化しました。先進的な例はフランスの科学アカデミーだと思いますが、それは国家が給与を与え、科学者を雇うというような制度です。科学アカデミーでは、専門家の証として、数学の知識が非常に重要視され、数学を中心とした科学が形成されました。そうすると、アマチュアは排除されてしまいます。19世紀にはそのような制度化が、科学および学問全般に及び、学会が成立していきます。知識に関し、作り手と受け手が決定的に分離するのです。確かにイギリスは、最後までアマチュアが参加していますが、次第に減ってなくなりました。いずれにしても、「作り手と受け手の分離」の、二極分化が起きてくるわけです。検閲もあり、国家による情報操作はあったにせよ、科学の制度化は、必ずしも国家が主体となって行われたばかりでなく、このような専門家制度の果たした役割は看過できません。また、この専門家制度の大部分を支えたのが、国家の公共教育制度であったことは看過できないと思います。

逸村：日本はそこから、自国の政策に合うような部分を取り入れて、初等教育に力を入れつつ、科学を発展させ、国家を確立させていったのですね。

長尾：中央集権国家の幻想を実現するということですね。

逸村：帝国大学も作りでしたね。

長尾：ヨーロッパと中国と日本とでは、相違点や共通点が様々ありますね。知識のあり方に関していえば、日本では明治維新で、ヨーロッパでは19世紀に大きな変化が起こったと考えられるでしょうか。そのなかで、特に面白かったのが、秋山さんがおっしゃったような分類方法の相違という話です。情報論的・整理学的にどのようなのか分かりませんが、日本には、知に関してそもそも違う体系があり、ヨーロッパ的な宇宙論に基づいて全体を分けていく方向とは異なるシステムがあるようですね。あるいは、「ヨーロッパ的な意味での」システムといった意識は希薄であるようにも見え、何らかの実用的なシステムが存在しているという伝統が、例えば伊藤圭介クラブのなかに見受けられるようですね。

日本人にとって、情報整理ということと宇宙論とは別の問題なのでしょうね。ヨーロッパの伝統では、存在の連鎖（連鎖）によってつながれた、鉱物から神様までの全体的な流れ・体系があり、そのような宇宙観は、古代のアリストテレスやプラトンあたりからずっと続いています。それらを継承しつつ、キリスト教的に解釈して、その枠組みに取りこんでいくというのが、ヨーロッパの基本的な考え方だとするならば、「引き出し」は最初からあるのだといえます。しかし、日本の場合はそうでなく、まず物それ自体を実用的に見て、それぞれに「仕分けて」いくのだといえますね。

塩村：書物についていえば、中国は四庫分類が古くから確立していて、作り手の側は、四庫分類のどこに入るのかを考えながら本を作っています。ですから、書物の名前でも外題はとらず、内題（本文の冒頭にある題名）でもって、すべて登録するようになっています。明らかに分類されることを考えて、本を作っているのです。日本の場合は、そのような事情は度外視し

ていて、好き放題、ほしいままに本を作っています。

逸村：洋書では著者名が先頭に立ちます。目録を作成する際には、著者名から始まります。その理由は、言の葉は神の言葉であり、誰がいったかが重要視されるためです。そのためにヨーロッパでは、著者名にこだわる世界ができてくるのです。これに対し日本の場合は、さきほどの話にあったように、まったくこれに執着しません。それよりは、誰が最初に作ったのが、かなり深刻な問題となってきます。目録を一枚作る際の手順は、日本の場合、「書名」から作りますが、西洋人は「著者名」から作ります。著者がなければ、「統一書名」を持てきません。

## おわりに：知識の集積と分類、体系化

長尾：本草学などいろいろな知識があると思いますが、それらを頭で整理するとき、江戸時代の人々はどのように整理したのでしょうか。ヨーロッパにはいろいろな知識の分類図があります。例えばベーコン、さらに古くはアリストテレスによるものなど、いろいろな分類法があるわけですが、日本の場合、そのような分類はまったくなかったのか、あるいは中国の分類を使うのでしょうか。また、勉強する際にはどのように頭に入れたのでしょうか。これは、書架の分類と関連してくると思いますが、その点はいかがでしょう。

塩村：当時の人間の世界観に関わる難問ですね。ただ学問の分野といっても、そんなに多くあるわけではなく、要するに主要なものは「漢学」です。私たちの目からすれば、本草学者に見えても、その本籍は漢学者です。ですから、あまりそのように分類するという意識がないのもしれませんね。

長尾：蘭学はどうですか。

塩村：蘭学では多少、分類に対し意識的な人が出てくるのですが、それでも蘭学者の多くは漢学をきちんと勉強しており、やはり漢学者であるといえます。そして、根本的に人格の向上につながらないものは、学問としてやっても意味がないという発想がどこかにあるように思うのです。『大学<sup>18</sup>』のなかにある「格物致知」という言葉の解釈をめぐって、侃々諤々の意見が戦わされたのですが、結局「水や石ころひとつを分析して何になるのか」という考え方が中心だったのです。西欧的なサイエンスの精神とは遠いように思います。

秋山：とにかく日本では、文字の受容層が非常に広く、いわゆるインテリゲンツィアや読書人というものだけでは括れないですね。様々な人がいろいろなものを受容して、そこで非常に特化したコレクションを持ったりするケースも珍しくありません。

逸村：ヨーロッパ、特にフランスと比較すると、藩が独立した国家のような位置づけにあるということが大きかったのでしょうか。

塩村：それは完全にその通りですね。

長尾：やはり、識字率が大きく関連しているのではないですか。

逸村：藩が豊かになるためには、識字率を高めたほうが有利だという意識は、どこの藩にもある程度あったのでしょうか。

塩村：当然そうでしょうね。字を知らなければ、著しい経済的不利益を被ることになりますから。商人ならば、字を知らずには、ほとんどやっていけません。

秋山：百姓でも字が読めないと、騙されたりして大変なことになりますね。文字通り、生きるための文字需要は、18世紀以降、一段と高まっていったと考えられます。

長尾：識字率の高さというのは、日本の特性なのでしょう。

秋山：やはり、戦国の内戦状況で軍事都市、城下町を作り、そこに暴力装置を集中していった、い

---

18 四書のひとつ。四書とは、儒教の根本經典とされる、「大学」「中庸」「論語」「孟子」の総称をいう。

わゆる兵農分離が大きく関係するのではないかと思います。かつて村には武士がいたのですが、彼らは次第に村から剥がされ、城下に集住するようになります。すると、実際に自分たちが日常的に出向いて支配しているわけではありませんから、城下町にいて周辺地域を支配するには、別の方法が必要になります。そういう場合、何によって支配するかといえば、一番コンパクトで効率的な、文字による支配が理に適っていたのではないかと思います。

長尾：行政組織の末端に百姓が組みこまれるということに、問題意識があったのですね。

秋山：もちろん、相互作用的な関係や石高制の影響なども考慮しなければなりません、文化レヴェルの問題というよりは、支配のシステムとして選ばれたというのが大きかったのではないのでしょうか。そして、それに対応する力というものが地域に育ってきており、さらに経済社会の発達とともに寺子屋などの庶民教育が充実をみせることで、ヨーロッパとは比較にならない識字率の高さとなって現れたのだと思います。

逸村：明治期になると、その識字率の高さを逆手にとってこれを土台に、国家が築かれたということなのでしょうか。

長尾：それで、明治集権国家になっていくというわけですね。日本は、ヨーロッパ諸国より識字率が高かったために、これが逆に支配の手段となり、近代国家の樹立が達成されたといえますね。

〈了〉

# おもな参考文献

## 1. 外国語文献

- Bacon, Francis. 『学問の進歩』(服部英次郎・多田英次訳) 岩波書店、1974年(原書名: *The Advancement of Learning*, 1605)
- Cavallo, Guglielmo. et Roger Chartier ed. 『読むことの歴史: ヨーロッパ読書史』(田村毅ほか訳) 大修館書店、2000年(原書名: *Histoire de la lecture dans le monde occidental*. Paris: Editions Du Seuil, 1997)
- Chagniot, Jean. *Paris au XVIIIe siecle*. Paris: diffusion Hachette, 1988
- Lovejoy, Arthur O. 『存在の大いなる連鎖』(内藤健二訳) 晶文社、1975年(原書名: *The Great Chain of Being*. Harvard University Press, 1936)
- Mandeville, Bernard. *The Fable of the Bees, or, Private Vices, Publick Benefits*, ed. F.B. Kaye. Oxford: Clarendon Press, 1924; reprint, Indianapolis: Liberty Classics, 1988.
- Petroski, Henry. 『本棚の歴史』(池田栄一訳) 白水社、2004年(原書名: *The Book on the Bookshelf*. New York: Alfred A. Knopf, Random House, 1999)
- Roger, Jaques. 『大博物学者ビュフォン: 18世紀フランスの変貌する自然観と科学・文化誌』(ベカエール直美訳) 工作舎、1992年(原書名: *Buffon, un philosophe au jardin du roi*. Paris: Fayard, 1989)
- Ross, Ian Simpson. 『アダム・スミス伝』(篠原久・只腰親和・松原慶子訳) シュプリンガー・フェアラーク東京、2000年(原書名: *The life of Adam Smith*. Oxford: Clarendon Press 1995)
- Schwab, R.N., W.E. Rex and J. Lough. *Inventory of Diderot's Encyclopedie I-II. Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, Vol. 80, 83, 1971.
- , *Inventory of Diderot's Encyclopedie III-VI. Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, Vol. 85, 91-93, 1971.
- , *Inventory of Diderot's Encyclopedie VII: Inventory of the Plates. Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, Vol. 223, 1984

## 2. 和文献

- 赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史: デカルトから啓蒙思想へ』名古屋大学出版会、2003年
- 安藤隆穂『フランス啓蒙思想の展開』名古屋大学出版会、1989年
- 安藤隆穂編『フランス革命と公共性』名古屋大学出版会、2003年
- 磯野直秀『日本博物誌年表』平凡社、2002年
- 井上進『中国出版文化史: 書物世界と知の風景』名古屋大学出版会、2002年
- 遠藤正治『本草学と洋学』思文閣出版、2003年
- 金子和正編著『中国活字版印刷法—武英殿聚珍版程式—』汲古書院、1981年
- 川島慶子『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ: 18世紀フランスのジェンダーと科学』東京大学出版会、2005年
- 塩村耕『近世前期文学研究: 伝記・書誌・出版』若草書房、2004年
- 高橋博巳『江戸のバロック: 徂徠学の周辺』ぺりかん社、1997年
- 高宮利行・原田範行『図説 本と人の歴史事典』柏書房、1997年
- 寺田元一『「編集知」の世紀: 一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』日本評論社、2003年
- 長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙: 不完全な機械の喩』名古屋大学出版会、2001年

- 『トマス・リード：実在論・幾何学・ユートピア』名古屋大学出版会、2004年
- 長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、2001年
- 永嶺重敏『「読書国民」の誕生：明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディタースクール出版部、2004年
- 中山茂『日本の天文学：占い・暦・宇宙観』朝日文庫、2000年
- 名古屋大学大学院文学研究科公開シンポジウム報告書『今、開かれる文庫（ふみくら）の魅力』2005年
- 日本學士院日本科学史刊行会編『明治前日本天文學史』井上書店・臨川書店、1979年
- 日本思想大系43『富永仲基 山片蟠桃』岩波書店、1973年
- 方厚枢『中国出版史話』（前野昭吉）新曜社、2002年
- 堀田誠三『ベッカリーアとイタリア啓蒙』名古屋大学出版会、1996年
- 水田洋『思想の国際転位：比較思想史的研究』名古屋大学出版会、2000年
- 水田洋・長谷川正安・竹内良知『近代社会観の解明：社会科学の成立』理論社、1952年
- 渡辺敏夫『近世日本天文学史（上）：通史』恒星社厚生閣、1986年
- 『近世日本天文学史（下）：観測技術史』恒星社厚生閣、1987年

### 3. 図録

- National Gallery of Art, Washington*, new and revised edition. New York: Abradale Press, 1995.
- National Museum of Scotland. *The Qianlong Emperor: Treasures from the Forbidden City*. Edinburgh: NMS Publishing Ltd, 2002.
- 大阪歴史博物館編『木村蒹葭堂 なにわ知の巨人』思文閣出版、2003年

実行委員

伊藤義人（委員長） 逸村 裕  
秋山晶則 杉山寛行  
塩村 耕 長尾伸一  
早瀬 均 牧村正史  
白井克巳 郡司 久  
伊藤哲谷 藪本大明  
蒲生英博 西尾哲也

調査協力

安藤隆穂 大塚雄太  
川島慶子 斎藤夏来  
高橋博巳 田中育久男  
寺田元一 福田名津子  
堀田誠三 水田 洋  
Norma Aubertin-Potter

名古屋大学附属図書館 2005年秋季特別展

知の万華鏡 —書物からみた18世紀の西洋と東洋—

会期：2005年10月21日(金)～11月11日(金)

会場：名古屋大学中央図書館 4F 展示室

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

共催：名古屋大学大学院経済学研究科、同文学研究科  
日本18世紀学会

特別展講演会

日時：10月22日(土) 13:00～16:00

会場：中央図書館 5F 多目的室

講師：水田 洋（学士院会員、名古屋大学名誉教授）  
逸見龍生（新潟大学）  
井上 進（名古屋大学）

特別展資料講座

日時：11月3日(木) 13:00～15:00

会場：中央図書館 5F 多目的室

内容：担当教員による展示資料解説

本図録の執筆は、本文及びコラム3を長尾伸一、書誌及びコラム1・2を福田名津子、和書誌及びコラム4を秋山晶則がそれぞれ担当した。



名古屋大学附属図書館 2005年秋季特別展

# 知の万華鏡

書物からみた18世紀の西洋と東洋 図録ガイド

発行日 2005年10月21日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL : 052-789-3667 FAX : 052-789-3693

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館